

# 機動戦士ガンダムSEED Urd

めーりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

C・E・70年から始まった地球、プラント間の戦争

お互いがお互いを憎み、撃ち合うその戦争に、最初期から関わる、己の過去を持たない一人の少年が居た。

彼が大天使の名を関する艦と出会ったとき、彼は己の過去と向き合い、そして本当の意味で進み始める。

それは彼の本当に長い戦いの真の幕開けでもあった。



本作は”機動戦士ガンダムSEED”とその続編である”機動戦士ガンダムSEE

D “DESTINY”の二次創作になります。

原作改変なども多数ありますが、お楽しみ頂けたら幸いです。  
批評お待ちしております。

仕事の関係で更新がさらに不定期となります

# 目次

原作開始前

P H A S S E | 0 1

P H A S S E | 0 2

原作開始

P H A S S E | 0 3

P H A S S E | 0 4

P H A S S E | 0 5

P H A S S E | 0 6

P H A S S E | 0 7

P H A S S E | 0 8

P H A S S E | 0 9

P H A S S E | 1 0

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

100

87

78

66

50

37

27

15

9

1

P H A S S E | 1 1

P H A S S E | 1 2

P H A S S E | 1 3

P H A S S E | 1 4

P H A S S E | 1 5

P H A S S E | 1 6

P H A S S E | 1 7

P H A S S E | 1 8

P H A S S E | 1 9

P H A S S E | 2 0

P H A S S E | 2 1

P H A S S E | 2 2

P H A S S E | 2 3

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

|

216

211

206

201

193

187

180

171

162

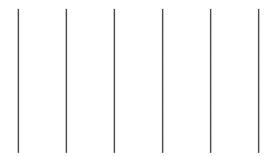
148

140

129

114

P H A S S E  
P H A S S E  
P H A S S E  
P H A S S E  
P H A S S E  
P H A S S E



260 255 247 239 231 225



## 原作開始前

## PHASE—01

C. E. 70に地球、プラント間での交渉の席で起きた爆破テロを切欠に地球連合はプラントに宣戦布告。両陣営はお互いに引けない戦争に突入する。

さらに農業プラントの一つ、ユニウス・セブンに対し秘密裏に持ち込まれた一発の核弾頭が着弾、24万3721名ものコーディネーターが命を落とした。

後に”血のバレンタインの悲劇”と呼ばれた攻撃の報復として、プラントは地球各地に核分裂反応を阻害するニュートロンジャマーと呼ばれる機器を投下、敷設する。

これによる副次効果によりレーダーや無線、誘導兵器を無力化され、地球各地では深刻なまでの電力不足が発生。さらには連合の兵器各種にも多大な影響を与えた。そんな中、驚異的な猛威となったのがプラントの直属軍事組織Z・A・F・T.の運用する人型機動兵器”モビルスーツ（MS）”であった。

Nジャマー化で行われる有視界戦闘に対応し、宇宙空間にて連合の主力となる近接格闘能力を有する亜戦闘機”モビルアーマー（MA）”であるメビウス相手に三対一の性能を誇るとされた。

また、地上の不整地踏破が可能という汎用性の高さもあり、地上での連合の主力であるリニアガン・タンク等相手に善戦。

結果として連合としては各戦線に配備されたZ・A・F・T. のモビルスーツ（MS）の性能は驚異的となっていた。

しかしプラント側としても地球軍のその圧倒的物量は無視できない脅威として認識されていた。

+++++

C・E・70 5月30日

この日地中海に面する地”エル・アラメイン”では死力戦が行われていた。

連合軍は主力戦車”リニアガン・タンク”大隊を用いた物量戦を展開。ZAF T軍は苦戦を強いられる。

そんな中、とある部隊が奇策を用いてこれを撃破しようと試みていた。

+++++

「隊長、こちら準備完了」

まだ若さを感じさせる声がレセツプス級のC I Cに届く。

「隊長、無茶がありますよ！いくら戦線が膠着状態だからってこんな捨て駒、って痛いですって！」



「ダコスタ君、僕は彼なら出来ると思ったからこの作戦を実行するんだよ。君だって彼の腕は知っているだろう?」

そんな声を受けてCICで二人の男が声を交わす。一人はこのレセツプス級の旗艦に据えるバルトフェルド隊の隊長”アンドリユー・バルトフェルド”。バルトフェルドに頭を叩かれながらも抗議をしていたのは、バルトフェルド隊の副官を務める男性”マーチン・ダコスタ”であった。

「ダコスタさん、俺は大丈夫ですから」

「それでも無茶だよ! 敵は大多数で、しかもかなりの切れ者が居るといふ情報だつて入っている!」

スバルと呼ばれた通信相手からの声に思わずダコスタは声を荒げる。

「大丈夫です。隊長とダコスタさんの指揮を信頼していますから。これより作戦に移ります。……隊長、俺のことは最悪、無視しても構いません」

「ツ……。コンディション・レッド発令! バクウ隊各機作戦は頭に叩き込んでいるな? 失敗は許されない作戦だ。じゃあダコスタ君、後の指揮は任せるぞ」

スバルからの通信が切れたと同時に歯噛みしたバルトフェルドが号令を発し、ダコスタの肩を叩く。彼が頷くのを確認したバルトフェルドは、即座にMSハンガーに向かうのであった。

+++++

隊長であるバルトフェルドがコンデイション・レッドを発令した丁度その頃、地中海に面したエル・アラメインにてザフト地上部隊と交戦する連合軍に知らせが飛び込んできく。

「大尉！こちらに接近する機体あり、数は不明ですが熱量からして少数による攪乱かと推測されます！」

「ちつ．．．あと僅かで勝利だと言うのに．．．。予測では少数だったな？。現在の戦力でも十分に迎撃は可能か」

爆音に紛れながらももたらされた報告を受けて一人の男性が頭を回転させる。男の名はモーガン・シユバリエ。現在スエズでザフト地上部隊を迎撃中の連合軍の一つ、ユーラシア連邦の戦車大隊を指揮官であった。

「到達時間からしても十分間に合うな．．．各隊に通達、迎撃に移る！」  
「はっ！」

腕時計ともたらされた報告を確認したモーガンは即座に指示を出すのだった。

+++++

「各車は有効射程まで引きつけろ！前線の様子はどうか！」

「問題ありません！現在敵モビルスーツを翻弄中、我が方の勝利は目前です！」

レーザー通信を通じて報告を受けるモーガン。更に通信が入る。

「敵モビルスーツ急加速！これは……！」

「どうした！」

「敵影確認！敵モビルスーツは1機！かなり速い！」

「たかが一機で何ができる。各車作戦に変更はない！即座に撃破し、その後敵主力を殲滅する！」

通信内容を鼻で笑い、指示を出すモーガン。暫くして正面から砂埃と共に一機のモビルスーツが突撃してくる。

「各車作戦開始！連続斉射で粉碎しろ！撃てえ!!」

モーガンが指示を出した丁度その時、突撃していたモビルスーツのパイロットである青年“スバル・クロムハーツ”は愛機であるシグアサルト特殊仕様の速度をそのままに、右手に持ったM68キャットウス500m無反動砲を発射、更にAMBAACを利用して右にスライドしつつ飛来したりニアガン・タンクの砲弾を回避する。

回避した先にニアガン・タンクが連続斉射。右手に保持したM68キャットウス500m無反動砲で別のニアガン・タンクを狙いつつ、左腕に装備されたシールドでリアガン・タンクの砲撃を受け、直後シールドが爆発する。

「つ左腕。パージ！隊長、予想より少し厳しいですが、作戦通り敵は食らいつきました」  
「あと僅か耐えてくれ。我が方のザウートが予想以上に仕事をしていないせいでそちらへの迎撃に数が出てきてしまったみたいだ」

無数のリニアガン・タンクの砲撃を細かい機体制御と機体の追加装甲を巧みに利用して被害を抑えるスバルだったが、数の暴力に少しずつ追加装甲に被害が開始する。

そしてついに右脚部の追加装甲にリニアガン・タンクの砲弾が直撃、その衝撃で一瞬だけ機体制御が危うくなる。

「予想より被害が出たが、これでトドメだー！」

リニアガン・タンク隊を指揮するモーガンも、いくらカスタマイズされているらしいとはいえ、たった一機のモビルスーツにここまで手こずるとは思わなかったが、脚部への被弾によりバランスを崩したスバル機に照準を完了させる。が、次の瞬間に入った通信に、思わずトリガーを引き損ねることになる。

「大尉！支援を頼みます！敵モビルスーツの奇襲を受け、被害甚大！う、うわああああ！！？」

「何？！コイツは囷か！！」

「報告！接近中のモビルスーツ多数！機種、バクウと思われまます！前線の各部隊と連絡途絶！更に反応多数！包囲されつつあります！指令部との連絡も途絶」

「ちい……！！戦線を放棄！各部隊スモーク全力散布！我に続け！離脱するぞー！」

モーガンにもたらされた通信も直ぐに砂嵐に変わる。別車両からの通信を受けたモーガンは即座に決断、両側面のスモーク・デイスチャージャーを展開し、離脱を開始する。

煙が晴れた頃急行したバルトフェルド隊のバクウのモニターに映ったのは、中破したスバル機と無数の履帯跡だけであった。

「あー……スバル君、生きているかね？」

「ええ、ピンピンしてますとも」

「申し訳ないね、損な役回りをさせたみたいだ」

中破したスバル機に近寄り、バルトフェルドは乗機のバクウ改修型のコクピットで苦笑混じりに通信を入れる。返されたスバルの声はやや疲れ気味だったが、無事そうである心するバルトフェルド。

「アンデイ、嬉しそうね」

「いやなに、僕としても彼からの進言とは言えかなり博打に近い役をさせてしまったからねえ……生き残ってくれてホッとしてるよ」

通信を切り安堵の息を零したバルトフェルドに、砲手を担当していた女性“アイシャ”がからかい混じりに問いかける。

対してバルトフェルドは心底安堵したように息を吐き出しつつ、副官であるダコスタに通信を入れる。

「ダコスタ君、スエズは確保できたのだろうか？ 旗艦を乗り入れさせたまえ。被害報告などはレセップスで聞く。あと、スバル機が中破したからその回収も頼むよ」

「了解です……ってスバル君は無事なんですか!？」

「マーチン君、スバルちゃんは無事ね。不安なら機体收容した後、検査させれば良いですの」

「了解です。全モビルスーツ隊は帰投をお願いします。ジンオーカーパイロットで手が空いた方はスバル機の回収を願います」

バルトフェルドの言葉に慌てるダコスタ。それに対してアイシヤが笑みを浮かべながら進言する。その言葉に落ち着きを取り戻したダコスタは、指示を出すのであった。

+++++

C・E・70 5月30日

後にスエズ攻防戦と呼ばれたこの戦いで、バクウ隊を率いて多大な戦果を上げたアンドリユー・バルトフェルドはそのままアフリカ戦線の司令官に抜擢される事になる。

# PHASE—02



C. E. 70 8月10日

バルトフェルド隊旗艦レセツプスの多目的ルームに4人の人物が集まり、とある紙面を眺めていた。というよりはプラント本国の発行している新聞のとある記事を、と云うべきか。

「これまた派手に喧伝してくれたものだねえ」

「確かにスエズから暫く連戦連勝だったとはいえ、随時派手ですね、隊長」

「マーチン君の言うとうりね、アンディ。これから色々と厄介な事になりそうな気がするね」

苦笑混じりにバルトフェルドが紙面をテーブルに投げ出すと、副官のダコスタ、愛人であるアイシャが同じように苦笑しながら同意する。

紙面にはここ最近のバルトフェルド隊の活躍や、新星を巡る攻防戦の決着。更に各戦線が膠着状態になったなどが記されていた。

「しかし妙ね。スバルもアンディと同じくらい活躍してるのに、一切触れられてないよ。

あんな目立つ機体なのに」

「言われてみたらそうですね。隊長は理由をご存知ですか？」

紙面に目を通していたアイシャが気になった事を指摘する。スエズ攻防戦ではリニアガン・タンク指揮官として有名（これは連合軍側がプロパガンダ的に流した異名）なモーガン・シュバリエと交戦、その後の戦闘でもかなりの数の連合軍のリニアガン・タンクや戦闘ヘリ、スピアヘッド等を撃破している。パーソナルカラーとして居る漆黒のシグー、更にはカスタム機を操っているのにも関わらず一切話題に上がって居ないことに疑問を抱いたダコスタが、バルトフェルドに問いかける。

「あー、スバル君、話しても構わないかな？」

「構いませんよ。俺自身、気にしてませんから」

問われたバルトフェルドが若干躊躇いがちに問うが、問われたスバルはさほど気にしていない、と言う感じに答える。

「まず、第一に彼にはザフト軍に入隊するまでの経歴が一切存在しないんだ。親兄弟に至るまでね」

「……え？」

バルトフェルドの言葉に、ダコスタが理解できない、という感じに反応する。アイシャはバルトフェルドの言葉の意味を理解できたのか、思わずスバルの方に視線を向け



る。

「いいかねダコスタ君。第一世代、つまりは受精卵に遺伝子操作を行うことで誕生するコーディネーターの事をそう指すわけだが、その遺伝子操作も完璧じゃないんだ。極稀に親の望んだ姿形、能力を満たさなかったという理由で親権を放棄する者も居るのだよ。ここまで言えば、彼の出自は分かるだろう?」

「あ……」

バルトフェルドが意図的に感情を排した説明を行う。ダコスタもその説明を受け、スバルがどういう人物なのかを理解した。

「気にする必要はないですよ。俺は、その容姿が望まれた形でなかった結果、名前すら与えられなかった失敗作で捨て駒ですから」

「そんな言い方はやめたまえよ。君の実力を少なくとも僕は理解している」

スバルは何てことない、という風に話すが、バルトフェルドは珍しく険しい顔でそれを窘(たしな)める。

「つまり、スバルちゃんは親が居ないから情報が不透明。下手に喧伝して実はスパイでした、だど大変だと上層部は疑心暗鬼になってるのね。地上に配備されたのもきつとそういう意図がありそうね」

「そんな、横暴じゃないですか!彼は常に隊長の策の……!」

「ダコスタ君、あくまで上層部の要らぬ疑心暗鬼というものだよ。彼は僕の部下、それ以外に必要な事実はあるかい？」

アイシャの呟きにダコスタが過剰に反応する。その反応にバルトフェルドが釘をさす。ダコスタはバルトフェルドの瞳に上層部への憤りが隠されている事に気がつき、浮かせた腰を下ろす。

「スバル君はそれで良いのかい？自分の戦果が評価されてないんだよ？」

「別に興味はない」

それでも抑えきれない部分はあるのか、ダコスタは沈黙を貫くスバルに問いかける。しかし彼の答えは簡潔であった。

「そういえばいつの間にかスバルちゃんの機体、左肩に白い……いや、あれは白銀ね。その毛並みの狼が描かれてたね。誰がやったの？」

「整備士の連中らしい。僕の部隊では随一の二脚モビルスーツ乗り、評価はされずとも我が部隊の一番槍を務めるだけの技量があると言うことで彼等が彼をイメージし、デザインして描いたみたいだ」

アイシャが気分転換とばかりに三週間ほど前からスバル機に現れた変化を、そのパイロットの後ろに回り込んで彼の伸ばされた髪を弄りながら話題にする。

バルトフェルドはそんな彼女の様子に苦笑しながらも答える。スバルの戦果は上層

部に評価されずとも、現場の人員からはしっかりと評価されており、それは特にバルトフェルド隊の主戦力たるバクウを整備する整備士が特に彼を評価していることを知っているからである。

「そういえばずっと疑問だったんですが、何故彼だけシグーアサルト、それもカスタム機の特仕仕様なんです？ 砂漠地帯には不向きだと思いませんか？」

「彼が配備された当日にね、バクウの配備が間に合わなかったのさ……」

ダコスタが今ではあまり気にならない点を問いかける。バルトフェルドは苦笑混じりにスバルが配備された当時を思い出しながら口を開く。

「スバル、それですつと戦闘に参加してるのね。扱い慣れたからつてバクウの配備を蹴ってるね」

「アイシャの言うとおり、彼が一番扱いに慣れてしまったシグーをそのまま使ってるのさ。アサルトシユラウドはボクが申請した。砂漠に合わせたチューンは彼が整備士達に手伝ってもらったみたいだね」

スバルの後ろ髪を三つ編みにしたアイシャがダコスタの問いに答える。バルトフェルドも隊の人員の中では若い世代に当たる彼を考えていたらしく、ダコスタに答える。「さて、と。僕は少し席を外すよ。良いコーヒー豆を手に入れたいからね」

「隊長、あまり羽目を外さないでくださいよ？ ただでさえレセップス艦橋にコーヒーの

匂いが充満するんですから」

「私はもう暫くスバルちゃん弄ってるね。私以上に長くて綺麗な髪だもの、もっともつと気を使わないとダメね」

席を立ったバルトフェルドと、その出立の準備を手伝うために続いたダコスタを見送ったアイシヤはスバルの後ろに回り込むとスバルに立つよう促す。

配備されて以来、妙にアイシヤに気に入られていると理解しているスバルは紙面を手にするとアイシヤに促されるがままにその場を後にするのだった。

## 原作開始

## PHASE—03

+++++

C. E. 71 2月14日

「ふむ……連合で新型モビルスーツ開発、内一機と新型艦が未だに行動中。第八艦隊と新型が合流。で、追撃は”あの”クルーゼ隊、ねえ」

「目的地はどこですかね。やはり連合の本部があるアラスカでしょうか」

夜遅く、日付が変わったばかりレセップスの士官室の一つにてバルトフェルドがプリントで発行された紙面に目を通しながら思索する。副官のダコスタの考えもかなり常識的であるため、バルトフェルドは小さく頷くだけで、何も言わなかった。

北アフリカ方面に在留するバルトフェルド隊には件の新型艦や新型モビルスーツの話題はあまり関係がないことなので、頭の片隅に入れる程度にしておく兩名。

「嫌いな奴とはいえあのクルーゼの隊が追撃してるんだ。こつちまで来ることはないと思いたいねえ」

「ええ。ただでさえテロリストやレジスタンスの存在に悩まされていますから」

「逆らわなければ撃つ気はないのだがねえ……」

現在の問題を思い浮かべ、どちらからともなく深いため息をつく両名。すると控えめに士官室のドアがノックされる。

「入りましたえ」

「新型の最新情報です。どうやら新型艦はこちらに降下する模様」

「ん……やれやれ、君も早く寝たまえ。こちらに来るのならば相手せざるを得ないだろうしな」

報告書片手に入ってきたのはスバルだった。バルトフェルドは彼から報告書を受け取るとそれに目を通すと傍らにいるダコスタに手渡し、席を立つ。

「ダコスタ君も寝たまえ。当直に事情を説明、必要最低限の人員だけ当直に残し、新型艦に備える」

「了解です」

ダコスタに指示を出したバルトフェルドは、一度深いため息をつき、まだ名も知らぬ新型艦に備えて英気を養うことにするのだった。

+++++

C. E. 71 2月15日

北アフリカエリア リビア砂漠

クルーゼ隊の襲撃を受けた結果、第八艦隊の奮戦虚しく連合軍の新造艦“アークエンジェル”はザフト勢力下のアフリカ共同体に降下する事になっていた。

夜半、アークエンジェルCICにアラートが鳴り響く。それと同時にミサイルが飛来。緊急起動した白亜の艦の対空砲が弾幕を形成してミサイルを叩き落とし、さらにフレアが散布されミサイルを逸らしてゆく。

「始めようか。スバル君、君にモビルスーツ隊の一番槍、また任せることになる。あのクルーゼ隊が破壊できなかつた新型艦だ。艦の性能、噂の新型モビルスーツ、GAT-X105ストライクの地上での性能、そのパイロット等謎が多い。無理は禁物だ。そのストライクが出てきたら出てくれ」

「分かっています。できる限り情報を引き出してみます」

ミサイルを見送りつつ指揮車からバルトフェルドが双眼鏡でミサイルを迎撃する新型艦を見据え、指示を出す。

部下が無線機に指示を伝えるとザフトの戦闘支援ヘリ“アジャイル”が新型艦に向かいつつ有線制御ミサイルを放ち離脱してゆく。

「隊長！出てきました、情報にあったストライクです！」

「スバル、先手を打ったらバクウ隊に今回は任せてみてくれ。バクウ隊、何時もの戦術でな！」

アークエンジェルから一機のモビルスーツが発進、砂漠に降り立つ。それを確認したバルトフェルドは、モビルスーツ隊に指示を出す。

「了解！」

部下達の返事を聞きつつ、バルトフェルドは双眼鏡を再び覗き込むのだった

+++++

「ストライクを確認。各機、仕掛けるぞ」

「了解！」

ランチャーストライクが砂漠に脚を取られているのを確認したスバルはバクウ隊に先駆けて突撃、ストライクの肩を足場にして前方に跳躍する。

「ぐうう……」

ストライクのパイロット“キラ・ヤマト”は襲い来る衝撃に呻くしかない。更にスバル機に続くように2機のバクウが通過、更にもう一機がミサイルを放つ。

「あれは……！」

新型艦“アークエンジェル”の艦長を務めることになった地球軍の士官“マリュー・ラミアス”はその4機の機影に目を見開く。

「キラ……！」



「ZGMF—515、TMF/A—802、ザフト軍モビルスーツ、シグーならびにバクウと確認！」

「なっ……バクウだど!？」

オペレーターを務める少女”ミリアリア・ハウ”が思わず、と言う具合に声を上げ、ICの一角に座る青年”サイ・アーガイル”が機種を判別する。

副艦長を務めることになった女性”ナタル・バジール”は判別した機種に驚きを隠せない。

「くっ……!」

ランチャーストライクが背面の320mm超高インパルス砲”アグニ”を構え、その砲身からコロニーすら破壊可能なビームを連射する。

「回避行動を行いつつ各機散開、フォーメーションで叩く!」

「宇宙じゃどうだったか知らないがな……」

「地上じゃこのバクウが王者だ……!」

スバルのシグーアサルトが砂丘に隠れるように回避し、バクウはその脚部に搭載された無限軌道による機動性を見せつけるようにアグニの砲撃を回避、2機の450mm2連装レールガンを撃ち放ち、更にもう一機が攪乱する様な軌道でランチャーストライクを翻弄する。

「スレッズジハマー、撃て！」

「ストライクに当たります！」

「フェイズシフト装甲がある！このままではどうにもならん！」

見かねたバジルールがフェイズシフト装甲の利点を利用し、ミサイルの発射指示を出す。

「ミサイルだ！回避しろ！あのコースならストライクにも当たる可能性がある。俺はあの新型艦の牽制に回る。ストライクは任せる」

「了解」

ミサイルが放たれ、それを確認したスバルが指示を出す。バクウ各機が離れると同時にストライク周辺に着弾する。

「パイロットに優しくない指揮官だなあ……それとも信頼しているのか？にしても良いモビルスーツだ。それにパイロットの腕も良い。が、所詮は人型、この砂漠でバクウに、彼以外に二脚型で勝てるのを僕は知らんよ」

バクウの波状攻撃に対応するランチャーストライクを双眼鏡で見ながら評価するバルトフェルド。

「少佐のスカイグラスパーはまだ出られないの!？」

「それが例のシグーの攻撃が激しく、仮に出そうとしても出た瞬間落とされる可能性が高いです！」

ストライクの苦戦に焦りを隠せないマリユー。しかしアークエンジンにはバルトフェルドの言う例外”スバル・クロムハーツ”がシグーアサルトに搭載されたグレネードランチャーで牽制しており、そちらの対処で手一杯という風で、ストライクの支援に回ることができないでいる。

「いい加減に……！」

何度攻撃しても撃破できないストライクに痺れを切らせたミサイルポッド装備のバクウが至近距離からミサイルを叩き込もうと飛びかかる。

「何っ!？」

しかし咄嗟に砂の接地圧に運動プログラムを対応させたストライクが膝蹴りでバクウを迎撃する。

「いっつ……！」

その背後から450mm2連装レールガン装備のバクウが強襲する。しかしそれをランチャーストライクはアグニの砲身で迎撃、バクウはひっくり返るように吹き飛ばされる。

「ひっ……」

レールガン装備のバクウパイロットが最後に見たのは、月明かりに照らされたアグニの砲身から放たれたビームの光であった。

「あの短時間で運動プログラムを砂地に対応？おいおいおい、アレに乗っているのは本当にナチュラルか？レセップスのダコスタ君に砲撃指示だ！スバル、バクウ隊の支援に回ってくれ。アレはただの機体じゃない、気をつけてかれ！」

「了解です」

「了解」

双眼鏡でバクウの撃破を見ていたバルトフェルドは考えを改める。副官と砂地でバクウ隊に対抗できる数少ない例外たる少年に通信を入れる。両名からの了承を受け、バルトフェルドは再び双眼鏡をのぞき込むのだった。

「南西より熱源接近！」

「離礁！緊急回避！」

「砲撃だ?!？」

「本艦より南西20キロ地点と推定！」

「本艦の攻撃装備では対応できません！」

レセップスの40cm2連装砲二門からの砲撃に急ぎ対応するアークエンジェルク

ルー。そこに格納庫から通信が入る

「俺が出て敵艦をレーザーで照射する！それを元にミサイルを撃ち込め！それまで当たるなよ！」

「シグーに牽制射！ウオンバット、てえー!!」

スカイグラスパーに搭乗したムウ・ラ・フラガからの通信でバジルールが即座にシグーに向けて大気圏内用のミサイル発射指示を出す。

「ちっ……」

「進路クリア、フラガ機発進どうぞ！」

襲い来るミサイルにスバルは素早く対応、回避行動をとりつつ右手に装備したM7070 28mmバルカンシステム内装防盾と左手のMMI-M7S 76mm重突撃機銃で弾幕を形成、ミサイルを迎撃するが、その隙にスカイグラスパーが発進する。

「ん？アレは報告になかった機体だな。第八艦隊からの補給か？だがスバルを警戒しているなアレは。なら、アジャイルはバクウ隊の支援に回れ！」

「第二波接近！」

「回避！上げ舵20、取り舵15！総員衝撃に備えて！」

「直撃、来ます！」

スカイグラスパーを確認したバルトフェルドは一人呟きつつも指示を出す。一方

アークエンジェルはレセップスの第二波砲撃が襲いかかっていた。

「……………」

キラの瞳から虹彩が消え、ランチャーストライクが動く。120mm対艦バルカン砲で目くらましを行い、襲い来るミサイルポッド装備のバクウにシオルダータツクル、その反動で自ら離れるとレセップスの砲弾目掛けてアグニを二連射、砲弾を撃墜する。

「確かに凄まじい性能の機体だが、情報だとそろそろパワーダウンのはず。沈めさせてもらう。残りのバクウも出せ。レイラムの敵討ちといこう。スバルは？」

「現在アークエンジェルから放たれるミサイルを迎撃、あの戦闘機を牽制しつつストライク側へ移動中です」

手元の端末にデータを打ち込みつつバクウ隊に指示を出す。スバルはアークエンジェルから断続的に放たれるミサイルを弾薬を抑えつつ迎撃していた。その間にアジャイルはバクウ隊の支援に回る。

「ストライク、エネルギー危険域です！」

「くっ…………アグニを撃ちすぎた…………！」

そしてストライク・アークエンジェル側ではバルトフェルドの読み通り、ストライクのパワーが危険域に達していた。

「何……?」

突如飛来したミサイルがアジャイルに直撃、撃破する。砂漠の向こう側から砂埃と共に複数の車両がミサイルとガトリング砲を放ちながら接近してくるのをスバルのシグーが捉える。

「隊長……！明けの砂漠の連中だと思われませう」

「ちい……！地球軍のモビルスーツを助ける気か！」

レジスタンスの思わぬ介入に舌打ちするバルトフェルド。まさか連中が地球軍の味方をするとは予想だにしていなかった為、彼にしては珍しく素早い指示が出せなかった。

「隊長、バクウ隊とアジャイルが！」

「なっ……！レイラムをやられて頭に血が上っているのか……！」

レジスタンスの車両に導かれるようにストライクが移動を開始、それを追撃するように追加した分も含めて三機のバクウと4機のアジャイルが移動を開始する。その僅か後、指揮車に乗るバルトフェルド、シグーに乗るスバル両名の目に、凄まじい爆風が目に映る。

「スバル、残存部隊を纏めてレセップスまで撤収だ」

「……了解」

バルトフェルドは普段とは僅かに反応が鈍かったスバルの応答に、残存部隊がスバルの機体一機のみであったと理解する。

こうして彼等バルトフェルド隊とアークエンジェルの初戦はバルトフェルド隊の大敗という形となるのだった。



## P H A S E — 0 4

+++++

C. E. 71 2月15日 昼過ぎ

レセップス士官室

「ダコスタ、入ります」

「ま、逆らわなければ撃たないっていうこちらの意思を無視してるんだ、やりたくはなかったけど撃たれたって仕方ないよね。今までだって逆らわなければ撃たない、逆らえば撃つって姿勢は見せてきたわけだしね」

+++++

C. E. 71 2月16日 明朝

「双方に死者はなしです隊長。向こう側に軽い火傷などをした者が居る程度だと思えます。スバルはレセップスで新しい装備のフィッティング中だと連絡が。動かしたバクウ隊にも被害なしです」

「ここでの戦闘目的は達した。レセップスに帰投する」

明けの砂漠 本拠地タツシルに貯蔵されていた武器、弾薬、燃料が、事前警告の後、バ

ルトフェルド隊のバクウにより焼き払われる。

追撃してきたレジスタンスと400mm13連装ミサイルポッド装備のバクウ三機が交戦。途中、参戦したストライクと交戦した結果、一機が撃破、途中からバルトフェルドに操縦を変わった一機が小破する

+++++

C. E. 71 2月20日 バナディーヤ

「あいや待った、ちよつと待った！ケバブにチリソースだなんて何を言ってるんだ。この、ヨーグルトソースを掛けるのが常識だろうが」

「はあ？」

「いや、常識というよりも、もつとこう・・・そう！ヨーグルトソースを掛けないなんてこの料理に対する冒涇だよ」

バナディーヤを訪れたアークエンジェル。その買い出しの最中、カガリと護衛役のキラの前に現れた怪しい人物。

ポカンとするキラの前でカガリはチリソースをかけた食べ物（ドネル・ケバブ）にかぶりつく。怪しい人物は頭を抱えるが、カガリがキラの前に置かれたケバブにチリソースを掛けようとすると、手に持ったヨーグルトソースを突き出してそれを阻止しようとする。

「……?」

(結局チリソースとヨーグルトソースがミックスする事になったケバブをチマチマと食べながら) キラはふと、怪しい人物に付き従うように立つ人物(その人物もサングラスをしている)にふと目を見やる。

「ああ、彼? 僕の知人だよ。髪がそちらのお嬢さんよりも長いけど、歴とした男性さ」

「大体お前は……」

「伏せろっ!!」

その視線に気がついた男性がにこやかに説明する。そんなマイペースな男性にしびれを切らせたカガリが嘔みつこうとするが、次の瞬間に男性がテーブルを蹴り上げ、立っていた髪の毛長い男性が咄嗟に動いていたキラごとカガリを押し倒す。

そしてその直後、地に伏せた4人の頭上をロケット弾が通過、辺りは一気に喧騒に吞まれる。

「大丈夫かね?」

「何なんだいったい……」

ソース塗れになったカガリがやや呆然とした声音で問いかける。キラの目の前で銃器を取り出した二人は、蹴り上げたテーブルを盾に向こう側を伺う。

「死ねコーディネーター!! 宇宙の化け物め!!」

「青き清浄なる世界のために!!」

カガリの呆然とした問いへの答えは襲撃者が無数の鉛弾と共に答えてくれた。

「ブルーコスモス!?!」

「構わない!!スバル、排除しろ!!」

男性が(いつの間にか居た)他数人とテーブルの陰から銃を撃ち返しつつ指示を出す。襲撃者が銃弾から身を守るように身を隠したその瞬間、髪の高い青年が動いた。

「ぎっ!?!」「があっ!?!」「げうっ!?!」

男性から投げ渡されたナイフを片手に、左手の銃が火を噴き、投げ渡されたナイフがその手を離れた瞬間、二人の襲撃者の眉間からそれぞれ血が吹き出る。

その時キラは背後から迫るもう一人の襲撃者の手に、拾った銃を咄嗟に投げつけていた。青年の左手の銃が火を噴き、その襲撃者の眉間に風穴を空け、漸く辺りに静寂が訪れる。

「隊長!スバル!無事でしたか!?!」

そんな静寂を切り裂くように、また一人の男性が、怪しい風貌の男性に歩み寄る。いつの間にかスバルと呼ばれていた青年も、男性のそばに立っている。

「私は平気だよ。彼にも助けられたからね」

「あ、アンドリユー・バルトフェルド。それにスバル・クロムハーツ……」

軽く服を叩いていた男性が帽子とサングラスを取る。青年もサングラスを外すと、キラの傍らに居たカガリが身を堅くして彼らの名を呆然と呟く。

「砂漠の虎……そして闇夜の銀狼……」

「いやあ、助かったよ。ありがとう」

そんなカガリの様子を気にした風も見せず、怪しい服装をしていた男性「アンドリユー・バルトフェルド」は二人に笑みを浮かべるのであった。

+++++

あれから二人（と言うかカガリが黙りっぱなしだったため、実質キラ一人）はバルトフェルドの口車に押し通される形で彼の館に招待される事になった。

無論、キラは遠慮したが、バルトフェルドに押される形でなし崩しに館に入ってゆく。

「この子ですの？アンディ」

「ああ、彼女、どうにかしてやってくれ。チリソースとヨーグルトソースとお茶を被つちまったんだ。スバル、少年の案内、頼むぞ」

館に入ったキラ達を迎えたのは一人の女性だった。バルトフェルドの言葉に納得すると、カガリを連れて行く。呆然とするキラをスバルと呼ばれていた青年が促し、バルトフェルドが居るであろう部屋に案内する。



「僕はコーヒーには少しばかり自信があつてね。ま、掛けたまえよ」

スバルの案内の元、部屋に入ったキラを出迎えたのは、濃厚な香りと、妙に楽しげなバルトフェルドだった。

「エヴィデンス01。実物を見たことは？」

「いえ」

「これが外宇宙からの、つてのは別に良いんだ。僕が言いたいのは何故これを”くじら石” っと呼ぶか疑問に思わないのかつて事なんだ。だつて、これは宇宙で見つかったんだよ？何故”くじら” なんだろうねえ」

暖炉に立てかけてある物にキラが視線を向けると、バルトフェルドは思わせぶりな笑みを浮かべる。

「僕はこのエヴィデンス01を厄介だと思つてるんだ。これを見つけちゃったから、人はまだもつと”先” に行ける希望、つていうか可能性が出てきちゃつてる訳だし」

コーヒーを飲みながらバルトフェルドは語る。その内用にキラはどう、答えたらよいのか分からなかった。

「人はまだ先に行ける、この”戦争” の一番の根っこだと僕は思つてる」

「アンデイ」

締めくくったバルトフェルド。するとドアがノックされ、先ほどカガリを連れて行った女性の”楽しそうな”声が聞こえる。スバルがドアを開けると、思わずキラも言葉も失った。

女性の後ろには、恥ずかしそうなカガリが立っていた。何故か軽い化粧まで施され、ドレス姿で。

「女……の子……?」

「てんめえ……」

「いや、だっただよねって言おうと」

「同じだろそれじゃ!!!」

キラの茫然自失とした言葉にカガリの額に青筋が浮かぶ。慌てて言い繕えば、それは彼女の怒りを煽る結果にしかならなかった。漫才じみたやりとりをする二人を見て、バルトフェルドは楽しそうに笑みを浮かべる。後ろではカガリを連れてきた女性も楽しそうに笑っていた。

+++++

「うーむ、実にドレス姿も似合ってるな。スバル、どう思う?」

「喋らなければ完璧でしょうね」

「(あれ? 僕の声に少し似てる……?)」

結局キラとカガリはバルトフェルドに言われるがまま、彼の対面に座る。バルトフェルドはコーヒーを飲みながら、言いくるめて隣に座らせたスバルに話題を振る。簡潔に答えたスバルの声に、キラは僅かな違和感を感じる。

「良い目だね。真っ直ぐで、実に良い目だ」

「ふざけるなっ!!」

「カガリ!」

カガリがバルトフェルドに問いかけるが、当の彼ははぐらかすような答えを返すのみ。この短い間で把握したカガリの沸点の低さから、彼女は少し声を荒げる。

「そっちの彼。君はどう思う? どうしたらこの戦争は終わると思う? モビルスーツのパイロットとしては、さ」

「お前どうしてそれを……!」

そんなカガリから視線を変えたバルトフェルドの問い。それに思わずカガリは声を上げ、キラは顔を俯かせる。

「……あまり真っ直ぐ過ぎなもの問題だと思うが」

「だねえ。……戦争には制限時間も得点もない。スポーツの試合のような、ね。ならばどのように勝ち負けを決める。どこで終わりにすればいい?」



呆れた様なスバルの一言に、笑いながら立ち上がったバルトフェルドは部屋の片隅にあるチェストに歩いてゆく。バルトフェルドの真面目な声音に、思わずキラはカガリを背後に庇うように対角線に立つように位置を変える。

「敵であるモノを全て滅ぼして、かね？」

振り向きながらバルトフェルドが向ける無骨な拳銃。それにキラは思わず息をのむ。

「止めた方が賢明だよ、少年。いくら君がバーサーカーであろうと暴れてここから無事に脱出出来るものか。第一、君はスバルのあの動きを見ていたはずだ。仮にスバルを抜けたとしても、ここに居る者は君と同じ、コーディネーターだぞ？」

「え……？」

銃を突きつけたまま発せられた言葉に、カガリが反応する。何も言えないキラは、話すバルトフェルドの拳銃に警戒しなければならなかった。

「君の戦闘は二回見た。砂漠での接地圧の変更、熱対流のパラメータの把握と調整。君はモビルスーツの技術だけでいえば、そこにいるスバルと極めて近い技量を持っているようだ。補足しておく、スバルは同胞の中でも優秀な部類の人物だよ」

拳銃を突きつけたまま、バルトフェルドは語る。その内容に、思わずカガリは座ったままのスバルと呼ばれた長髪の年を見やる。

「それ程の技量を持つパイロットをナチュラルだと言われて”ハイそうですか”と納得

できるほど私は暢気ではない。君が何故、我々同胞と敵対する道を選んだかは知らんが……あのモビルスーツのパイロットである以上、君は私の敵だという事だ」  
険しい表情のキラに拳銃を突きつけたまま、バルトフェルドはいう。カガリもスバルと呼ばれた青年に注意を払うしか、今は出来ることはない。

「やはりどちらかが滅びなくては、ならんのかねえ。……と、まあ色々言ったが、ここは戦場ではないし、君は間接的とは言え命の恩人だ。帰れたまえ。良かったかはどうかは分からないが、話せて楽しかったよ。アイシヤ、見送つてやつてくれ」

どこか達観した表情でバルトフェルドが拳銃を下ろす。内線を押したのか、アイシヤが現れ、バルトフェルドが苦笑混じりに別れを切り出す。

「また、戦場でな、少年」

部屋を出る直前、キラの耳にバルトフェルドのそんな言葉が聞こえた気がしたのだ。た。

# PHASE—05

+++++

C. E. 71 2月26日

「バルトフェルド隊、隊長のアンドリユー・バルトフェルドだ」

「クルーゼ隊、イザーク・ジュールです」

「同じく、ディアツカ・エルスマンです」

「宇宙から大変だったな、歓迎する」

「ありがとうございます。それと傷に関しては触れないください」

「足つきの動きは？」

宇宙からジブラルタルに降下したクルーゼ隊の二名がバルトフェルド隊に合流する。軽い笑みを浮かべるバルトフェルドにディアツカが問いかける。

「もうじき最新の報告がくるよ」

「隊長。無人偵察機からのアークエンジェルの最新情報です」

「聞こうか」

「アークエンジェルの現在地はここから南東に180キロ。レジスタンスの基地にいます」

笑みを浮かべるバルトフェルドの元にスバルが歩み寄り、報告を行う。

「バルトフェルド隊長は既に連合のモビルスーツと交戦したと聞きましたが」

「ああ。それに私以外に、彼も実際にヤツと交戦し、戦闘を実際に見ているよ。にしても僕も、クルーゼ隊を笑えんね」

デュエルとバスターを見上げるバルトフェルドにディアツカが問う。バルトフェルドは少しだけそのモビルスーツのパイロットと出会った時を思い出しつつ、答えるのだった。

+++++

C. E. 71 2月28日 レセップスCIC

「動き出したって?」

「はっ。北北西に向かい進行中です」

「予想通り、タルバディア工場跡地に向かっていますね」

「ま、此処を突破しようと思えば僕が向こうの指揮官でもそう、動くだろうな」

イザークとディアツカがバルトフェルド隊に合流して二日、ついにアークエンジェルが動いたと報告が入る。もたらされた情報から、バルトフェルドは敵艦の艦長が優秀な

戦術眼を持つと理解する。

「もうちよつと待つて欲しかったが、仕方ない。コード02。ピートリーとヘンリーカーターに打電しろ。仕掛けるぞ」

+++++

「ピートリー、スコープオン隊、準備完了」

「ヘンリーカーターはどうか」

「敵に察知された様子はありません」

レセップスCICでは着々と作戦準備を完了させつつある。報告を受けるダコスタは、頷く。

一方のアークエンジェルはレジスタンスの仕掛けていた地雷原があつさりと爆破され、周囲を警戒。その上空よりアジャイルで構成されたスコープオン隊が襲いかかる。

「上空より熱量多数。錯乱激しく数不明！一時半の方向です！」

「さらに後方に大型の熱量二！敵空母、駆逐艦かと思われます」

「対空、対艦、対モビルスーツ戦闘！迎撃開始！」

「ストライク、スカイグラスパー発進」

CICからの報告を受け、アークエンジェル側も戦闘態勢を整える。さらに前方に展開するレジスタンスも、氣勢を上げて戦闘態勢をとる。

エールストライクとスカイグラスパーランチャーストライカー装備が発進。先制とばかりに上空からアジャイルが有線式ミサイルをアークエンジェルに放ち、ガトリングを放つ。

スカイグラスパーとストライクが機関砲でアジャイルを落としていると、レセツプスから発進したバクウが戦闘距離に接近する。こうしてバルトフェルド隊とアークエンジェルの最終決戦の火蓋が今、落とされたのだった。

+++++

レセツプス格納庫。そこに二機のモビルスーツが発進準備を整えていた。それぞれの足元にバルトフェルドとアイシャ、そしてスバルが立っている。

「バルトフェルド隊長！何故我々の配置が、レセツプス艦上なのです！奴らとの戦闘経験なら我々の方が！」

「負けの経験でしょ？」

「アイシャ。……まあ、言いたいことはあるが、君達の機体は砲撃戦仕様だ。高機動戦闘をするバクウには着いて来れまい？」

合流したクルーゼ隊のイザークが、配置に意見を言いに来る。アイシャが茶化すが、バルトフェルドは彼等をレセツプス艦上に配置した理由を簡潔に述べる。

「だったらヤツは！あのシグーはどのようなのですか！あの機体も我々と同じ、特に私の機体と同じアサルトシユラウドを装備している！なのに何故奴は前に出れるのです！」

「あの機体をただのシグーアサルトと同じにするなよ。あれは本来ならば、我々バルトフェルド隊の一番槍を担当する機体だぞ。見かけに騙されるな」

正論すぎる内容に、イザークは思わず口ごもる。しかし納得できない部分の説明を求める。バルトフェルドもその質問は予測していたらしく、やや皮肉気味に笑いながら、スバルのバルトフェルド隊での立ち位置を教える。

「しかし……！」

「イザーク、もうよせ！上官の命令だぞ。……失礼しました」

なおも納得できなさそうなイザークをディアツカが、肩を掴んで止め、二人はその場を後にする。

「あの少年のような真似、誰にでも出きるわけではないだろうしな。スバル、準備は良いな？」

「問題ありません」

バルトフェルド、アイシヤ、スバルの三名は各々の機体に取り込み、発進体勢をとる。では、艦を頼むぞ。ダコスタ君。さて、バルトフェルド、ラゴウ出る！」

「了解。続いてスバル機発進どうぞ」

「了解。スバル・クロムハーツ、シグーアサルト、発進する」

まずバルトフェルドとアイシャが搭乗するバクウの強化発展機であるラゴウが発進する。その性能はバクウの強化発展機に相応しく、一気に加速してゆく。さらに続いて発進したのは漆黒のシグーだった。カスタマイズを加えた追加装甲“アサルトシユラウド”を装備し、調整を終えた特殊装備を脚部と腰部に装備。砂漠に降り立つと同時に、先のラゴウに劣らない機動力でレセップスから離れてゆく。

「んだよありゃあ……」

「なんだ、あれは……」

その重装備に似合わない加速性能に、レセップス艦上に出たイザークとディアツカは唖然とする。

「艦長、ヘンリーカーターが配置につきました」

「よし。それにしてもなんとという火力だ。ピートリーの被害は！」

「機関区に被弾しましたが、なんとかダメージコントロールが間に合いました。作戦に支障はありません」

「スバル、あの戦闘機を近寄せさせないでくれ！ヤツの火力はストライクに匹敵する！」

「了解した」

レセップスで指揮をとるダコスタは、二機の発進直後に僚艦のピートリーに大打撃を



与えたスカイグラスパーを警戒していた。故に隊長であるバルトフェルドのラゴウにストライクを担当してもらい、スバルのシグーアサルトにあのスカイグラスパーを担当してもらったことにした。

ラゴウは敵の装甲に通用するビーム兵器が搭載されている。ならばいくら機動力があるとはいえ実弾オンリーのシグーアサルトには戦闘機を落としてもらう方が効率的だと判断したのである。

+++++

戦局が大きく動いたのは戦闘が始まってしばらくしてからだった。

「敵艦より支援機、更に発進を確認!!」

「何?! スバルさん!!」

工場跡地に予め仕掛けられていたワイヤーで動けないアークエンジェルを助けようと、アークエンジェルに乗り込んだカガリがソードストライカーを装備したスカイグラスパー二号機を発進させ、手負いのピートリーに向かう。

「行かせるか……!ちっ!バカやろう!俺まで落とす気か!!」

「わ、わりい」

即座にアークエンジェルとスカイグラスパー1号機を抑えるように戦闘を行っていたスバルが反応。スカイグラスパー2号機を追うべく機体を反転させるが、レセツプス艦上からしびれを切らしたディアッカのバスターが放った対装甲弾砲がアークエンジェルを拘束していたワイヤーを破壊し、スカイグラスパー2号機を追おうとしていたシグーアサルトの足元に着弾、思わずスバルも怒鳴ってしまう。

「面舵60！ナタル！」

「ダコスタ！回避しろ!!」

「ゴットフリート照準！てええ!!」

スバルの警告虚しく、放たれるゴットフリート。咄嗟に艦上から回避したバスターこそ当たらなかつたが、同じく艦上で砲台の役割を果たしていたザウートと40cm2連装砲塔を貫く。

「いっつで!!」

発進後ピートリーの砲塔二つを対艦刀でぶった斬ったカガリ操るスカイグラスパー2号機がレセツプスに接近する。アークエンジェル側からの砲撃による被害もあり、レセツプスの対空性能はがた落ちしていた。

「させるか……!」

砂漠に慣れていない二機の新型、バスターとデュエルを傍目に突撃を緩行しようとし

たカガリ機の下から、スバルのシグーアサルトの左手に保持されたキャットウスから放たれた榴弾（HE）がスカイグラスパーの翼付近に着弾、カガリ機は追撃を受けないように後退する。

「ダコスタ、無事か!？」

「私達は無事だ！隊長から後退命令が．．．いや、それより隊長の援護を！」

通信状態の悪いレセップス側からダコスタの指示が出る。その切羽詰まった声から、状況の悪さを悟ったスバルは、即座にラゴウの方に向かう。

+++++

「バルトフェルド隊長!!」

スバルのシグーアサルトがその場に到着したとき、それはまさに隊長、アンドリュール・バルトフェルドの機体のコクピット付近に、フェイズシフトダウンを起こしたストライクのアーマーシユナイダーが突き刺さった所だった。

「．．．スバル．．．君も．．．撤退を．．．アイシャ．．．」

「バルトフェルド隊長おおお!!!」

今までザフト入隊までの記録を得られなかったが故に真つ当な評価がされなかった自分。そんな己を真つ当に評価し、戦闘以外のイロハを教えてくれた隊長の最後の言葉は、一人の指揮官としての命令だった。しかし．．．

「あ、あああ!!!」

今までバルトフェルドの命令に背いたことのない男の最初の”命令違反”はそんな最後の言葉だった。

「ぶっ殺す!!! ストライクうう!!!」

産まれて初めての本能任せの殺意。それに反応したのか、惚けたように座り込んでいたストライクが振り向く。

「今ならてめえもコレでぶち殺せるンだろおお!!!」

運悪く、と言うべきかムウ・ラ・フラガのスカイグラスパー1号機と戦闘していたため、射撃兵装はなし。しかし、そんな機体に唯一使われずに装備されていた武器があった。シグーの基本兵装であるMA-M4 重斬刀である。”本来”のストライクなら無傷で切り抜かれる実体剣だったが、それはフェイズシフト装甲があつてこそ。

フェイズシフト装甲がなければ実弾なども通じることが分かっている為、スバルは殺意と共に”あの”ラゴウに匹敵する加速力を見せつけながら突撃する。

「死いいー! ねええ!!!」

「くっ……」

ここまでくればストライク（つまりは茫然としていたキラ）も、シグーアサルトが本気でこちらを撃破しようとしているのが分かったのか、咄嗟にラゴウを撃破するとき

投げ捨てたシールドに飛びつき、それを掲げる。

「ちっ……」

「くう……!」

シグーアサルトもバッテリーの残りが少ないのか、掲げられたシールドに重斬刀跳ね上げられたため、咄嗟に背後に跳ぶ。

「キラ君を援護して!」

「バリアント、てええ!!」

「邪魔を……!」

「つて、坊主とストライクは!まだ回収出来ないのか!」

キラの現状に気がついたマリユーが指示を出す。放たれた副砲“バリアント”を脚部と腰部以外の追加装甲をパージして機体を軽くしたシグーアサルトが回避する。その時、スカイグラスパー1号機に乗っていたムウがブリッジに入る。

「敵のシグーと交戦中!ストライクはフェイズシフトダウンを起こしています!」

「レジスタンスは!」

「弾薬がもうないそうです!」

ムウの問いかけにミリアリアが悲鳴混じりに答える。そしてムウがスバルのシグー

を見たとき、思わず唾然とする。

「イーゲルシュテルンでもなんでもいい！坊主、ヤツを近寄らせるな！」

「少佐!?!」

「畜生！なんで今まで忘れてたんだ俺は！あの”砂漠の虎相手だったんだ。ヤツも居るに決まってるじゃねえか！」

咄嗟にミリアリアの通信機をひったくり、ストライクに連絡するムウ。

「少佐、あの機体は……?」

「詳しい話しは後だ、絶対にヤツを坊主に近寄らせるな！」

「分かりました。キラ君、アークエンジェルに帰投を急いで！支援する、ウオンバット、てええ!!」

ムウの険しい表情にマリユも決断する。艦の各所から大気圏内用のミサイルが放たれ、ストライクが走ってアークエンジェルに向かう。

「逃がすか!!!」

「バカな……!!あのミサイル群の中を突っ切った!?!」

逃げるストライク目掛けて襲いかかるスバルのシグー。襲い来るミサイル群によりダメージを完全に無視して突き進む機体に、バジルールが驚愕する。

「ヤツの進路上にミサイルを叩き込め！坊主は！」

「たった今収容しました！」

「艦急速浮上！ウオンバット、バリアント、てええ!!！」

ストライクが格納庫に収容されると同時に、アークエンジェルは急速浮上、更に足止めミサイルとリニアカノンを叩き込み、離脱してゆく。残されたのは機体各所から火花を散らせる漆黒のシグーだけであった。

こうしてアークエンジェルと砂漠の虎、アンドリユー・バルトフェルドの決戦は、艦レセツプスの大破を初めとしてザフト側の大敗という結果で終わるのであった。

## PHASE—06

+++++

C・E・71 3月5日 ジブラルタル基地

バルトフェルド隊壊滅後、ディアツカ・エルスマン、イザーク・ジュールの両名と共にジブラルタル基地に出向したスバルは、一人格納庫で修理を終えた愛機のフィッツティングを行っていた。そんな彼の元を一人の男が訪れる。

「君がイザーク達と共に来てくれたパイロットか。私の名はラウル・クルーゼ。クルーゼ隊の勤めている」

「スバル・クロムハーツ。」<sup>二</sup>「バルトフェルド隊所属のパイロットです」

訪れた仮面の男、クルーゼに手を止めて向き直るスバル。あの人当たりの良いバルトフェルドが嫌っている人物を見て、スバルもまた「あまり信用できない」と判断する。

「足つきとの戦闘でイザークやディアツカが迷惑を掛けたと聞いてね。隊長の私が謝罪に来た。バルトフェルド殿の事は本当に惜しいと思うよ」

「いえ。隊長も覚悟は決めていたと思いますし、彼等にしても機体特性をもっと生かした作戦を建てるのが出来たのではないかと、愚考します」



(珍しく)クルーゼが肩を小さく落とし、謝罪する。スバルも少しだけ割り切れた部分もあるため、首を小さく振って否定する。

「君はこれからどうするのかね?」

「機体のフィッティングが完了しだい、此処ジブラルタル基地に配属になると思います」  
 「もし……君さえ良ければクルーゼ隊に出向、と云うのはどうかね? 君もまだ、足つきやストライク相手に割り切れていない部分があるとみえる」

クルーゼの言葉に、少し顔を強ばらせるスバル。クルーゼの指摘は紛れもない事実、痛い点を突かれたからである。

「イザークやディアツカは足つきを追いみたいだろう。だが、実はオペレーション・スピットブレイクの準備で私は動けない。ゆえに君に彼等の補佐をしてほしいのだよ」

「……彼等が私の言うことに耳を貸すとは思えません」

「そこは私が厳命する。受けてくれないかね? 少し不安なのでね。君は若くしてバルトフェルド殿に重用されていた。その事実を私はきっちり理解しているつもりだ」

悩むスバルにクルーゼは言葉を重ねる。少し思案していたが、スバルはその要請を受諾するのだった。



「アスラン、君に隊を任せる。カーペンタリアで母艦を受領、足つき追撃を行いたまえ」

「隊長……」

「不安だろうから私から補佐を要請した。イザークやディアツカは既に彼を知っているだろう」

「なっ……」

「マジかよ……」

クルーゼの言葉と共に入室したスバル。彼の登場に、イザークやディアツカは言葉を失う。

「隊長、彼は……」

「スバル・クロムハーツ殿。宇宙ではさほど有名ではないらしいが、”闇夜の銀狼”の異名を持つエースの一人だよ。君達の一期前のトップガンで先輩でもある。あまり知られていないがスエズ攻防戦で砂漠の虎ことバルトフェルド隊長が大金星を上げることができた立役者だ。その彼に補佐を私が要請した。彼の言葉に耳を傾けることを進めるよ……恐らく、同じ機体条件で君達が彼と戦えば分が悪いのは君達の方だと私は考えている。私でも条件次第では厳しい部分があるだろうな」

クルーゼの言葉に今度はその場にいたクルーゼ隊の面々が耳を疑う。ラウ・ル・クルーゼの実力は彼らも知るところであり、そんな彼が条件次第とはいえ苦戦するかもしれない人物が目の前にいる。その事実で頭が追いつかないでいた。

「つ、失礼しました。この度隊長に任命された、アスラン・ザラであります」

「二、ニコル・アマルフィです！」

慌ててアスランとニコルが敬礼と自己紹介を行う。イザークやディアツカも、先のアークエンジェル戦でスバルの見せた腕を知っているため、敬意を持って敬礼する。

「彼の言葉に少しは耳を傾けるように。アスラン、君に期待する」

アスランの肩を軽く叩いて退出するクルーゼ。後に残されたのは納得のできないイザーク、ディアツカと緊張気味のニコル。そして啞然としたアスランと手元の端末で情報を纏めるスバルだけであつた。

+++++

C. E. 71 3月6日

インド洋上

カーペンタリアに向かう為平行して飛行する二機の輸送機。それぞれにスバルのシグーアサルト、もう一機にアスランのイーゼスが乗せられ、各々のパイロットは輸送機内で待機していた。

「文字通り、化け物じみた腕だったな・・・」

輸送機内の椅子に腰掛けたアスランは一人呟く。あの日クルーゼが退出した後、アスランやニコルの予測した通り、イザークやディアツカが条件を同じにしてシュミレータ

で対戦した結果、イザークもディアツカも完封されてしまったのだ。更にアスランやニコルを驚かせたのは、彼のシグーアサルトがフェイズシフトを搭載したデュエルアサルトシユラウドとバスターを戦場を活かして翻弄、フェイズシフトダウンを起こさせて撃破してしまつた点にある。

「もう一機に搭乗してるスバル殿だろ？そりや当たり前だよ」

「そんなに有名なのですか？」

アスランの呟きを聞き取つたのか、輸送機のパイロットが話しかけてくる。思わず聞き返すアスラン。宇宙にいる時、彼の名は一切耳に入つてこなかつたので、アスランの疑問ももつともであつた。

「ああ。地球軍の新型に敗れちまつたとはいえ、あのアンドリユー・バルトフェルドの懐刀とまで言われた若きエースだよ。宇宙の方には名は伝わらなかつたみたいだが、バルトフェルド隊の快進撃を影から支え続けたのは彼だとまで謳われてるんだ」

「そうですか……」

輸送機パイロットの言葉にアスランは彼のシユミレータでの戦闘様子を思い浮かべていた。機体特性を把握し、それらを生かした封殺戦術。かと思いきや一撃離脱に切り替えて攪乱するなど、相手に行動を読ませず、い自身はシグーアサルトの特性を最大限に活かした戦術構成等、自分達はまだまだ学ぶことが多いと理解させられる人物だつ

た。

「キラに似ているが、関係があるのだろうか。アイツからはそんな事聞いたことないが……」

「何!?了解した。こちら準備させる」

「どうしたのですか!?!」

「地球軍の戦闘機だ!あつちは既に待機してるそうだからあんたも早くモバイルスーツに!いざという時は機体をパージする!」

思考していたアスランに輸送機のパイロットが焦ったように告げる。窓から隣を見れば、輸送機のハッチが開かれていた。

「ちっ、両方揃ってエンジンに被弾した!消火は可能だが機体が重たい!高度を落とすしてパージして我々は救援を……って嘘だろ!?!」

「なっ……」

エンジンに被弾し、揺れながらも高度を落とすはじめた輸送機。輸送機から滑るようにパージされたアスランが輸送機パイロットの声に反応して隣を確認すると、デインの90mm対空散弾銃でスカイグラスパーの翼を滑空しながら撃ち抜いたシグーアサル

トの姿が。

「聞こえるか？」

「あ、はい！」

「この先に無人島らしき島影が見えた。そこに降下する」

スバルの通信に領き、重量があるはずのシグーアサルトに続くアスラン。そこで彼等は（ある意味）運命の出会い（再会）をすることになるのだった。

+++++

「無事か？」

「掠っただけですが」

「……っ」

「とりあえずアスラン、女性を押し倒したままなのはどうかと思うが」

「……あ」

無人島で鉢合わせたアスラン、カガリの両名だったが隙をついてアスランがカガリを押し倒した所にスバルが合流、思わず突っ込まれて離すアスラン。

「何故此処に居る……スバル・クロムハーツ」

「アークエンジェル戦で隊が壊滅、俺は再編成された結果、アークエンジェル追撃の任務

を受けた彼らの隊に出向。その移動中にあの輸送機に被害が出て此処に降下する羽目になった。それだけだ。理解したか？」

アスランに両手両足を縛られたカガリが、スバルに問いかける。それに答えるスバルが空を見上げながら答える。

「ダメです。どのチャンネルもNジャマーの影響で拾いません」

「スコールが来るみたいだ。シグナル発信機、射出しておけ。今日はこの無人島の洞窟で一晩明かすことになる」

「地球での知識は貴方の方があります。従いますよ」

アスランが困ったように話しかけてくる。空を見上げていたスバルが答え、アスランは頷く。

「先に洞窟に行つて火を起こしておけ」

「貴方は何を？」

「武器もないんだ。このお嬢さんの拘束を解き、少し手伝わせる」

「何をだよ！私に何を手伝わせる気だ！」

「洞窟の中に仕切りになりそうな岩壁を挟んで小部屋がある。そこに窪みがあつたから簡易の風呂を作るんだ。」

アスランに大きめのサバイバルパックを2つ投げ渡すスバル。カガリが手足の拘束

を解かれ、問いかけると、彼はなんてこともないという具合に答える。

「な……!」

「海水被つただろう? 洗い流さないと、せつかくの綺麗な髪が痛んじまう。アスラン、俺のシグーアサルトのкокピット内にもう一つサバイバルパックがあるからそれも運んでおいてくれ」

「……う」

啞然とするカガリに理由を述べるスバル。息を吐くように言われた言葉にカガリの顔がどンドン真つ赤になってゆく。

「お前が必要ないというなら、作らないが」

「……分かった。手伝う」

俯いたカガリにスバルが声を掛けると、長い長い沈黙の後、カガリの消え入りそうな声が聞こえるのだった。

+++++

「湯加減はどうだ? 多分、大丈夫だと思うが」

「問題ない。しかしお前、芸達者だな」

「私もそう思います。何故こんな技能を? それにこれだけの食料や水を用意してるのも教えていただきたい」



夜、スバルが見つけた海辺近くの洞窟で一夜を明かすことになった三人。スバルの指示の元、作られた簡易の風呂に入ったカガリに、岩壁越しにスバルが問いかける。問いに答えたカガリは疑問に思った事を問い、アスランも疑問に思ったのか、聞こうとする。スバルの機体、シグーアサルトのコクピット内にあつたもう一つのサバイバルパック。一人で用意したとしても、量が多すぎるとアスランは感じていた。

「元々バルトフェルド隊が支配していた地域は砂漠が多い。そんな地域で、俺はバルトフェルド隊の一番槍を任されると同時に、斥候や偵察、他にも監視任務を受けるときがあつた、それだけだ」

「砂漠地帯なら、まあこれだけ装備を備えるのは理解できるな」

スバルの答えに毛布で体を包んだカガリがやってきて頷く。

「あとは、性分だな。あの場所で受けた訓練が骨の髄まで染み込んでしまつてるんだ」

火にかけて小さな鍋を見つめ、かき回しながらスバルが自嘲気味に呟く。無意識の内にならうが、スバルの隣に腰を下ろしたカガリが視線だけでアスランに”ザフトではそこまで教えるのか?”といわんばかりの視線を向けてきたので、アスランは否定の意味を込めて首を横に振る。

「今ばかりはNジャマーを恨むな。とはいえないなら、今よりもっと悲惨な戦いになつていただろうが」

「核弾頭が使われる、と?」

「バナディーヤの街でお前は見たはずだぞ? 地上にはあんなヤツも多いし、恐らく地球軍の上層部に一定数以上存在する……躊躇いはせんだろうよ」

火を通したヌードルをカップに分けながら呟くスバル。カップを渡されたカガリは、そんな彼の横顔に一度見た砂漠の虎「アンドリユー・バルトフェルド」の面影を見た。

「血のバレンタイン……この戦争のきつかけになったあの事件の影にも連中が居たらし」

「な……」

スバルの呟きにアスランも絶句する。彼の戦争の本質を見抜く目や情報の取捨等、年齢らしからぬ部分を見てしまう。

「中立のヘリオポリスでストライク等が造られていたのも十中八九、地球軍の圧力からだろう。なあ、あの時バナディーヤで隊長が言った問い、覚えているか?」

「戦争にはスポーツのような明確な終わりも制限も得点もない、ならばどのように勝ち負けを決める、どこで終わりにすればいい、だったか?」

スバルの言葉にカガリが思い出すように答える。彼は頷くと真正面に座るアスランに目を向ける。

「恐らくだがアスラン、君がザフトに入ったのも俺と違い、大切な人を失ったからだろ

う。だが、考えてみる、俺達が攻撃した結果、誰かがお前みたいな気持ちをもったのだとしたら、何時、そのループは終わる？やはり、敵であるモノを全て滅ぼした時か？……それが恐らく、プラントと地球、ナチュラルとコーディネーターの争いの本質なんだろうさ」

スバルの言葉にアスランもカガリも呑まれたように黙る。スバルは中央で燃え盛る火に薪を投げ入れながら呟く。

「つまらん話をしたな。それ食ったらアスランはとりあえず寝ろ。宇宙から降りてすぐに移動だったらしいし、疲れが溜まつてる筈だ。お前も眠っておけ、睡眠不足は女の敵だし、服もそろそろ乾いてるだろう」

「ですが……」

「な……」

スバルが空気を変えるように口を開く。アスランも、本来は敵であるはずのカガリでさえ唾然とする。特にカガリは耳まで真っ赤になっており、スバルはそれを傍目にカガリの手から空になったカップを取り上げ、ヌードルの追加を入れ、再び手渡す。

「お前！なんでそんなことサラツと言えるんだ！このバカ！私は敵なんだぞ!」

「何を言っている……俺から見たらお前は可愛らしい女性だよ。いくら敵だろうが、戦士として振る舞おうとそれは変わらん」

「スバル殿は無自覚に口説いているのか．．．!? 仮にも敵だぞ彼女は．．．」  
 カップを傍らに置いたカガリが顔を真っ赤に反論する。追加してもらったヌードルを食べ終え、横になったアスランは早くも微睡みだした中、そんな事を考えるのだった。

+++++

C. E. 71 3月7日 早朝

あの後、十分な睡眠とれたアスランは、スバルに隊長として休むよう命令してまで火の番を変わり、朝を迎えた。とはいえ、スバルと火の番を変わってから日の出まで、アスランの体感で一時間ほど。しかもいつの間にか毛布が掛けられていたり、食器などは片付けられていたりしていた。

スバルの肩に寄りかかって熟睡しているカガリを見る限り、スバルは殆ど寝てなかったのだと理解し、申し訳ない気持ちになる。

「――」

「．．．．．」

その時、沈黙を守っていた通信機に変化が起きる。慌ててイージスに向かうアスラン。イージスの通信機から聞こえた友人の声に喜び、返答する。

「無線が回復したか」

「はい！今、ニコルから．．．!? 何やってるんですか！」

「仕方ないだろう。髪の毛をがっしりと掴まれてるんだぞ」

イージスの足元から聞こえてきたスバルの声に、イージスのコクピットから顔を出して答えるアスラン。が、スバルの姿を見てアスランは思わずコクピットから落ちそうになった。

「んう……」

「起きたか。どうやら無線が回復したらしいぞ」

アスランの声で目が覚めたのか、スバルに抱きかかえていたカガリが幼子のように目を擦り、次の瞬間、顔が一気に真っ赤になる。

「何で私を抱きかかえてるんだよ！バカア！降ろせえ……！」

「お前が、俺の髪の毛の根本付近をがっしりと掴んでるからだ。いくら恨みがあるとはいえ、寝てるときまで攻撃する必要あるのか……？」

喚くカガリだったが、スバルに言われて初めて自分を抱えている男の髪をがっしりと掴んでいる事に気づく。呆れた様子だったが、スバルはカガリが髪を離れた事でようやく彼女を降ろせた。

「無線が回復したらしい。海からも何か来るらしい。お前の機体がある方角だ」

「どちらが先に来る？」

説明するアスランにスバルが問う。アスランも彼が言いたいことが分かったのか、

リーダーを見に再びコクピットに登る。

「どうやら海の方が先みたいですね。ついでに同方向から飛行するものもあります」  
「できればこんな所で戦闘にはなりたくない。俺達の機体を森の中に隠せば空からも見  
つからないだろう」

確認したアスランがラダーで降りながら答えると、スバルは即座に決断する。

「私は自分の機体の所に行くよ」

「そうしておけ。お前、軍属じゃないのに何故あの艦に乗り、あれに乗ったんだ」

「友を守ろうとする寂しがりで優しい奴が居るからな。後、私はカガリだ！もう」お前  
”だなんて言うなよ！そっちは？”

「ア、アスランだ……」

カガリが自分の機体に向かおうとする。そんな彼女に思わずスバルが問いかける。  
背を向けたまま答えるカガリであったが、どうしても修正させたかったのか、振り向い  
てスバルに詰め寄ると自分の名前を名乗る。彼女の勢いに圧されたのか、アスランも名  
乗る羽目に。

「ん。お前の名前は知っているから名乗らなくても大丈夫だぞ！……じゃあな、  
スバル、アスラン」

満足したのか、一つ頷いたカガリは今度こそ二人から離れてゆく。そんなカガリの別れの言葉に複雑な表情になる二人であった。

ちなみに海から現れたストライクと、妙に嬉しそうな表情のカガリを森の中に機体を隠した二人が見て似通った複雑な表情になったのは偶然である。

## PHASE—07

+++++

C・E・71 3月23日 オープ付近

飛び交う砲火。白亜の戦艦に紫掛かった黒の機体の乗る補助フライトユニット”グウル”から放たれたミサイルが対空砲塔に撃ち落とされ、それを隠れ蓑に二連射されたキャットウスが対空砲塔二基に直撃する。

「イーゲルシュテルン4番、6番被弾！」

「損害率30%を超えました！」

「少佐のスカイグラスパーは何をしているか！」

「あのシグーに牽制されてそれどころではないみたいです!!」

「ストライクに敵モビルスーツの乗るグウルを狙わせろ!!ウオンバット、撃て!!」

アークエンジェルのCICでは報告や悲鳴が飛び交う。ザラ隊の追撃を受けたアークエンジェルの各攻撃ユニットから黒煙が立ち上る。

「下がれアスラン！ヤツは俺が！」



「イザーク！迂闊に接近するな！」

何時までも落ちない白亜の艦とストライクに、イザークのデュエルASがしびれを切らせて接近を開始。隊長であるアスランがそれを窘めるが、イザークは引かずに接近してゆく。

「ちい．．．．！」

「取り付く気か．．．．させない！」

その愚直な行動をストライクのパイロット、キラが見逃すはずもなく、シグーアサルトの操るグウルから放たれたミサイルを頭部イーゲルシユテルンで撃墜しつつビームライフルを発射。デュエルASの乗るグウルを破壊する。

イザークはそのままスラスターを吹かしつつビームサーベルを抜刀する。が、キラはその目的を看過、自身もアークエンジェルの甲板から飛び立つ。

「なにい!?くそお!!!」

「ち．．．．！」

「おたくの相手は俺！」

「イザーク!．．．．うわあ!?!」

ストライクにビームサーベルを根元から切り捨てられたイザークを助けるため、思わずニコルが接近。スバルがさかさずカバーに入ろうとするが、そこをムウのスカイグラ

スパークが背面のビーム砲を放って妨害する。

デュエルASを足蹴にし更に跳躍、落下しながらデュエルASが放つシヴァを避けつつストライクがブリッツをシールドチャージで弾き飛ばし、乗っていたグウルをライフルで破壊する。

「アスラン、支援を頼む。ディアッカ、お前はデュエルをー」

「了解！」

「分かった」

落下する二機をシグーアサルトとバスターがそれぞれカバー。イージスがスカイグラスパーとアークエンジェルをそれぞれライフルで牽制する。

+++++

オーブの領域に接近してしまうアークエンジェル。デュエルASとブリッツを母艦に届け、イージスに合流したシグーアサルトとバスターも、突如として聞こえたオーブランチャンネルのその声に動きを止める。特にシグーアサルトのスバル、イージスのアスランは、その声に聞き覚えがあるため、なおのこと驚いていた。

「(あのお嬢さんがアスハ代表首長の娘、だと・・・!?)」

「(カガリ・・・?)」

「(心配なく！領海に入る前に落とせば問題ねえだろ！」

「待てディアツカ、オーブ艦に当たる！ 回り込むんだ！」

その後のカガリとオーブ士官のやりとりにスバルとアスランが呆然としていると、ディアツカのバスターが、スカイグラスパーの砲撃を回避しつつガンランチャーと高エネルギー収束火線ライフルを斉射する。その様子を見てアスランが思わず警告する。

「んな事言っても．．．．．っしまった！」

「っディアツカ！」

オーブ艦付近に着弾した砲撃を見たアスランの警告と指示にディアツカが戸惑い、動きが一瞬、また止まる。そこをストライクが見逃すはずもなく、バスターが乗るグウルが破壊され、落下する。流石のアスランもこれはマズいと思つてカバーに入ろうとするが、アークエンジェルからの砲撃で攻撃できず回避に専念する。

「ちっ．．．」

「ば．．．．．ディアツカ迂闊だ!!」

「一番、二番エンジン被弾！ 推力、高度共に維持できません」

「．．．っ！」

「それよりもマズいわよ．．．！」

落下する中、ディアツカが足掻きとばかりに対装甲散弾砲と両肩のミサイルをぶつ放す。空中という不安定な場所から撃った割には狙いは正確。放たれた散弾砲の大多数

はアークエンジェルのエンジンに直撃したが、運悪くミサイルの数発がオーブ艦への直撃コースをとっていた。これにはアスランも、アークエンジェルのクルー達も啞然とする。

「つ……グウル!? 誰のだよ……!?」

「……」

「スバル!」

バスターの足元にはいつの間にかグウルが回り込んでいた。ではその持ち主は?と全員の視線が辺りを見回し、アスランがそれにいち早く気がついた。

オーブ艦を守るように両腕をクロスさせ、さらにバインダーシールドを水上で無理やりホバリングしながら構えるスバルの愛機、シグーアサルト。それにアスランは驚きに目を向ける。

そしてソレにも気がついてしまった。シグーアサルトは既にアークエンジェルからの至近弾で目に見えないレベルでダメージが蓄積され、シールドは磨耗している事。そしてバスターのミサイルには一発であろうと耐えられないであろうと言うことに。

そして仮に耐えれたとしても、既にアークエンジェルから放たれ、彼の機体をロックしていた20発近いのミサイルが直撃コースにあることに。

「スバル!!!」

「嘘……ですよね……!?!」

そしてミサイルが構えられたシールドに直撃、バインダーシールドは粉々に砕け、更に20発近いミサイルが直撃し、構えた20mバルカン砲内蔵防盾もろとも両腕が。それだけでなく、全身にミサイルが直撃したシグーアサルトは各追加装甲諸共海に沈むのだった。

沈みゆくスバルの機体に、現場のアスランも、ザラ隊が利用する潜水母艦の中でモニターを見ていたニコルも絶句する。

「これなら領海に落ちても仕方あるまい。オーブ第二護衛艦群の砲手は優秀だ。上手くやるさ。あの機体も撃破したように見えるが、致命傷は上手く避けていたように見える。後で我が軍の潜水艦が探索するさ」

「分かりました」

ブリッジのマリューにキサカが告げる。操舵手のノイマンにマリューが頷きかければ、ノイマンはその技量を持つてシグーアサルトが沈んだ場所を避けるようにアークエンジェルを着水させる。

「ち……」

そしてオーブ艦が続々とアークエンジェルとイーゼス、バスターに砲撃を開始。アスランはやりきれない思いと共に、バスターを引き連れてその場を後にするのだった。



## オーブ行政府

「さて、とんだ茶番だったが、致し方ありませんまい。公式発表の文章は？……うむ、良いでしょう。そちらはお任せします」

「はっ。報告では我が方の艦を守った機体も秘密裏に回収したそうですが……」

「あの艦と機体、モルゲンレーテには私が」

オーブ行政府で話し合う人々。その内の一人、代表首長のウズミ・ナラ・アスハが公式発表の草案を確認、報告を受け、頷くとそれぞれに指示を出し部屋を後にしようとす

る。

「どうにも厄介なものだ。あの艦は。それにあのシグーとか言うのも誤射でも良いから撃破するべきではなかったのか……」

「あの艦、アークエンジェルは今更言っても仕方ありませんまい。そして！あの機体は我が国の恩人だ！恥を知れ！」

行政府に勤める一人が呟くように言った内容をウズミが一喝する。特に後半部分は捨て置けない一言だったらしい。黙りこくる人々を一瞥したウズミは、部屋を今度こそ、後にするのだった。

+++++

オーブ領 オノゴロ島

「指示に従い、艦をドックに入れよ」

オーブ第二護衛艦に指示を出されるアークエンジェル。しかしブリッジクルーやストライクのパイロットのキラ、スカイグラスパーのムウの表情は一様に暗い。

「オノゴロは軍とモルゲンレーテの島。監視衛星でもここを伺うことは不可能だ。……つと、そういえば正体を明かしていなかったな。オーブ陸軍、第21特殊空挺部隊のレドニル・キサカ一佐。これでも護衛だね。これからの事は、この後お会いになるお方に尋ねると良からう。オーブの獅子、ウズミ・ナラ・アスハ様に、な」

「あちやー……て、事はやっぱり本物……?」

ブリッジではキサカが、己の正体と共にオノゴロや今後の事をを説明していた。そしてその内容から、ミリアリアはカガリが本物のお姫様だと察し、小さな声で隣にいるサイに問いかける。問われたサイも冗談ではないと理解していたため、頷く。

アークエンジェルは今後の事をオーブの獅子、ウズミ・ナラ・アスハに問うことになるのだった。

+++++

オーブ近海 ザラ隊母艦ボスゴロフ級内

「ふざけるな！こんな発表、本気で信じろと言うのか!!」

「足つきは既にオーブから離脱しました、だなんて本気で言ってるの？隊長が若くて無名だからって俺らバカにされてるのかね？」

「イザーク、ディアツカ！」

「そんな事はどうでもいい。これがオーブの公式発表と言うのであれば、俺達が嘘だと騒いだところでどうにもならない。押しきって通れば、本国を巻き込む外交問題になる。カーペンタリアから圧力を掛けてもらうが、事態が進展しないなら……情報を得るため、潜入する」

ザラ隊の潜水母艦の一室で言い争う面々。オーブの公式発表と今後を離すアスランに、イザークは冷静なアスランを茶化すように見、ディアツカも追従する。

「スバルさんは、……彼の情報はなかったんですか？」

「……オーブ近海で、彼の機体の一部が発見されたただけさうだ」

誰も触れず、聞かなかつた部分をイザークとディアツカを窘めたニコルが問う。アスランは苦虫を押し潰した様な表情でオーブの出した答えを告げる。

「……そんな……」



「て、ことは戦死扱いで良い訳？」

「だな。本国から聞いた話ではヤツに親族などは居ないそうだ。気にする必要もあるまい」

アスランの言葉にニコルだけは悲痛な表情を見せる。しかしディアツカとイザークの言葉に、ニコルは思わず立ち上がる。

「イザーク！ディアツカ！口に気をつけてください！彼があそこでオーブ艦を守らなければ、今よりも状況が悪くなっていた可能が高い！それにディアツカ！貴方の迂闊な行動が彼のMIAを招いたんですよ！それを……」

「ニコル……！」

「アスラン……！離して……離してください……！」

部屋から出て行くイザーク、ディアツカに掴みかかろうとしたニコルをアスランが咄嗟に抑える。いつの間にかニコルの声は、涙混じりに変化していた。

「僕は……僕は彼に助けられたんです……。それにイザークもディアツカも助けられた！それなのに……。それなのに、こんな……。！何で……。！」

「ニコル……！」

アスランに抱き止められたニコルは涙を流す。そんな彼の肩をアスランはただただ、

掴むしか出来なかったのだった。

+++++

オノゴロ島ドック内　アークエンジェル食堂

そこに集まった元ヘリオポリス学生組やアークエンジェルクルー。その話題は最初、上陸ができるか等だったが不意にミリアリアが俯く。

「ミリイ．．．？」

「あの時、あの機体．．．何でオーブ艦守ったのかな。それが原因で、アークエンジェルのミサイル受けて、墜ちたんだよ．．．？」

俯いたミリアリアの肩にサイが手をやる。俯いたミリアリアが顔を上げた時、その目には何故か涙が浮かんでいた。

「僕は．．．．何となく分かるよ」

「え．．．？」

「あのシグーは多分、だけど．．．．同じ思いをさせたくなかったと思うんだ」

その時フレイ・アルスターとの一件もあり、申し訳なさそうに皆から離れようとした、キラが近寄る。

「それどういふ事だよ、キラ」

「あの機体、アフリカで何度か交戦した部隊に居たでしょ？」

「砂漠の虎、アンドリユー・バルトフェルド隊所属の機体。あの後フラガ少佐が言ったなあ、あの機体のパイロットも凄腕の若手エースだったって」

疑問に思ったカズイが問うと、キラは少し痛みを堪えたように話し出す。操舵手のノイマンも、バルトフェルド隊との戦いの後、ムウ・ラ・フラガが語った話しを思い出したのか、頷く。

「多分、あの人は、自分と同じ思いをさせたくなくて、咄嗟に庇ったと思うんだ……。あの時、ラゴウを撃破した僕に、あの人は復讐や憎しみの心で襲いかかってきてたと思う。でも、オーブはまだ、プラントとも、戦争はしてない。アソコでバスターがオーブの艦を破壊したら、あの艦の人の遺族はきつと、プラントにあの人と同じ感情を向けたかも知れないし……、ってごめんね、訳わからないこと言っちゃって」

ポツリポツリとキラが話す。話している途中で、当の本人も混乱したのか、慌ててトレーを持って食堂を出て行く。残されたメンバーは思わず、という風に顔を見合わせるのであった。

## PHASE—08

+++++

オーブ領 オノゴロ島モルゲンレーテドック内

「あの艦、アークエンジェルとXナンバー。あの時、人命だけ救い、その後、我等の手で艦とモビルスーツは沈めた方が良かったのかも知れぬ、とかなり悩んだ。中立を掲げる我が国だが、力を持てばそれを狙われる。が、力なくば意思を押し通す事もできぬ。こればかりは難しい問題だ」

「……ご心中、お察しいたします」

「さて、と……。。貴艦を沈めず、このオーブに招き入れた理由だが、ストライクの稼働データとパイロットであり、コーディネーターの少年、キラ・ヤマト。モルゲンレーテはその両面での技術協力を求めたかったからなのだ。叶うのであれば、こちらもそれなりの便宜が計れる事になろう」

「ウズミ様それは……!」

オノゴロ島 モルゲンレーテにあるドック内の一室でマリユ、ムウの両名はウズミ

と話し合いをしていた。現在の地球での情勢や、オーブの立場などで苦悩するウズミ。そんな彼だったが、難しい問題の一角たるアークエンジェル隊に便宜を図った理由も告げ、マリユールはそれに驚く。

「貴官からも難しい問題であろう？出来る限り回答は早い方がありがたいが、まずは一度貴官らだけで話し合うが良い」

「ウズミ様……」。配慮、感謝します」

穏やかな表情でマリユールに告げるウズミ。マリユールも、ウズミの言いたいことは分かるため、その好意をありがたいと受け入れる。

「あの、ウズミ様。その……あのシグートとパイロットは……」

「あの夜間迷彩の機体の操縦者か。無事ではあるが、念のため検査を行っているようだ。むしろアレだけ機体は破壊されていたのにあの程度で済んだのはパイロットの技量が優れていたから、と報告を受けている。それに彼は我が国の恩人と私は見ておる。悪いようにはせんよ。今は、貴官らには申し訳ないが、貴艦の医務室に一時的に搬送されておる。準備が完了次第、ここモルゲンレーテの医務室に移送される予定だ」

立ち上がるウズミに思わずマリユールが問う。ウズミはその問いに答えると、部屋を出て行くのだった。



### モルゲンレーテの一室

「以上の活躍を鑑みるに、ストライクのパイロットであるキラ・ヤマト、彼の能力は一般的コーディネーターのそれを大きく凌いでいる。推測の域でしかなく、私の専門外のことではあるが、以前学会誌に記され、一部で議論を呼んだ、スペリオール、エボリュシヨナリー、エレメント、デイスデイントフアクターを想起、可能であればキラ・ヤマトには今後も精密かつ……。はあ、最終項目削除、記録終了」

ストライクの戦闘データを整理していたモルゲンレーテの技術主任、エリカ・シモンズ。彼女は一通りの整理が終わると、呼びに来たモルゲンレーテ社員と共にドック内を移動する。

「それで？救助したあのシグーのパイロットは？分かったことがあれば知らせてちょうだい。」

「容態は安定しています。検査を行い、秘密裏にプラントの方に問い合わせてみましたが、その……」

歩きながらエリカは救助したシグーのパイロットの事を問う。報告していたモルゲンレーテ社員は、少し躊躇いを見せるが、意を決してとある書類を彼女に手渡す。

「ん？どうかした……え!?これは一体……!」

「プラントからは」かの人物は既に死亡認定が出されている」との回答が。それと、これが彼の検査結果です」

「間違いじゃないのね……？」

「間違いありません」

資料に目を通して驚き、思わず問いかけるエリカ。社員もプラントからの回答を告げつつ頷く。

「あり得るの……？こんな事が……。この件、まだ他言はしていないわね？なら、この件は私からウズミ様に話しておく。特Sクラスの機密にするから、誰にも話さないでね？」

信じられない、と言わんばかりのエリカだったが、急いで指示を出しつつ、当面の事に集中するのだった。

+++++

アークエンジェル内 医務室

アークエンジェルクルーに志願した一人、"フレイ・アルスター"は指を少し切つてしまい、思わず医務室に来てしまった。彼女が動きを止めた理由、それは目の前のベッドに寝かされている金髪の青年が原因である。

「……なんで……なんで、コイツ、キラに似てるのよ……!」

彼女もザフトのパイロットが保護され、治療を受け、一時的にアークエンジェルに搬送されていると聞いていた。目の前に眠る少年がそのパイロットであると否が応でも気がついてしまい、その顔を見て思わず後ずさるフレイ。そしてテーブルに体がぶつかった結果、空のビンが足元に落下し、砕ける。

「!!…….…….ぐう……!!」

「ひ……!」

砕けた音に反応して意識が目覚めるザフトのパイロット“スバル・クロムハーツ”。コーディネーターは基本的に敵だと判断しているフレイは、その様子に怯え、思わず近くにあった武器になりそうな物、則ちベッドから離れた入り口付近に置かれていた彼の荷物の一つ、拳銃を掴む。

「フレイ…….…….?って、何してるんだよ……!」

「サイ…….……!!離して!!コイツ敵じゃない!!なんでこんな所に居るのよお!!」

偶然、物音を聞きつけた青年“サイ・アーガイル”が顔を覗かせ、その場面を見て咄嗟にフレイを押しさえ込む。フレイは錯乱気味になりつつも涙混じりに叫ぶ。

「離して、やれ…….……。どの道、セーフティーが掛かっている…….……ソレでは撃てん…….」



「!!バカにして……!!」

「ッ、よせ、フレイ!!」

目を覚まし、痛みを堪えながらベッドに腰掛けたスバルが告げる。その言葉に激昂したフレイが、銃を滅茶苦茶に操作、更にスバルに狙いも付けずに銃口を向ける。その様子に思わずサイが彼女を抑える。

「きやつ……。ッ!?!」

トリガーが引かれ、狙いも付けずに放たれた弾丸はスバルの足元に着弾。フレイはその衝撃に驚いて銃を手放す。オープンボルトの銃であるため、落下した衝撃で再び弾丸が放たれる。その弾丸は動けないスバルの右肩を貫通、そこから赤い血が流れる。その様子に思わずフレイは後ずさる。

「ッ……。なんで……。!」

「何事だ!」

フレイがスバルから流れる血を見て思わず後ずさる。そこに、近くで今後を話し合っていた為、騒ぎに気づいたマリユー達が駆けつける。

「……アルスター二等兵、理由などは後で聞く。自室で待機している。アーガイル二等兵、彼女を頼む」

「あ、はい」

現場を見て即座に理解するナタル。落ちていた拳銃にセーフティを掛けると手早くフレイとサイに指示を出す。

「艦長、私がやります」

「え？ええ・・・お願い」

「迂闊だったな。いくらモルゲンレーテが軍事工廠って言ったって、その社員は一般人で技術者が多い。こういうのには疎いんだろうし、アークエンジェルに搬送したって言っても、そこまでは気が回らなかったんだな」

拳銃を元あった場所に置き、スバルの治療の為近寄るナタル。ムウもどうしてこうなったのかを察し、呆れた風に肩をすくめる。

「・・・俺はコーディネーターで、あんたらの敵だぞ・・・？・・・何故・・・？」

「ナチュラルであろうとコーディネーターであろうと私は目の前の怪我人を見捨てるなとできん。あと水も飲め、聞きたいこともある」

ポツリとスバルが問いかける。上着を脱がせて治療するナタルは、自身に言い聞かせる様に答える。ムウとマリユは服を脱がされた故に見えた彼の肉体と、そこに散在する、腕を中心とした無数の傷痕に気がつく。そこにウズミが現れたため、ナタルは彼に

水挿しを手渡す。

「……で？何が聞きたいんだ？それにオーブの獅子、ウズミ・ナラ・アスハ前代表までいらつしやるとは、俺みたいな一介のパイロットには身に余る光栄だ」

「……聞きたいことが幾つかあるが、まずは先の戦闘、我が国の艦を守っていただいた。その感謝を」

水挿しで喉を潤したスバルが皮肉気味に笑みを浮かべる。ナタル達が下がった事を確認したウズミは軽く頭を下げる。

「前」とはいえ、代表首長だった方が俺みたいな奴に頭を下げないでくれ。あの時、貴国の艦を守ったのも本当に咄嗟だったんだ」

「……そうか。だが、守ってくれたのもまた事実、だからこれだけは伝えておきたかった」

スバルの言葉に、ウズミも小さく頷く。そして手にしていた資料をナタル達に手渡すと、ムウが用意したパイプ椅子に腰掛ける。

「失礼だが、君の事を調べさせてもらった。それを踏まえて聞きたいことがある」

「私の経歴、ですよ？別に構いませんよ。長い話になりますし、かなり際どい部分もあ

りますから、防諜対策が出来ている場所で話したいのですが」

ウズミの目を見て彼ははつきりと言葉にする。ウズミは彼の目を見て、何かを察したのか小さく頷き、立ち上がる。

「これは、貴官達も聞く権利がある、が、今日は何かと様々な事が起きた。君もまだ本調子ではないだろう。ゆえに話しは数日後にしたい。その時にはキラ・ヤマト少尉とあのじゃじゃ馬娘も呼んでくれ。」

「は！艦長、その時の護送は私が」

「その時はお願いね、ナタル」

ウズミは護衛に指示を出しつつ部屋を後にする。マリユ一達も、その声音から、重要な事であると察したのか、肯くのであった。

## P H A S E — 0 9

+++++

アークエンジェルがモルゲンレーテ社のドックに入港して七日後

C・E・71 4月1日

モルゲンレーテ社のドック内の中で防諜対策が取られた部屋を、と言うことで急遽修理中のアークエンジェルの作戦会議室に人々が集まった。キラ・ヤマト、カガリ・ユラ・アスハも呼ばれ、思わず顔を見合わせる。

「バジール中尉、入ります」

「あ……」

「お前……!」

そこにナタルがザフトの赤服に着替えたスバルを連れて入る。念のため手錠がされたスバルを見て、キラとカガリが腰を浮かせる。

「父上、これは……!」

「座れカガリ。バジール中尉、彼の手錠を解いてくれ。彼も暴れる気はないだろう」

「しかし！．．．いえ、分かりました」

憤りを隠せないカガリを一瞥したウズミはナタルに頼む。ナタルは一度反論しかけるが、ウズミの瞳を見てからスバルの手錠を外す。

「まずは今一度、我が国の艦を守っていただき、感謝する。貴官の言う通り、防諜対策はここなら出来ているだろう。話してくれるかな」

「防諜対策は信じてもらえないでしょうが、私も保証します」

ウズミが改めて感謝の意を告げる。続いて言われた内容に、艦長のマリユーも同意する。ウズミの対面に腰掛けたスバルは、皆がこちらを見たのを確認してから口を開く。

「大方俺．．．いえ、私に関しては知っているのでしようし、アスハ前代表がこのような事を尋ねた理由も、まあ、想像出来ています．．．おそらく、というよりは十中八九、でしょうね。プラント本国では既に私はM I Aと見なされている筈です．．．私には親族も、ザフトに入隊するまでの経歴も一切ありませんから」

「な．．．！」

「そんな．．．！」

落ち着いた表情でスバルが語り出す。その内容に思わずキラとカガリが腰を浮かせる。

「やはり、か．．．。噂では聞いていたがまさか、真実だったとはな」

「どういう事ですか？アスハ代表」

両手を組んで、信じたくなかった、と言わんばかりに顔を俯かせるウズミ。疑問に思ったナタルが問いかける。

「彼は第一世代のコーディネーターなのだろう。あまり知られてはおらぬが、第一世代のコーディネーター技術は完璧ではない。極々稀に、親の望んだコーディネーター内容と、誤差程度だが結果が異なる場合がある、と聞いている」

「それは僕も噂では聞いたことがあります、それが一体……」

ウズミが第一世代のコーディネーターについて語る。キラも、自身がコーディネーターであるがために聞いたことがある噂を肯定する。が、それが彼とどう関わっているかが結びつけられない。

「ウズミ様、ここからは私が。……本来「コーディネーター」と言うのは、ナチュラルと違い、あらかじめ強靱な肉体と優れた頭脳、それぞれ才能を持つ者を指すの。容姿などはあくまでその副産物とされているわ。でも、それを理解できない……いえ、違うわね。コーディネーター技術を過信している人々が一定数以上居るのもまた、事実なの。コーディネーターの定義をナチュラルも、コーディネーター達本人の間にも間違えて認識している人が居るのよ」

モルゲンレーテの技術主任、エリカ・シモンズが補足を入れる。マリユ達もその内容は初耳だったのか、驚いた表情を見せる。

「だからこそ、容姿が望んだモノではない。思っていたほど才能が見受けられない、等の理由でコーディネートを依頼した親がその子供を”なかつたこと”にしようとすることをケースが稀に存在するのよ。容姿のコーディネートはあくまで技術的な副産物に過ぎない。メインたる才能に関しても、適切な環境や訓練、学習等がなければ十全にそれを発揮できないのにな」

「まさか……」

俯きながら続けるエリカ。ここに来てマリユ達も彼がどういう存在なのかを理解し、思わずスバルの方を向く。

「私は、恐らくこの”目”が、原因で親から捨てられたコーディネーター。故にザフトに入隊したとしても、上層部からしたら何時居なくなっても文句を言われたり、悲しむ人の居ない、そのような扱いなのですよ」

「……そんな……。そんな理由なのか……?」

医務室から移動する前に入れたカラーコンタクトを外し、久々に他者に自分本来の瞳、則ち右目はキラ・ヤマトと同じアメジスト。左目はカガリ・ユラ・アスハと同じ琥珀色という、オッドアイを皆に見せる。



「こりや珍しい。・・・オッドアイってやつか。俺、初めて見たぜ」

「艦長、ナチュラルがオッドアイになる確率はかなり低いとされています。見たところ彼は視力に異常はないみたいなので遺伝的理由だと思われれます。流石にコーディネーターでオッドアイがどのように扱われているかはわかりませんが」

スバルのオッドアイを見てムウは感嘆し、ナタルはその希少性に気がつく。カガリとキラはその瞳に魅入っており、エリカも驚きの表情を見せている。

「なんていうか、アレだな。髪の色とか顔立ちもあるから坊主か嬢ちゃん-bloodline、あるいは兄貴って言われても信じられるぜ」

「あの、ムウさん。僕に兄弟は居ませんから」

「私だつてそうだ！ 大体、こいつ何歳なんだよ！」

「現在は17歳だ。生年月日はC・E・54年3月7日。今はC・E・71年4月1日だから間違いはないはずだが」

「ちなみに細胞などから見ても大体、それ位の年齢だと結果は出ているわ。で、本題はこの細胞のDNAデータにあるの」

ムウが思った事を呟き、それにキラとカガリが反論する。スバルの言葉にエリカが補足を入れ、一転して真面目な表情になる。

「どういう事ですか？ エリカ主任」

「……大變、失礼ながら、キラ・ヤマト少尉のDNAデータを参照させていただきました。顔も似通ってらしたので、念の為、と云う形でしたが」

エリカにナタルが若干非難的な眼差しを送る。エリカは申し訳なさそうに、持つてきていた紙を皆に見えるように差し出す。

「結論から述べます。キラ・ヤマト少尉と、スバル・クロムハーツさんは、何らかの、血縁関係……いわば兄弟関係になります。これは数百回に登る精査の結果です」

「え……？」

「マジかよ……！」

「な……!？」

「なんだって……!!」

エリカの嘯みしめるような結果報告。それにその場に居た面々は愕然とし、スバルとキラの顔を見比べる。

「確かに顔つき、声が似ていたりや片方の瞳の色が同じですけど、そんな……!!」  
「つまり坊主共は知らず知らずの内に、冗談でもなく兄弟で殺し合いをしてたつて事になるのか……!?!?くそつ……!!なんだよソレ……!!」

「僕と……スバルさんが……きょう、だい……?」

「……」

マリユールが信じられないと資料、スバル、キラを順番に見やり、ムウがやりきれないと下を向く。キラは茫然とスバルの顔を見やる。スバルはその瞳を資料に向け、考え込むようにしている。

「スバル君。君は本当に、何も知らないのかね？」

「ええ。それは命を懸けて肯定できません、アスハ前代表。プラント本国にも私の血縁者は居ませんでしたし、ましてや兄弟が居るなど聞いたことがありませんでした。私がこの17年間、調べた結果知り得たのは、この首筋に刻まれていた私の生年月日らしき数字と、検査で分かった血液型、そして生まれたときから首に下げていたというドツクタグに刻まれていた”スバル”という名前だけになります」

ウズミの問いかけに、真剣な表情で答えるスバル。彼が振り向きながらその長髪を持ち上げて見せれば、確かに首筋に小さく文字列が刻まれていた。

「髪を延ばしているのはそれを隠すためかね」

「ええ。バルトフェルド隊長からこの刻まれていたモノは他人に知られない方が良いでしょう、と言われました。コレを知るのは今、ここにいる方々と、亡くなったバルトフェルド隊長、アイシャさんだけです。バルトフェルド隊の副官、ダコスタさんにも話したことはありません」

ウズミの問いかけに頷くスバル。バルトフェルドの名が出たとき、キラの表情が一瞬

だけ強張ったのをカガリは気がついた。

「ふう……。さて、君はこれからどうする？ プラント本国は君の予想通り、と言  
べきかM I Aだと判断しているみたいだが……」

「……………」

「スバル……………お前……………」

ウズミの言葉にスバルは俯く。カガリはそんな彼の内情をなんとなく、理解できた。

「もし君が良ければ、だが……オープに亡命する、というのも一つの手だ。その場合、  
少なくとも私はそれを支援するつもりでいる。……無論、善意だけではなく、軍に  
協力をしてほしい、という頼みがある。君に関しての情報は色々と集めさせて貰ったの  
でな」

「わ、私もその時は協力するぞ！」

俯くスバルに、穏やかな表情でウズミは告げる。その内容に、思わずカガリも同意す  
る。ウズミは娘の変化に少しだけ笑みを浮かべ、スバルを見つめる。

「よろしいのですか……？ 私は、厄介事にしかりませんよ……？」

「アークエンジェルを受け入れている時点でリスクは負っている、気にする必要はない  
し、先程述べたように純粋な善意だけではない。それにプラント本国では既にM I A認  
定されているのだ。君の新しい経歴を用意するのも、そう苦労しないだろう。答え



可能になった。出力はあるからアラスカの防衛圏ギリギリからでもオーブには戻れる。緊急時に連絡を入れれば、マーシャル諸島までオーブ艦隊が迎えが来ることも可能だしな」

ドックに繋留、修理が進むアークエンジェルを眼下にマリューとスバルが会話する。スバルはモルゲンレーテの作業服を身に纏っており、マリューの問いかけに穏やかな笑みで答える。

マリューらアークエンジェルの護衛を買って出た（無論亡命し、オーブ国民となった彼はその後アスハ代表と話し合った。その際様々な提案などを行った結果、色々と便宜を図られた上に許可を密かに貰った）彼にマリューは問いかける。少し寂しげになった彼にマリューは彼が本当に優しい人物だと理解する。

「結構、義理堅いのね」

「今じゃ俺もオーブ国民で、モルゲンレーテの技術者兼オーブ軍の三佐、つて事になってしまっているんだ。それにこっちが本音だがね、せつかく直したのにまた壊されちゃ意味がない」

笑いながらマリューが茶化せばスバルもまた、笑いながら答える。

「キサカ一佐も言っていたが、地球、ザフト両軍ともに慌ただしくなっている。ザフトでもスピットブレイクと呼ばれるデカイ作戦が準備中らしいしな」

「良いの？ そんな重要っぽい情報を話しちやつて。私は地球軍の士官よ？」

「構わんさ。今の俺は、オーブ軍の”スバル・クロガネ”三佐だからな。”スバル・クロムハーツ”じゃない」

「随分な屁理屈ね、それは」

スバルの言葉に、楽しそうにマリユは笑う。結局オーブに亡命を果たした彼は、その日の内にあれよあれよという間に経歴などが決定され、更に様々な提案などを行った結果、異例のオーブ軍の三佐に任命されていた。

(ちなみに名前は辞典と三日ほど睨めっこしていたカガリが命名)

「俺から言わせてもらえば、あのツールって子も、キラ・ヤマトの事にも少し不安がある。キラ君も俺と違って志願兵なのだろう？ 一応、MS隊の指揮官としての経験がある俺になら軍が違っててもやれることは多い筈だ」

「感謝します、クロガネ三佐」

アークエンジェルを見ながら告げるスバル。マリユはそんな彼の気遣いに感謝しつつ、彼の数少ない弱点を突く。

「勘弁してくれ……三佐つてのそうだが、名前にはまだ慣れてないんだ。スバルと呼

んでくれ」

「ふふっ。分かったわ。．．．カガリさんの事もウズミ様に頼まれたのでしょうか？」

「ウズミ様もこの戦争の根本を理解してらっしゃる．．．地球軍の士官であるマリューさんに言うべき事じゃないんだろうがね」

笑みを浮かべるマリューだったが、ここ最近のカガリの様子から何かを感じ取っていたのか、問いかける。スバルもまた、難しい表情でその問いかけに答える。

「当日はオーブ軍が偽装のために領海線まで護衛艦群が出る。カガリ嬢は行かないが、俺は本当の意味でギリギリまで護衛するさ」

「ありがとう。．．．良いのね？」

「構わんさ。亡命を決めたとき、既に覚悟は出来ているし、プラントでは既に死んだ身だ」

当日の動きを伝えるスバル。マリューはそんな彼の心情を察し、本当にありがたいと感じて礼を述べる。スバルは手を振り、その場を後にするのだった。

+++++

C. E. 71 4月15日

「オーブ軍護衛艦隊旗艦から入電。”我、これより帰投せり。貴艦の健闘を祈る。”」



クロガネ三佐、後を任せろ。無事の帰投を祈る。以上です」

「エスコートを感謝する」と返信を」

「了解した」と伝えてくれ」

「了解しました」

オーブ領 オノゴロ島を発進したアークエンジェル。偽装の為にエスコートしていたオーブ艦隊が離れてゆく。アークエンジェルは推力を増し、一路アラスカを目指すのだった。

## P H A S E — 1 0

+++++

C. E. 71 4月15日オーブ近海

「レーダーに反応！数3・・・いや4!!」

「機種特定。イージス、バスター、ブリッツ、デュエル！」

「潜んでいた・・・!?網を張られていたのか！」

「対潜、対モビルスーツ戦用意！逃げ切れれば良いわ。クロガネ三佐が立ててくれた作戦通り、逃げ切れればいい！」

オーブ領海を抜けてすぐ、それを察知したザラ隊が発進、アークエンジエルを待ち構える。ブリッツでは即座に戦闘態勢が取られ、ECM強度が上げられ、スモーク・ディスタージャヤーが投射、煙幕が展開される。

「進路クリア。スカイグラスパー、ケーニヒ機発進どうぞ！・・・気をつけてね」

フラガのスカイグラスパー1号機と、志願したトール・ケーニヒのスカイグラスパーが発進する。キラのストライクも、煙幕に紛れて甲板上で補助動力を受けたランチャー・ストライカーを構える。

「煙幕!?!しかも支援機が二機!?!」

「姑息な真似を!」

「よし、上等だ!坊主の支援、任せる!」

「は、はい!こちらスカイグラスパー、ケーニヒ。ストライク、クロガネ三佐、聞こえますか!?!敵の座標と射撃データを送ります!」

「了解」

「了解した」

煙幕と投射されたスモーク・デイスチャー・ジャークを突き抜けて発進した二機のスカイグラスパー(フラガ機が先行し、ケーニヒ機が続く)にデュエルASがビームライフルを連射する。フラガ機を狙ったその流れ弾をツールも危ういながらも回避、ストライクとスバルのとある機体に情報を送信する。

それを受けてランチャー・ストライクが320m高インパルス砲「アグニ」でザラ隊の4機を狙撃する。

「進路クリア。ランスロット発進、どうぞ!」

「っ……!」

「ッ、ストライクううう!!!」

「こっから先には……イザーク!下だ!」

補助動力ケーブルを引き抜いたランチャーストライクが、突撃を開始する。アグニを回避したイザークが、激昂しつつビームライフルを構えるが、ディアツカが警告を発する。

「ストライクに固執しすぎだ、イザーク・ジュール」

「な……シグーだ?!?しま……!?!」

「イザーク……ぐあ!?!」

「イザーク! デИАツカ!」

「アレに誰が乗っているんだ!?!」

スモーク・デイスチャージャーと煙幕に紛れて発進したもう一機の機体。皮肉混じりに“ランスロット”と通称を付けられたそれに乗る、オーブ軍三佐“スバル・クロガネ”は皮肉気味に笑みを浮かべつつ背面飛行させている新たな愛機（と、言っても急拵えの魔改造機）の左手のビームライフルを二連射、デュエルとバスターのグウルのスターを撃ち抜き、グウルのパランスが崩れたバスターに、タイミングを合わせるように突っ込んできたランチャーストライクが蹴りを叩き込み反動で反転、ついでにデュエルASを蹴落としてつつアークエンジェルに戻ってゆく。突如現れたその機体に、ニコルもアスランも驚くしかない。

「アスラン、ストライクが……」

「空中で喚装だと……!?それに通信……!?」

フラガ機の支援を受けたストライクはエールストライカーを装備、その様子ニコルとアスランは再び驚かされる。さらにイーゼスに「味方からの」通信が入る。怪訝そうにそれを受けるアスラン

「久しいな。アスラン、ニコル。イザークもディアッカも相変わらずそうで、ある意味安心したぞ」

「な……!」

「その声は……!」

「まさか……!生きていたんですか!」

「スバル・クロムハーツ……!」

通信機から聞こえてくる（仕方のない結果とはいえ）皮肉気味の声。その声にザラ隊の面々はそれぞれが反応を示す。

「貴様!何故足つきと共にいる!裏切ったのか!」

「スバル、無事だったんですね!」

「ああ。ご覧の有様だが、ピンピンしているさ。それにしてもイザーク、裏切ったとは酷

いな。やむを得ず、とはいえMIA認定を行ったお前たちが、プラントに最終的には報告したんだろう？なら最初に裏切ったのはそちらだろうに。……捜索すらしなかったお前達に裏切り者扱いされる謂われはないぞ」

海面に叩きつけられ、一度母艦に帰還したイザークが怒鳴る。ニコルは彼が生きていた事を純粹に喜んでいたが、スバルの言葉に表情を暗くする。

「貴様らの知る”スバル・クロムハーツ”は死んだ。ここにいるのは”スバル・クロガネ”だ!!」

宣言と共に左手のビームライフルを構えるランスロット。ニコルやアスランは、苦虫を噛みしめたような表情で応戦するしかなかった。

+++++

「ニコル、落とされたくなければ引け!……俺もお前やアスランは落としたくない。俺の目的はお前たちを落とすことではなく、アークエンジェルをアラスカまで送り届ける事、お前たちを殺す事じゃない」

「そんな……!スバル……!」

大きく事態が動いたのは浅瀬に戦場が移行した時だった。スバルの言葉にかなり動揺し、牽制にすらなっていないビームライフルを放つニコルのブリッツに急速接近した

ランスロットが、右手に持ったビームサーベルでブリッツのトリケロスを有する右腕を下から切り上げるように肩から斬り落とし、左手のライフルでグウルを破壊。バランスを崩し、落下するブリッツの左手を掴んで近くの孤島に下ろす。

その間に更に戦況は大きく動く。イージスもグウルを失い同じ孤島に降下、ソードストライカーに喚装したストライクと交戦していたのである。

「スバル！離してください！このままではアスランが！」

「武装を失ったお前に何が出来る！困になって死ぬ気か!？」

フェイズシフトダウンをしたイージスを見てミラージュ・コロイドを起動するブリッツ。しかしその姿が完全に周囲に溶け込む前にスバルのランスロットがブリッツの左腕のグレイプニールを掴んで引き止める。

「でも！それでも僕は!!」

「ツ………ニコル!!」

対艦刀” シュベルトゲベール”を構えるストライクを見て、左腕のグレイプニールをパージ、ランサーダートを掴んで走るブリッツに、スバルは思わず歯噛みし、ランスロットの左手に、キャットトウスを構えさせる。

「アスラン！」

「ニコル……！」

「くっ……！！キラ！脚部を狙え！」

「っ……！！」

接近してランサーダートを突き出すブリッツに反応し、咄嗟にストライクに回避行動をとらせながらシュベルトゲベールを尻ぎ払うように振るわせてしまうキラ。アスランは目を見開く。

「え……？うわああああ!？」

「ニコルうううう!!!」

「な……!!。ニコル!？」

「ストライクうううう!!!」

「キラ、引くぞ！深追いする必要はない！」



足元から下半身にかけて爆発が発生し、さらにシユベルトゲベルによって下半身と上半身が泣き別れになるブリッツ。ニコルの悲鳴と共に、途切れる通信。母艦から再発進して追いついたディアツカの驚いた声とイザークの憤る声。イージスの周囲にキャットウスを牽制射しつつブリッツの上半身を抱え、離脱するスバルのランスロットと続くストライク。

イザークやディアツカが敵討ち、とばかりに武器を構えるが、ランスロットとアークエンジェルからスモーク・デイスチャージャーが放たれ、アスラン達は二機とブリッツの上半身を見失うのだった。

+++++

アークエンジェルに帰還するストライクとランスロット。二機のスカイグラスパーも帰還する。

「坊主……」

「アイツは俺達と違って元は民間人だ……ほつといてやれ。それにあの四機のパイロット、スバルの知人だったそうだしな。今回、坊主は知り合いの友人と戦う羽目になったんだ……。仕方なかったとはいえ、キラはスバルの知人を既に二人も殺し

ちまつてるんだぞ！」

「あ………」

機体から降りてきたキラを出迎えたマードック達。しかしキラは彼ら一人が思わず言った“今まで散々やってきたのに”という言葉に憤る。ムウがマードック達を窘めるとキラを追いかける。申し訳なさそうにマードック達は格納庫の片隅に目をやる。そこには上半身“だけ”のブリッツと、そこに向かうスバルの姿があった。

「俺達は次に備えよう。まだ油断は出来ねえんだ！作業急げよ！」

マードックが声を張り上げて整備士達を散らせる。そして彼はスバルに近寄る。

「その、三佐……アイツらもそんなつもりで……って三佐、何やってるんで!」  
申し訳なさそうに話しかけるマードック。顔を上げたマードックの前でスバルはブリッツの上半身に取り付き、なにやら操作を行う。

「軍曹、今すぐストレッツチャーと医務室に連絡を。……早く！」

「はい!?!うえ……直ちに!」

開かれたコクピットを覗き込んでいたスバルがマードックに指示を出す。その切羽詰まった有無を言わせない声音に、マードックも思わず大慌てでその指示に従う。

「ニコル………」

先程と異なり、ややホツとしたスバルの声音。開かれたコクピットには額から血を流し、気絶してこそ居るが、ブリッツのパイロット”ニコル・アマルファイ”がいた。

+++++

「つまり、貴方は彼を助けてほしい、と?」

「無理を言っているのは分かっている。だが彼は俺の友人で怪我もしている。今現在、アークエンジェルに彼を友人といえるのは俺しか居ないんだ。頼む」

「私は反対です艦長!あの機体は我が軍から奪取された物、怪我をしているとはいえ、パイロットはザフトの人間です!我々の敵なのですよ!」

ブリッジ通信を繋いだスバル。マリユーも複雑な表情で副官のナタルの言葉を聞く。「ナタル、その持論だと、スバル三佐も敵だった、ということになるわよ?今、彼はオーブ軍の士官だけど、元々はザフトの軍人。私たちが撃破したバルトフェルド隊の生き残りだわ。それにオーブに入港する直前の戦いでも、彼の機体は我々を攻撃していたのよ?」

「それは……!」

マリユーの言葉に、自分がどれほど危険な考えで物事を口にしていたか気づき、慌てるナタル。気まずそうにモニターを見るが、スバルは表情一つ動かさずにいた。

「軍人としては、まあ、当然の反応だろうな。俺みたいないない考えの方がむしろ異端だろ

う。ラミアス艦長、こちらの要請の件、どうしても無理か？」

「……先程のバジール中尉の失言もあります。許可しますが、こちらで選んだ見張りなどは、付けさせていただけきますよ？」

「構わない。艦長の寛大な判断に感謝する」

スバルの言葉にマリユーは妥協案と共にスバルの頼みを了承する。スバルが通信を切ると、ナタルが更に申し訳なさそうにする。

「申し訳ありません艦長。この罰は……」

「彼の言うとおり軍人としてはアナタが正しいのでしようね。でももう少し臨機応変に、なおかつ冷静に物事を判断して言葉にしなさい、ナタル。彼の好意もあります。今回は不問にします」

ため息混じりに告げるマリユー。ナタルもかなり反省した様子で敬礼し、その場を後にするのだった。

+++++

アークエンジェル医務室内

「……う……」

アークエンジェルの医務室。そのベッドでニコル・アマルフィは意識を取り戻した。

「目が覚めたか、ニコル」

「スバル……つつう……」

「肋骨二カ所にヒビが入っている、無理をするな。俺も咄嗟の行動だったとは言え、キャットウスとグレネードの衝撃まで、フェイズシフトは防げない。さらにシユベルトゲベールの一撃もあつたんだ。この程度の怪我、さらに五体満足ののが奇跡だよ」

備え付けの椅子に腰掛け、リンゴの皮を剥いていたスバルが声をかける。それにより意識が完全に覚醒したニコルが思わず上半身を起こすが、痛みに呻く。起き上がる手助けをしたスバルが、優しく彼に体のことを教える。

「その、一体何が……それに、キャットウス？グレネード……？」

「気がつかなかったのか？」

「あの時はただ、アスランを助けたくて必死でしたから」

スバルの顔を見ながらニコルが問う。彼の言葉に苦笑しながら答えざるを得ないニコル。

「お前の機体“ブリッツ”のミラーージュ・コロイドシステムは展開中、フェイズシフトは張れない。そして解除と同時にフェイズシフトを展開する。そしてフェイズシフトは先程言ったとおり“衝撃”までは防げないし、一定の攻撃までは防げない、ここまでは

「良いな？」

「はい」

「ストライクの交戦データ等からフェイズシフトはコクピット周りから展開されると気がついてな、お前の機体がミラーージュ・コロイドを解除したと同時に左手のキャットウズ一発と腰部マルチランチャーのグレネード、それに両腕のグレネードランチャー搭載型防盾のグレネード……これら全てを一斉にブリッツの足元と機体背面に叩き込み、ブリッツをその衝撃で僅かに浮かばせてシユベルトゲベルの一撃がコクピットの下を通過するようにしたのさ。とはいえ、理論上はブリッツが浮くと分かっているも、実際には一か八かの”賭け”だったがね」

「無茶苦茶ですね……」

スバルがあの時行った一連の行動と、その行動にポカンとするニコル。まさかあの僅かな時間でそれだけの事をやるとは思わなかったのである。

「アークエンジェルの艦長に頼んで俺がこの艦を離れるまで、監視付きだが、ここに居れるようにした。俺が離れるときに共にオーブに向かうことになる。そこからどうするかは、お前次第だ」

「スバル……」

「その時、お前が決めたことなら、それを俺は尊重し、出来る限り力になる。プラント本国に帰還するもよし、俺と同じくオーブに亡命するもよし。……決めるのはお前だ。意図せずだが、オーブでのコネもある程度持てたからな」

スバルの言葉に唖然とするニコル。やむを得ず、とはいえ攻撃していた自分の為にごまかしてくれるとは思わなかったのだ。

「何故……」

「一緒に居た期間は短かったが、それでもお前は俺に気遣ってくれた。その恩返しだよ。

「どこへ……?」

「機体だ。この艦は現在地球軍本部のあるアラスカに向かっている。俺の機体、ランスロットの航続距離の理論限界点まで後僅かだが……アスラン達とは恐らく、もう一度戦うことになるだろう。だが、俺の受けた任務は“アークエンジェルと共にアラスカ方面に向かい、ランスロットの航続距離ギリギリまで護衛すること”だからな、それに備えるまでだ」

医務室を出ようとするスバル。思わずニコルが問いかけるが、スバルはそれだけ伝えるとその場を去ってゆくのだった。

## P H A S E — 1 1

+++++

C・E・71 4月17日 マーシャル諸島

日没間近にザラ隊の三機が母艦、ボスゴロフ級潜水空母から出撃、アークエンジェルの後から襲いかかる。彼等は仲間のニコル・アマルフィがスバル・クロガネの化け物じみた技量による大博打により生きっていると知らない（むしろ状況が状況だけに死んだとしか思えなかった）。故に復讐心で挑んでいた。

「行くぜ!!」

「敵影3、5時方向、距離3000!」

「同方向より熱源接近!」

「回避! 取り舵!」

「フラガ少佐、ヤマト少尉、クロガネ三佐は?」

「各機準備完了しています」

先制にバスターが超高インパルス超射程狙撃ライフルを放つ。レーダーでそれを捉



えていたアークエンジエルは、回避行動を行いつつ順次対応する。

「ストライクは後部デツキで迎撃、アークエンジエルの守りにつけ。フラガ少佐はバスターの牽制に回ってくれ。アグニの火力を利用すれば盾を持たないバスターは押さえられる筈だ。アークエンジエルは少佐と私の支援をしつつ回避行動を優先。イージス、デュエルには私が対処する。アラスカ防空圏までは後僅か、グウルさえ破壊できればそれで良いはずだ」

「了解だ」

「分かりました」

「待ってください！イージスは僕が！」

「グウルを破壊してアラスカの防空圏に逃げ込めばイージスらは追ってこないはずだ！俺達の目的はX（エックス）ナンバーの破壊ではない！目的を履き違えるなヤマト”少尉！”」

スバルが指示を出す。軍が違えどもその実力や作戦立案能力を知るムウやマリユはあつさり了承（これは目的を理解しているため）。

だが、キラは目的を理解できなかったため反論する（これは彼が元は軍人ではなかったのも原因）。しかしスバルの真剣な表情に、キラは言葉を失う。

「いい加減しつこいんだよ、お前ら！今日こそ叩き落としてやる！」

「罵りたければ罵れ。だが、結果はどうであれ”見捨てた”のは貴様らが先だ」

「ツ……スバル貴様……!!!この……ニコルを見捨てた裏切り者がああ!!!」

「こいつら……!!」

「くっ……」

ランチャーストライカーを装備したスカイグラスパー1号機がアークエンジエルの支援を受けつつバスターを牽制する。スバルは感情を排した声音で宣言、歯噛みするアスランのイージスと激昂するイザークのデュエルASをアークエンジエルの支援砲撃を受けつつビームライフルで巧みに押さえ込む。

+++++

「アスラン……!!」

「ヤマト少尉！何故出てきた！アークエンジエルを守れ！」

事態が急変したのはスコールが近づくと、アークエンジエルに接近したイージスにストライクが後部デッキから飛び立ち、スバルらから離れるように交戦を開始してからであった。スバルはデュエルを抑えつつ、キラに怒鳴る。

「この……!!」

「ふざけるな！」

「ちっ……フラガ少佐、支援する！」

「うわあ!」

フラガ機がアグニを放ち、バスターを牽制する。デイアツカはそれを苛立ち混じりに回避すると、両肩のミサイルを全弾発射する。それを確認したスバルは、デュエルのライフルをバレルロールで回避しつつ接近、デュエルに飛び蹴りを叩き込んで機体を弾き飛ばしつつ反動で離れ、試作型フライトユニット“ハヤブサ”のサブアームが背面に向けて構えた90mm対空散弾銃でミサイルを撃破する。

「クソッ、作戦が台無しだ!……ヤマト少尉!そこまで言い切るならせめてイージスを抑えきれ!アークエンジェルに被害が出始めているぞ!」

「そんな事……!」

「イーゲルシユテルン4番、5番被弾!」

「ヘルダート発射管、隔壁閉鎖!」

キラの参戦でイージスが離れた結果、スバルの牽制が間に合わなくなり、超跳躍しかできないストライクをあざ笑うかのようにビームライフルでアークエンジェルを狙うイージス。被害が出始めたアークエンジェルを傍目にデュエルASを牽制しつつ怒鳴るスバル。

ここで離れた場合、デュエルASがフリーになってしまう為、スバルはデュエルAS

から離れられなくなった。アークエンジェルに被害が出てきたため、ムウにも負担が開始している上に、スカイグラスパーはあくまでも”支援”戦闘機、無茶はできない。

「直上よりイージス！」

「何!?! ヤマト少尉は何をやっている!」

「緊急回避!!」

「プラズマタンブラー損傷! レビテーター、ダウン! 揚力が維持できません!」

スバルから怒鳴られるキラからの射撃を一度距離を取って回避したイージスが、アークエンジェルの直上から接近、グウルから離れ、モビルアーマー形態時のみの武装”スキュラ”を二連射で放つ。副砲のバリアントと主砲のゴットフリートにそれぞれ直撃、さらにバリアントを撃ち抜いた一撃が甚大な被害をもたらし、アークエンジェルは姿勢を崩す。

「姿勢制御を優先!」

「緊急動力は予備レビテーターに接続!」

「スカイグラスパーで俺も出ます！危ないですよ、このままじゃ」

「待ちなさいケーニヒ二等兵！」

マリユーやナタルの指示が飛び交う。我慢できなくなったツールが、マリユーの静止を無視してスカイグラスパーに乗り込むためにブリッジを後にし、スカイグラスパー二号機で出撃する。

「はあああああ!!!」

「あああああ!!!」

「8時方向よりバスター接近！ゴットフリート、バリアントの射角、及び射線が取れませんか！」

いつしかマーシャル諸島の中で一番大きな島に降下し、お互いにビームサーベルでの格闘戦に移行する両機。揚力を失い、姿勢制御が出来なくなったアークエンジェルも同じ島に着底、バスターの接近に武装が使えないという事態になる。

「俺はまた・・・守れないというのか・・・？そんなのはもう、認められるか！」

「ツ・・・邪魔だ!!」

「何?!くっそおおお!!!」

バスターの接近を確認したスバルは自身を襲った感覚に恐怖し、それを意志の力でねじ伏せようとする。すると彼の両目から「弟」のキラと同じように虹彩が失われる。その直後、ライフルをマウントしつつ回避行動と共に突撃、シヴァとミサイルを放ったデュエルASに今まで以上に鋭角な機動で回避と同時に接近、ビームサーベル二刀流を披露し両腕とシヴァの砲身を破壊、デュエルASをグウルから蹴り落とした反動をも利用し、ランスロットがバスターに向かう。

「やらせるか!!」

「くそ……!」

ガンランチャーと高エネルギー収束火線ライフルを構えたバスターにムウのスカイグラスパー1号機が無茶を承知で突撃、背面のビーム砲でグウルを破壊する事に成功する。

「この……!」

「ち……!」

グウルから離れたバスターが対装甲散弾砲を放ち、それと同時にスカイグラスパー1号機からアグニが放たれる。お互いに放った砲撃は、スカイグラスパー1号機のアグニ、バスターの右腕をお互いに破壊する結果になった。

「ぐう!?!」

「ちつくしよ!着水する!」

スカイグラスパー1号機は海に着水、バスターは着底したアークエンジェルの正面に落下する。

+++++

「キラああああ!!!お前がニコルを!ニコルを殺したんだ!」

「ぐううう．．．!」

「キラあ!!」

「トール!ダメだ!来るな!」

島の反対側ではイージスの猛攻撃にストライクが終始圧倒されていた。そこにトールが操るスカイグラスパー2号機がビーム砲を撃ちながら接近する。思わず離れるように促すキラ。

「邪魔を．．．!」

「トールうう!!!」

「うそ．．．?」

対艦ミサイルを放つスカイグラスパー2号機。アスランは苛立ち混じりに回避しつ

つイージスのシールドを投擲する。勢いよく回転するシールドはスカイグラスパー2号機のコクピットに直撃、アークエンジェルのC I Cにスカイグラスパー2号機のシグナルがロストした知らせが届き、アークエンジェルC I Cに座るミリアリアはその知らせに啞然とする。

「アスラアアアン!!!」

「ちい……」

ついにキラの瞳から虹彩が消える。イージスのサーベルをシールドで弾き、振り上げたサーベルで左腕を斬り飛ばすストライク。蹴り飛ばされ、イージスのエネルギーが危険域に突入する。

「俺が……お前を討つ!」

覚悟を決めたアスランの瞳からも虹彩が消え、イージスは残った右腕と両脚からサーベルを出力、ストライクのシールドと共に左腕を脚部のサーベルで斬り飛ばす。

しかしそれと同時にストライクのサーベルがイージスの頭部を貫通、衝撃でお互いに離れると即座に突撃する。

「アスラアアアン!!!」

「キラああああ!!!」

ここでイージスが斬りかかると見せて可変、残ったクローでストライクを捕縛し、超



至近距離からスキュラを叩き込もうとする。

「くっ……!!」

「なっ……。こんな所で……!!」

フェイントに引っかかり、可変したイージスに捕らわれるストライク。しかしスキュラに収束していた光が急速に失われる。アスランが確認すると同時にエネルギーがなくなる。そしてフェイズシフトダウンを起こすイージス。

「ちいつ……。!ならば……。!」

動き出すストライクを見てアスランは手元の機器に自爆コマンドを入力、イージスから脱出する。次の瞬間、イージスは捕らえたストライク諸共自爆するのであった。

+++++

「ツ……。やらせるか!」

「なっ!? 両膝予備バッテリーごと脚部損失!? あの一瞬でかよクソツタレ! ぐう!? しかもハイドロ消失、グローパルス低下まで……。!」

アークエンジェル前方に落下したバスターだったが、即座に片腕でアークエンジェルに狙いをつける。そこにスバルのランスロットが強襲、ビームサーベル二刀で両膝の予備バッテリーごと脚部を斬り飛ばすように斬り抜けサーベルを投棄、更に反転しつつ両

脇からサブアームを突き出させて90 m対空散弾銃を叩き込む。

「ッ……………」

「……………」

落下と90 m対空散弾銃による衝撃に眉を寄せつつ計器を操作し、必死に立て直しを図るディアツカだったが、バスターの前にランスロットが着地、問答無用でコクピットにビームライフルとキャットウスを向ける。

「…………… 投降するなら、撃つ気はない」

「…………… ツ」

スバルの感情が感じられない声にディアツカは彼の言葉なき警告を顔を青くして理解する。すなわち「投降しないなら、コクピットを問答無用で撃つ」と。

「え……………」

「投降する気か……………!?!」

「…………… ツ」

バスターのコクピットが開かれ、ヘルメットを取りつつ両手を上げたディアツカがライフルを構えるランスロットとアークエンジェルの前に姿を現す。

その様子を見て、マリューとナタルは啞然とする。デイアツカはやや顔は青いものの、慄然として顔で、ランスロットが構えるビームライフルとキャットウスを睨むのだった。それはイージスが自爆する、僅か5分前の出来事である。

+++++

「今の爆発音はなんだ!？」

「分かりません。ですが・・・スカイグラスパー2号機とストライク、その両方との通信が途絶しました」

「それと同時にイージスの反応も消失しました。バスター、及びそのパイロットは収容しましたが、クロガネ三佐の機体も損耗が激しく、直ぐには行動ができません。マードック軍曹からの報告では少なく見積もっても1時間はランスロットは動かさせません。更に本艦は火器の約四割が使用不能。応急修理を行い、飛べる様になるまで10分が必要ですが、15分後にはこちらに接近中のデイン4機と会敵します」

ブリッジに被害を受けたスカイグラスパー1号機から降りたムウが問いかける。マリューもナタルも最悪の事態を想定しつつ、答える。

「ヤマト少尉、ケーニヒ二等兵は共にMIA。応急修理完了次第直ぐに現空域を離脱す

べきだと思いません、艦長」

「2号機とストライクの最後の確認地点、ならびに島の位置と救援要請をオーブに通信。……責任は私がとる」

「クロガネ三佐……!!」

「アークエンジェルは現空域を離脱するべきだ。……ラミアス”艦長”。アナタはクルーにこの場で死ねと命令するつもりか!？」

「ッ……!」

ナタルの報告に唇を噛み締めるマリユ。そんな彼女に変わり、ブリッジにやってきたスバルが変わりに指示を出す。余りの越権行為に、マリユがスバルを見やると、彼の唇からは血が流れていた。

「……ッ!機関最大!この空域から離脱する!」

「……艦長や隊長の責任は、非常に重たいな。だがラミアス艦長、この事態は俺にも少なからず責任がある」

マリユが指示を出す。そんな彼女をスバルはかなり申し訳なさそうな表情で見、ブリッジを後にするのであった。



「トールがMIAだなんて……」

「嬢ちゃん……」

「フラガ少佐、私が対処します。……彼が出撃を決意するような事態になったのは、作戦をたてた私の責任ですから」

「ツ三佐……。すまねえ」

ブリッジから格納庫に戻ったスバルは、スカイグラスパーのシユミレータ機の前にならずくまるミリアリアと、その前で俯くムウを見つめる。

ミリアリアの嗚咽混じりの声を聞いた彼は、ムウに一言掛けてミリアリアに近寄る。ムウは、スバルの拳が堅く握りしめられていたことに気づき、申し訳なさそうに背を向け、その場を後にする。

「……責任は、あの作戦を立案した俺にある。殴ってくれても……むしろ、殺されても文句は言えないよ」

「スバルさん……嘘じゃ……ないんですよね……」

涙を流すミリアリアは、思わずスバルに抱きつき、声を押し殺す。彼はそんな彼女に触れることすらできなかつた。

+++++

C. E. 71 4月18日 マーシャル諸島

様々な要因があるためアークエンジェルにそのまま同乗、アラスカに向かうことになったスバル・クロガネ三佐からの緊急報告、及び緊急要請を受け、オーブ軍は大規模な探査団をマーシャル諸島のスカイグラスパー2号機とストライクの最後の信号が確認された島に派遣。その中には同行を強固に望んだ、カガリ・ユラ・アスハの姿もあった。

彼らの必死の搜索もむなしく、最終的に確認されたのは大破したストライクと、木っ端微塵になったイージスとスカイグラスパー2号機の残骸、そして気絶したアスラン・ザラしか発見することができなかつたのである。

## P H A S E — 1 2

+++++

C. E. 71 5月2日

アラスカの防空圏内に逃げ込んだアークエンジェル。沈んだ気持ちのカズイにキラを探していたフレイが詰め寄る

「……え……?」

「だから、M I A。戦闘中行方不明。軍では、未確認の戦死の事」

「キラは!」

「キラ・ヤマト少尉も、トール・ケーニヒ 二等兵も、生きているか死んでいるか不明なんだ、フレイ・アルスター 二等兵。」

カズイの肩を掴んだフレイ。そんな彼女の手を、オーブに戻るタイミングを失い、そのままアラスカに同行する事になったスバルが掴む。

他軍とはいえ、士官である彼が嘘をつく理由もなく、フレイはその言葉が嘘でないと理解し、キラに謝る機会を失ったのだと理解する。

「私、キラに謝りたかったのに……」

「……ケーニヒ 二等兵とキラ少尉を失ったのには、あの作戦を立て、指揮していた俺にも少なからず責任がある」

涙を流すフレイ。スバルもキラの友人達から彼とフレイの複雑な関係は聞いており、申し訳なさそうにする。

「だが、M I Aでも僅かながら希望はある。少なくとも、K I Aではない。生きている可能性は高いはずだ」

「……え？」

彼の言葉に涙混じりにフレイも、その場から離れようとしたカズイもスバルに目を向ける。

「シグナルロスト直前、ストライクのエネルギーはまだ余裕があったのに対し、イージスはエネルギーに余裕はなかったはずだ。スキュラの二連射も行ったみたいだし、執拗なまでにアークエンジェルに攻撃をしていたようだからな。そして同時にシグナルロストした事から鑑みて、恐らくだがイージスは組み付いてからの機密隠滅用の自爆機能を用いたのだろう、と俺は考えている。ストライクには実体の攻撃に対して破格の防御性を発揮するP S装甲がある。ここまでくれば、俺が生きている可能性が高いといった理由が分かるな？」

「つまり、少なくともP S装甲が自爆の衝撃を軽減した、って事ですか？そんな無茶



な……」

スバルの言葉に、フレイは瞳を輝かせたが、カズイは少し呆れながら下を向く。

「CICに残されていた戦闘ログ、俺が知りうる303のパイロットの性格等から導き出した予測、それからモルゲンレーテで見聞きしたPS装甲やXナンバーの性能等々……。何もデタラメを言っているわけではない。信じる信じないは個人の自由だがな」

「……」

スバルの言葉に、カズイは俯いたまま逃げるようにその場を去り、フレイは先ほどとは違い、何かを決意したような表情でスバルに頭を下げ、その場を後にするのであった。

一方、感情を押し殺したナタルに指示を出されたサイ・アーガイルは二つの箱を手に、居住区にやってきていた。

そこで彼は塞ぎ込んでいるミリアリア・ハウを発見。サイは遺品整理用の箱を隠しつつ食事に連れ出す。

+++++

「何時までほつとくつもりだったんだよ！……クソツタレ！スバルてめえ、よくも裏切りやがったな！」

「静かに歩けディアツカ・エルスマン。それと、何度も言わせるな。俺は貴様の言う”ス

バル・クロムハーツ”は既に死んだと言ったはずだ。オーブ軍所属の”スバル・クロガネ”三佐だ。それに搜索もせずMIAと認定したヤツが何を言うのか」

「あれ……」

「バスターのパイロットだよ。かなり無理言つてクロガネ三佐に護送してもらつてるんだ」

通路に出たサイとミリアリア。すると前方から拘束されたディアツカがサブマシンガンを持つスバルに連れられて歩いてきた。哑然とするミリアリアにノイマンが説明する。

「なに？この艦（ふね）女の子も居るの？たく、泣いてんじゃねえよ。……泣きたいのはこつちだぜ全く……」

「黙つて歩けエルスマン。……二度目はない。いくら捕虜への暴行が禁止されてるとは言え、人の感情は抑えられるモノではないからな」

俯くミリアリアを見たディアツカが茶化すように侮蔑する。サイが憤りを見せるが、それより先に感情を感じられない、しかし刺すような殺気と共にディアツカの頭に銃が突きつけられる。

ミリアリアの刺すような視線を受けつつ、デイアツカは連れて行かれるのだった。

+++++

C. E. 71 5月4日 アラスカ

アークエンジェル内士官室

「スバル、アナタまで艦内待機を強要されていると？」

「ああ。あらゆる通信も禁止されている。一応、オーブに戻ったらウズミ様に報告、行政府から抗議を行ってもらう予定だ」

アラスカに到着したアークエンジェルだったが、到着して2日経過してもなお艦内待機が厳命されていた。他軍の士官であるスバルにすらそれは強要されており、スバルは何かの悪意を感じざるを得なかった。

やれる事と言えば傷が癒えてきたニコルを、マリユ一の好意であてがわれた部屋に移し、そこでとめどない話しをする程度。

「デイアツカは……」

「少しばかり機体をゴコゴコにし過ぎたらしくてな。現在はここの真正面の部屋で安静中だ。アークエンジェル側も忙しいらしくてな。俺はまあ、その監視を頼まれてるんだ。完璧に縛っているし、アイツもそんな状況ではな……」

「なら僕は顔を見せない方が良さそうですね。彼らの中では僕は死人でしょうし」

「ニコル……」

「何をしてるんだミリアリア!!」

ニコルに話すスバルだったが、唐突に何かが倒れる音と、焦ったようなサイの声がドア越しに聞こえ、ニコルと思わず顔を見合わせる。

「おい何事……」

「ダメエー!」

ニコルが姿を見せないように隠れたのを確認し、スバルがドアを開けた瞬間響く発砲音。思わず腰のホルスターに納められている拳銃に手を伸ばしたスバルの前に、涙混じりのフレイ、ミリアリアの二人が倒れ込んでくる。

「アーガイル二等兵、その拳銃にセーフティーを掛けて持つておけ!セーフティーの掛け方くらいは学んでいるだろう!」

「あ、は、はい!」

額から血を流し、ベッドに寄りかかるディアツカを見たスバルは、とりあえず現状を収束させるため、越権行為だと理解しつつ指示を出す。サイもスバルが言わんとする事を理解し、慎重にディアツカを見ながら拳銃を確保。その間、スバルがディアツカに銃を向けており、拳銃を確保したのを見てからサイに頷く。それを確認したサイは銃に

セーフティーを掛け、右手に持つ。

「おい何だ！この騒ぎは！」

そして漸く近くにいたアークエンジェルクルーのロメオ・パルが同僚を伴ってやってくる。スバルが説明し、マリューに話しをするように頼むと、パルは頷き、同僚に指示を出す。

パルから頼まれて共に医務室からディアツカを護送、その時にパルがサイにミリアリアとフレイの事を指示したため、護送を終えたスバルはまず、マリューを探し、艦内を移動する。(ちなみにパルにそのままニコルの監視も形だけとはいえ頼んだ)

+++++

「何か用か？クロガネ三佐。．．．その、わざわざ上層部へ説明をしてもらうために同行していただいたアナタにまで艦内待機を強要する事になって申し訳ないと思う」

「気にすることはないさ。これもアナタがいう規律だからな」

「聞いてらしたのですか．．．」

マリューらに会ったスバルは事情を説明し、彼女の許可をもらう。その後、彼は少しだけ話がしたいとナタルを呼び止める。

ナタルもスバルには申し訳ないと思っっているのか謝罪するが、それをスバルは少し皮

肉気味に返す。

先程のマリューとの会話が聞かれていたのを理解したナタルは、少し俯く。

「貴官の言いたい事はまあ、理解できる。ザフトにはない制度だからな。……だが……」  
「何か？」

「貴官の持論でいけば……兵士は別に、人間でなくとも良い。極論を言うなら、機械が担つても良い、と言うことにならないか？」

「それは……！」

皮肉気味な笑みを浮かべたスバルに自分の持論を突かれ言葉に困るナタル。

「貴官らにとつては敵軍であるザフトの指揮官、アンドリュー・バルトフェルド隊長の指揮くらいしか見たことがなく、今も他軍ではない上に若造な私がどうこう言うべきではないのだろうかね、少し考え直す事を勧めるよ」

「アナタは……。アナタはラミアス艦長の方が正しいと……!？」

「“正しい”とか、“間違つてる”ってのは問題じゃない、人には理性等も問われるものだし、艦長とは責任も重たいものだと思う。しかし“機械”ではなく“人間”が“艦長や兵士”を勤める理由は必ずあるだろうと俺は考えている。それに対して自分なりの答えを持てたのならばアナタはラミアス艦長が言うとおり、きっと良い艦長になれる

「さ」

スバルの言葉にナタルは顔を上げる。そこには、実際は自分より若いはずなのに、自分より年上に見える男性士官が立っていた。

その眼差しを真つ直ぐ見れず、ナタルは視線を逸らす。

「なに、これは答えは一つではないし、人によって違うものだからな。自分だけの答えが見つかれば良いと思う」

「艦長や兵士が、機械でなく、人である理由、ですか……」

考え込むナタル。そんな彼女にスバルは話題転換という感じに話しかける

「ああ、それと、一つ聞いてみたいことがあったんだ。これは俺、個人の事だから、まあ、気楽に答えて欲しい」

「何でしょう。私で答えられる事ならば」

ナタルもスバルの個人的な質問が気になったのか、意識を切り替える。

「あの時知つただろうが、俺には両親と呼べる存在がない。家族と呼べるのも、MIA判定が出されたキラだけだ。知つたのもあの時だったしな。だからかね……俺は”

愛”つてヤツが全く理解できない。友人や恩人を大切に思つたりする事はできても、俺は人を、他人を愛おしく思うことができないんだ」

「それは……」

「なあ、人を愛したり、人に愛されるのって、どういう事なんだ？ どういう気持ちなんだ？ これだけは、バルトフェルド隊長達も教えてはくれなかったんだ」

スバルの独白じみた問いに、ナタルは言葉を失う。スバルの表情はとても悲しそう  
で、ナタルは彼には喜怒哀楽の感情はあつても”愛”だけが欠けていることを理解す  
る。

「その問いに対する明確な答えを、私は持ち合わせてはいません。それは、自身が気付  
き、育むものだ」と私は思います」

「……そうか」

ナタルが苦しそうな表情で告げた言葉に、スバルはやはり悲しそうに答える。

「悪いな。変な事聞いちまって。……探せたら、探してみるよ」

「……見つけられると、良いですね。アナタは人に優しいですから、必ず見つけら  
れると思いますよ」

スバルに笑みを向けるナタル。そんな彼女は背を向けて歩いてゆく彼に思わず声を  
かける。

「参考程度ですが”愛”には様々な形があります。ですので、すぐ、見つかりますよ。ア



ナタならきつと」

「・・・アドバイス、ありがとうバジル中尉」

一度振り返り、笑みを浮かべるスバル。一人立つナタルは壁に背を預け、見惚れてしまったその笑みの余韻を冷まそうと試みるのであった。

## P H A S E — 1 3

+++++

C. E. 7 1 5 月 8 日

「で、アークエンジェルはアラスカ防衛隊に移動、俺らの移動はパナマのゴタゴタが終わるまで待っててか？ふざけんな！何時まで待ってっていうんだ・・・！」

「スバル、仕方ないですよ。ザフトの準備をしている作戦、オペレーション・スピットブレイク」はNジャマー敷設や地上に置ける軍事拠点の確保、敵対する地域の宇宙港やマス・ドライバー基地施設の制圧による地球軍の押さえ込みの三つで構成され、もう一年近く前に行われた赤道封鎖作戦、オペレーション・ウロボロス”の強化策らしいですから。地球軍もオーブとの問題より、不確定要素の排除を優先したいのでしようし」

「だからと言って、通信すらさせないだど!?舐めてんのか！」

マリューに再度あてがわれた部屋（ちなみにまたディアツカの居る部屋の正面）で珍しく怒りを露わにするスバル。

ニコルもスバルを宥めつつ、カレンダー付きの時計を見やる。

「アラスカに来て、通信を禁止され、艦内待機の命令が出てもう、今日で6日だぞ!?外の

風景も見れず風の入替えすらない、いくら砂漠に慣れていてもストレス位、溜まるわ！」

憤りの収まらないスバル。ニコルも友人である彼のそんな顔は見たくないため、表情を陰らせる。(ちなみに向かい側のディアツカにはスバルの声は普通に聞こえているが、ニコルの声は彼が意識して小さくしているため聞こえていない)

+++++

「クロガネ三佐、相当ストレスが溜まっているみたいですね」

「分からないでもないですよ、あれじゃ」

「軍上層部のあんな言い方を言われちゃ無理ないわな。むしろ通信越しに怒鳴り返さなかつただけでもすげえ」

アークエンジェルのブリッジでも、日に日に聞こえてくる頻度の増すスバルの声は、クルー達も良く理解できていた。ノイマンやサイ、チャンドラも同じ立場、同じ言い方をされたら恐らく、と、いか余程のマゾでもない限りはその場でブチギレても文句のない内容だったため、その時我慢したスバルの精神力にむしろ感嘆を覚えたほどだった。

しかもマードックらの計らいで彼にランスロット、裏切りの騎士の名で呼ばれるその機体は、補給のために訪れた地球軍の士官達の目に映らないよう、巧妙に隠匿されていたため未だにアークエンジェルの格納庫に完璧に整備された状態で健在。”何時（いつ）彼が機体に取り込むか分かったものではない”と皆、ヒヤヒヤしているのだった。（マリューらが査問会に出頭した翌日、アークエンジェルの射撃訓練所で深夜まで何もせずに椅子に座る、瞳孔が開ききつたスバルの姿をチャンドラが発見。その翌日に相談を受けたマリューがオーブへ同行を予定しているニコルに、彼に着いて歩く事を独断で許可したほどだった。自身の過去未来永劫問うまでもなく一番怖かった、とはチャンドラの談）

「なあ、何時大爆発すると思う？」

「今も爆発してるだろ」

「いや、ああいうタイプの大爆発は、十中八九今よりヤバいと思う。あの人コーディネーターだし、そうなったら俺らじゃ止められねえよ、きつと」

不安を滲ませてC I Cの面々が話し合う。マリューもスバルの事を考えると何か手を打たなくてはと思うのだが、結局は一介の下士官たるマリューにはできることが少ないのだった。

+++++

唐突にアラートが鳴り響き、上官のサザーランドから防衛指令を受けるアークエンジェル。艦内に第一戦闘配備が発令される。

「これよりアークエンジェルは防衛任務のため発進します！」

「そんな、キラも少佐も居ないのにどうやって」

絶望的な状況、マリューは発進指示を出すことになる。カズイの言葉に、彼女は案を出すことができない。

ドックから発進する為にアークエンジェルの固定が解かれてゆく。ドックのゲートが徐々に開かれるなか、マリューの元に通信が入る。

「ラミアス艦長、コレはまさか!？」

「クロガネ三佐……!!。……現在、アラスカはザフトの襲撃を受けています。……どうやら狙いを直前でパナマからこの、アラスカに変更したようです」

「迎撃に出るのか。地球軍の戦力は?」

「本艦を含むユーラシア連邦を中心とした部隊です」

「ユーラシア連邦の……？アラスカは大西洋連邦の管轄のはずだ！そいつらはどうしたんだ！」

「大西洋連邦の部隊は全て、パナマに……。通信も途絶しています」

あらゆる事を封じられ、アークエンジェルに缶詰めにされていた為に、クルー達から爆発を恐れられていたスバル・クロガネ三佐からの通信。本来なら秘匿すべきだが、マリューは彼なら何か案を考えてくれるのでは、と考え、説明する。

「本部との連絡は？」

「既に指揮系統が混乱しているらしく……。先ほどから防衛線を維持、臨機応変に対応せよ、としか」

スバルの質問に、視線だけでCICに問うが、チャンドラとミリアリアは揃って首を振る。

「……………はあ……………。本来なら、オーブ軍に所属する俺は、参加しちやダメなんだろうな……………。最悪、軍籍剥奪かな……………？」

「三佐……………？」

ため息を画面越しにつくスバル。マリューは彼の考えが分からず、思わず問いかける。

「アークエンジェルが沈めば俺達も死んじまうんだ。ランスロットの整備は完了しているのか？」

「マードック軍曹からの報告ではスカイグラスパー1号機共々、整備は欠かしていないとは聞いていますが、まさか……!?!」

「そのまさか、だよラミアス艦長。オーブから積んできた装備、全て準備しておいてくれ」

スバルの久々に見せる皮肉気味の笑みに、マリューはここに来て彼の言わんとするべき事を察する。通信を切られたマリューは慌てて格納庫で待機しているであろう、マードックに通信を繋ぐ。

「艦長!?!」

「三佐のランスロットの発進準備を! 装備もです!」

「わ、分かった!」

「ドック、抜けます!」

「イーゲルシュテルン、バリアント、ゴットフリート全門起動！ヘルダート全門装填！ミサイル発射管、コリントス、ウオンバット装填！フレア弾とアンチビーム爆雷も装填して！付近の艦艇に通達急いで！」

マードックに連絡を入れたマリューは矢継ぎ早に指示を出す。こうしてアークエンジェルは絶望的防衛戦に突入するのだった。

+++++

「全く・・・英雄とか、そういうのはバルトフェルド隊長の役割だと思っただがな・・・！まあ、今まで溜まっていた鬱憤晴らしも兼ねさせてもらうか・・・！」

「進路クリア、ランスロット発進どうぞ！・・・スバルさん、大丈夫ですよ？私たち生き残れますよね？」

機体を立ち上げ、カタパルトに接続したスバルに、通信機越しにオペレーターのミリアリアが縋るような瞳を向ける。そんな彼女にスバルは敢えて不敵な笑みを向ける。

「任せておけ。俺はザフト時代は闇夜の銀狼の異名を持つエースだったんだぞ？俺自身、見つけたいこともできたしな。必ず生き残らせてやる！だからしっかりとオペレーター頼むぞ？・・・ミリイ」



「……はい！」

「ランスロット、出るぞ！その名が伊達ではないこと教えてやろうか」

涙目のミリアリアに少し親しみを込めて愛称と共に笑みを向けるスバル。その笑みに勇気づけられたのか、はつきりとした返事をしたミリアリア。犬歯を剥き出しにした笑みを浮かべると、彼のランスロットはモノアイを不気味に光らせ、発進するのだった。

## PHASE—14

+++++

「バリアント1番、2番沈黙！艦の損害率、25%を突破しました！」

「イエルマーク、ヤマスラフ共に中破！対空砲沈黙！脱出する模様です」

「パナマ方面からの反応、一切ありません！」

「三佐、10時方向からミサイル15、モビルスーツが8時から6、2時から4、11時から3、来ます！」

防衛についたアークエンジェルと、それを助ける為に独断で参加したスバルのランスロットだったが、数の暴力には流石に抗えずにいた。特に有名になつていたアークエンジェルは、ザフト軍のモビルスーツの苛烈な波状攻撃を受けており、ランスロットのカバーがなければ既に轟沈しても不思議ではない量のモビルスーツに襲われていた。

「よっしゃ、まだ粘つていたな!? それにあればランスロット!? 何で・・・って詮索は後だな！アークエンジェル！こちらフラガ！聞こえるか！応答せよ！くっそ、通信機がイカレてるのか!？」

その時一機の戦闘機が「スピアヘッド」が被弾しつつもアークエンジェルに接近して

ゆく。

「友軍機・・・!? 着艦しようとしてるのか!? んな無茶な!」

「三佐! こちらに友軍機接近中! カバー願います!」

「緊急着艦ネット用意!! 整備班! どこかの大バカが一機突っ込んでこようとしてるわ! 退避!」

アークエンジェルでもその様子が確認出来たのか、慌ただしく指示が飛び交う。ミリアリアのオペレーターを受け、スバルのランスロットがムウのスピアヘッドをカバーするように両脇から突き出させたサブアームが保持する90m対空散弾銃を連射、シグーやデイン、ジンをミサイルやグウルゴと叩き落としてゆく。

「艦長!」

「フラガ少佐!? あ、アナタ一体何を!? 転属は!?」

破壊された右舷格納庫にスピアヘッドをねじ込むように緊急着艦させたムウがブリッジに駆け込んでくる。予想だにしない人物の乱入に、マリューは目を白黒させる。

「そんなことどうでも良い!! 今すぐアラスカから撤退だ!!」

「え!」

ムウはかなり焦った様に指示を出す。マリューらもこの言葉には驚きを隠せない。

「これはトんだ作戦だぜ! 守備軍は一体どんな命令受けてるんだ!? 良いか!? 良く聞けよ

!? 本部の地下に、サイクロプスが仕掛けられていた! 起動すれば基地から半径10km以内は溶鉱炉に変化する規模の代物がな!」

「サイクロプスと言えば、エンデュミオン・クレーター防衛戦で使われたって言う噂のアレか!？」

ムウがまくし立てるように自分が実際に見てきた内容を知らせる。サイクロプスの名をバルトフェルドから噂程度でだが聞いたことのあるスバルも機体を操りながら会話に参加する。

「この戦力では防衛は不可能だ! パナマからの救援は間に合わない! やがて守備軍は全滅! ゲートは突破され、本部は施設の破棄を兼ねてサイクロプスを作動させる! それでザフト軍の地上戦力の大半を消滅させる! それが、とつくに離脱したお偉いさん方の描いた、この防衛戦のシナリオだ! 俺はこの目で見てきたんだ、もぬけの殻となった司令本部をな!」

「.....!!」

「残って戦ってるのは、ユーラシア連邦の部隊と、アークエンジェルの様にあつちの都合で切り捨てられたヤツらばかりだ!」

「ッ……!!」

ムウの言葉にブリッジが静まりかえる。怒りの感情を滅多に露わにしないマリユでさえ、歯を食いしばって堪えている。

「俺達は此処で死ぬと!? そういう事ですか!」

「撤退したことをヤツらに悟られないように奮戦しながら、な」

普段は冷静な操舵を行うノイマンですらこの時ばかりは怒鳴る。それに対してムウは怒りを抑えながら妥協案を話す。

「戦争だから。私達軍人だから。……だからそうやって死なないといけないんですか……?」

「そんなわけ、あるはずないじゃないですか! ですよねスバル!」

ミリアリアが涙を浮かべながら茫然自失と問いかける。するとそこに、スバルのオーブ軍服を羽織ったニコルが入ってくる。啞然とするアークエンジェルクルー。

「そうだな。俺達は、使い捨ての機械ではない! 自らの意志で、武器を持つ覚悟を決めた人間な筈だ! そうだろう!? マリユ・ラミアス艦長!」

「ええ! 敵をおびき寄せるのが作戦であるなら、本艦はその任を果たしたと判断します

！これは、アークエンジェル艦長、マリュー・ラミアスの独断とします！」

ブリッジ真正面から来る無数のミサイルと敵モビルスーツを、ブリッジ前に割り込んだランスロットが、両手のビームライフルとキャットウズ、両腕のグレネードランチャー搭載型防盾、試作型フライトユニット“ハヤブサ”のウエポンラッチに搭載されている75mmアサルトガンポッド”ツララ”の連射で粉碎したスバルが、確認するよう問いかける。

マリューはそれに頷くと、シートから立ち上がり、自分に言い聞かせるように宣言する。

「本艦は現戦域を放棄、離脱します！僚艦に打電！我に続け！。準備が出来次第、機関全速！湾部の左翼を突破します！」

「見ているだけ、と言うのは僕も本意ではありません。手伝わせてください。……僕だって、死にたくはありませんから」

「あなた……。分かりました。緊急時ですので、私の権限で許可します」

マリューが意を決し、矢継ぎ早に指示を出す。ニコルの手伝いの申し出に、マリュー

は一瞬だけ唾然とするが、直ぐに頭を切り替えて許可を出す。

「諦めるなよ？俺も出る。忘れた？俺は”不可能を可能にする”男なんだぜ？とはいえこの戦力差だしな、ランスロットに一度補給させてくれ！彼の助けもあれば離脱できる可能が増す！」

「脱出した面々の救助を！ランスロット、及びスカイグラスパー1号機の発進スタンバイが完了次第、現戦域を離脱する！」

「マードック軍曹！アサルトシユラウドの準備、及び機体に武器と弾薬を無理矢理でも良いから積んでくれ。フライトユニットをぶつ壊す勢いで振り回せば可能な筈だ」

ランスロットが一度補給の為に帰還する。こうしてアークエンジェルはアラスカ防衛戦、最後の決勝に打って出る事になる。

+++++

「メインゲート、突破されました！」

「ゲートはくれてやる！だからこっちは見逃しちやくれねーかねえ！」

”不沈艦アークエンジェル”だからな！手柄が欲しいんだろ!?!”

ついに複数のゾノの一斉攻撃でメインゲートハッチが破壊される。既にアークエン

ジェルは湾部左翼に向けて僚艦と共に離脱を開始していたが、それを阻むようにザフト軍のモビルスーツが行く手を遮り、ボスゴロフ級潜水母艦が封鎖する。

敵モビルスーツに向けて武器弾薬を満載したランスロットAS（アサルトシユラウド）が突撃し、それによって生じた隙にスカイグラスパー1号機が砲撃を叩き込む。

「ボスゴロフ級、ミサイル斉射！ 来ますよ！」

「回避！ 僚艦のカバーも！」

オペレーターを手伝うニコルの警告。マリユールが指示を出す前にノイマンが舵を切り、ミサイルをアークエンジェルに残っているイーゲルシユテルンと、戻ってきたランスロットASの75mmアサルトガンポッド“ツララ”が粉碎する。

「イザーク……。くつ、後方よりデュエル！」

「こんな時に!! スカイグラスパーはそのまま攪乱を頼む！ 俺が担当する！」

レーダーに映った機影にニコルがいち早く気がつき、警告する。それにランスロットASが反応、スカイグラスパーに前方を任せてデュエルに向かう。機首を返す置き土産と言わんばかりにランチャーストライカーを装備したスカイグラスパーがアグニを放って離脱してゆく。



「なめるな！バスターとは違うんだよ！・・・警告!?あれはまさか!!」

「まさかお前も参加していたとはな・・・イザーク・ジュール!」

アグニを回避し、アークエンジェルとスカイグラスパーを狙うイザーク。しかし下方からのアラートに反応し、ランスロットASが放つグウルを狙ったシヴァの一撃を回避する。

「ルーリック、小破!ロロ、主砲及びミサイルランチャー大破!」

「10時の方向よりモバイルスーツ群!」

「エンジンブロック被弾!推力に影響あり!」

「右舷ミサイルランチャー被弾!ヘルダート隔壁閉鎖!」

「フラガ機、ストライカーに被弾!パージを確認!」

「ランスロット、右肩シールドバインダー、及び左脚部追加装甲、左腕部シールドのパージを確認!さらに11時からモバイルスーツ群!」

猛攻を受け徐々にアークエンジェルが傾いてゆく。戦闘を行う二機も、徐々に被害が出て行く。

そしてついにランスロット、スカイグラスパーのカバー、アークエンジェルの対空砲

火を抜けたジンがアークエンジェルのブリッジに重突撃機銃を向ける。

「誰だ!? 誰が今撃った!」

「上空より不明機! なんだからこれ……速い!」

しかし、次の瞬間ジンのライフルが爆発する。ムウの疑問に、レーダーを見ていたニコルが驚きながら答える。

「こちらキラ・ヤマト。支援します! 今の内に退艦を!」

「キラ……?」

「嘘……」

「キラ……君……?」

ジンの頭部と腕部を排除したモビルスーツから聞こえてくるM I A認定された筈の人物の声、それにアークエンジェルの皆が啞然とする。

「なんて火力とパワーだ……新型か!? だが、どこで……!」

「くっそ! 何だよあれは!」

キラの瞳から虹彩が消え、次の瞬間、謎のモビルスーツの全武装が一斉に、連続で火

を噴く。その馬鹿げた火力に、スバルもイザークを牽制しつつも啞然とする。イザークも回避行動を取りながら、その理不尽な火力に文句を言う。

+++++

マリューに退艦を促したキラだったが、彼女から告げられた事実には、眉を顰める。

そして意を決したように彼はオーブンチャンネルでその事を両軍に告げる。それに対してザフト軍の機体がオーブンチャンネルで反論すると、彼の機体“フリーダム”がビームライフルとビームサーベル、そしてシールドをザフトのモビルスーツの前で近寄ってきたスバルのランスロットASに手渡して離れるように告げ、皆を啞然とさせる。

「ナメた真似を!!」

「コンの……バツカ野郎が!!」

その行動に怒り狂ったイザークが機体をフリーダムに向かわせる。スバルはキラの意図を理解し、意図を組む。キラの思いを無視しようとしたイザークに苛立つと、次の瞬間、彼の両目からも虹彩が消える。

「イザーク!死にたいのか!」

「何を!？」

フリーダムに攻撃する直前に離れていたランスロットASが追いつく。振り向きざまにデュエルASから放たれたシヴァを紙一重で回避したスバルがデュエルの両腕をランスロットASに押さえ込ませる。

「敵の言葉なんぞに!!」

「コンの……大バカ野郎が……!」

シヴァが放たれ、それを急降下して回避するランスロットAS。振り下ろされたビームサーベルを鋭角な動きで回避したスバルのランスロットASが、ビームサーベルを風ぎ払う。

「ッ……!？」

「それで言い訳が立つだろう!退け!」

思わず目を瞑るイザーク。しかし、ランスロットASのビームサーベルも、フリーダムが先程他の機体に行っていた様にデュエルの戦闘能力だけを奪う。グウルと脚部、シヴァの砲身だけが斬り飛ばされ、落下した所をカバーに入った武装を失ったデインに回収される、という結果に、イザークは啞然とする。

+++++

キラの行動を信じたのか、Z A F T地上軍も撤退を開始する。そしてその中、それは起動した。

「サイクロプス、起動を確認！」

「機関全速！ 回避！」

サイクロプスの起動をアークエンジェルで察知。マリユ一の号令で、アークエンジェルは残るスラストを後先考えずに全力噴射、動けない船をも引つ張りつつアラスカから離れる。フリーダムとランスロットA Sも助けられそうなザフト軍機の手を掴み、離脱する。

こうしてアラスカ基地は壊滅するのであった。

+++++

「キラ、そつちのパイロットは？」

「辛うじて生きてた。そつちは？」

「同じく。今はニコルに手当てさせてるよ。そつちのパイロットも任せておこう。我々と共に脱出した人々は既に動きだしてるしな」

壊滅したアラスカから離れた無人島。そこにアークエンジェルと共に脱出した面々、

逃げ遅れた少数のザフト軍兵士も集まっていた。

既に（すぐに移動するとはいえ）簡易のキャンプが築かれ、軍・種族関係なく、炊き出しと手当てが始まっており、二人はそれを見て、お互いに笑みを浮かべる。そこにマリュー達がやってくる。

+++++

「つまり、あの機体、フリーダムは核動力だっていうのか？」

「はい。データをお取りしたのであれば僕はここを離れます。奪おうとする勢力がいるのなら、敵対してでも守ります。それが、この機体を託された僕の責任です」

スバルから離れ、マリュー達と情報交換を行うキラ。その驚きの内容に絶句するアークエンジェルクルー達。しかしキラ眼差しは真っ直ぐであり、マリューはその言葉に偽りがないと理解し、その意思を尊重、クルー達に徹底させるように告げる。

+++++

「変わったな、少年」

「少年って……。スバル、アナタと年はさほど変わらないと思いますよ？」

「ん？ああ、そうだったな。……あいつは俺達と違って、ヘリオポリス……お前

たちクルーゼ隊が強襲した結果、崩壊したあのコロニーで偶然、ストライクに乗ったそう  
うだ。どこかフラフラしていると、最後に会ったときは思ってたんだ。少しは芯が出来始  
めたかな？」

「そう……だったんですか……」

キラがマリユーらと情報を交換しているのを少し離れた位置から見ているスバルが  
呟く。それをニコルは軽くたしなめるが、彼から伝えられた内容に少し考え込む。

+++++

そしてアークエンジェルの艦長たるマリユーにキラはこれからを問う。パナマに向  
かう案は真つ先に否決され、悩むアークエンジェルクルー達。原隊復帰は不可能。罪状  
はどう足掻いても増える。スバルの提案で彼らは脱出した人々（彼等の大多数はオーブ  
への亡命を希望）と共に、中立国であるオーブへ向かうことにする。自力走行ができな  
い護衛艦も居たため、緊急措置としてアークエンジェルが牽引することになるのだっ  
た。

## P H A S E — 1 5

+++++

C. E. 71 5月15日、地球軍本部アラスカ基地から脱出に成功したアークエンジェルは、亡命を希望する同じくアラスカから脱出した地球軍の残存艦隊と共にオーブに向かい、帰還を果たしたスバル・クロガネが行政府に自らの命を懸けて交渉。その結果、オーブ行政府は、様々な条件をアークエンジェル、亡命希望者に課すことと引き換えに受け入れを行うことにする。

命を懸けて交渉したスバル・クロガネも、彼らの手伝いや、情報の整理などを行うことを表向きの条件に軍籍剥奪される事はなかった。

(これは彼の持つ才能や実力を失うことを恐れたカガリやエリカ・シモンズが直訴した為でもある)

+++++

C. E. 71 5月25日

オーブ領 オノゴロ島 モルゲンレーテ社ドック



## アークエンジェル、食堂

「全く……。お前の連れてきた大量の亡命希望者と、逃亡艦になったアークエンジェル……あの時はかなり大忙しだったんだぞ？分かつているのか？んん？」

「ええ、いや、まあ……その……」

オノゴロ島、モルゲンレーテ社のドックにて現在、修理や補給等を行っているアークエンジェルの食堂で数人の男女が会話をしていた……と、言うよりは一人の少女が、目の前に（やり方教えて強制的に）正座させた青年に一方的に話しかけている、と言うのが正しいのかもしれないが。

「ねえ、ミリアリアさん。あの人が本当に、オーブ代表首長国の前代表首長のウズミ・ナラ・アスハ様の娘なの？ちよつと予想と違うとか何というか……。あの時はスバルに出会い頭早々、ラリアット当てた挙げ句、後で覚悟しろって告げて去って行きましたし……」

「言いたいことは分かるけど、本物。それよりも、アイツに生きてるって教えなくて良かったの？」

「ええ。彼が気付くまで黙ってようかと思えます」

「（それからこの二人！聞こえてるぞ！」

正座させたスバルに腕を組みながら見下ろしていたカガリが、振り向きながら近くで小声で話していた二人を指差す。指されたニコルとミリアリアの二人が首を竦める。

「……現在の情勢はどのような事に？」

「露骨に話題を逸らそうと……まあいいか。現状分かっているのは二つだ。まずはアラスカ本部壊滅に関してだな。これはZ A F Tが新型の大型破壊兵器を使用した事によって壊滅した、と言うのが大西洋連邦の公式発表だ。とはいえ、ユーラシアとアジア共和国は不快の意を示している」

「でしようね。……茶番にも程がある。本部長層部は全員、脱出していたのでしようし」

スバルの質問に、カガリはやや呆れ気味に答える。その内容にスバルだけでなく、真実を知るミリアリアとニコルも不快そうな表情になる。

「もう一つはパナマ基地に関してだ。どうやらZ A F Tはこの基地を攻略しようとする戦力を集めているらしい。これはZ A F T地上軍の数が減ってしまい、プラント本国の安全を確保するのが目的らしい。地球軍も噂では新型MSを開発、量産しているらしいな」

「ついに地球軍もMSを開発した、か……」

「ああ。お前が見聞きしたアラスカでの報告を受け、現在行政府では連日話し合いが続いている。私が今日、来たのもその関係だ」

カガリが告げたもう一つの情報。それにスバルは顎に手を当てて考え込む。そんな彼にカガリは持つてきていたファイルを差し出す。

「これは……」

「お前がアラスカに向かう間にエリカに渡したデータを元に調整をしたM1アストレイのカタログスペックだ。現在はあくまで先行量産型、と言う位置づけだが……縦性、整備性、どれをとっても高水準に纏めることができた。若干、量産性は落ちてしまったが、パイロットの生存性もある程度高くはなったからな。調整に付き合ってくれた傭兵も、このM1には太鼓判を押しそうだ。よって先行量産した機体による最終調整等が終わり次第、M1の量産はこの仕様で行くことが決定された」

「そうですか……」

ファイルを確認するスバルに笑みを向けるカガリ。その様子を見て意外そうにミリアリアが問いかける。

「スバルさんってそこまでハイスペックだったの？」

「ボクもスバルにそんな才があっただなんて初めて知りましたよ」

「あー……まあ、バルトフェルド隊に配属される前、色々あったからな」

「ミリアリアやニコルの質問に、言葉を濁すスバル。その時、食堂に三人の少女達が入ってくる」

「カガリ様！……あ、スバル三佐も！」

「パナマ基地が壊滅したって速報が！」

「マストドライブ施設、ポルタ・パナマ」もZAF T軍の新型兵器で破壊されたとの知らせが入りました」

入ってきたのはM1アストレイのテストパイロットだった少女「アサギ・コードウエル」、”マユラ・ラバツツ”、”ジュリ・ウー・ニエン”の三名であった。三名からもたらされた情報に、カガリもスバルも目を見開く。

「……カガリ様、一度行政府へ。地球軍の動きが気になります。私は一介の軍人に過ぎませんが……」

「皆まで言わなくても分かっている。お父様に進言して動向を探って貰うさ」

「お願いします。アサギ、マユラ、ジュリ。お前たちは訓練を続けておけ」

「あ、はい！」

「分かりました！」

スバルがアサギ達に指示を出し、カガリに進言する。カガリも、彼の言いたいことは理解できるため、頷くと即座に行動を開始する。

オーブはスバルがアラスカで見聞きした地球軍上層部の態度等や、”ポルタ・パナマ崩壊後の連合軍の動きを注視すべき”とのカガリの進言もあり、連合軍（と、言うよりは大西洋連邦）の動向に注視する事になるのであった。

+++++

C. E. 71 6月1日、地球連合軍は中立を保つ国々へメディアを通じて”ワン・アース”アピールを行う。しかし水面下で行われたのは、恐喝紛いの連合への加入要求であった。

+++++

C. E. 71 6月13日、ワンアースアピール前に地球連合軍首脳会議にてユーラシアやアジア共和国の反対があったにも関わらず、大西洋連邦の艦隊がオーブに向けて南下を開始する。更にオーブに対してアスハ代表の即時解任、行政府の即時解散、武装放棄、モルゲンレーテ社の情報開示等が通達される。回答には48時間の猶予を与え

る、とだけ通達される。

+++++

C. E. 71 6月14日

オノゴロ島ドック内

「ところでオーブの決定はどうなつたのですか？」

「戦闘は避けられぬモノとして既に市街地や軍関係施設近辺から避難勧告が出されている。アークエンジェルは回答期限の明日〇九〇〇より行われるであろう戦闘に参加するそうだ。俺も出る事になるだろう……。俺は、オーブ軍の三佐だからな。だが、ニコル、今ならまだ間に合うからお前はアークエンジェルを降りてオーブ政府の指示に従って退避しろ」

「ッ……！」

ニコルの疑問に、スバルが答える。そして告げられた内容に彼は思わず立ち上がる。そんなニコルに彼は鋭い視線を向ける。

「お前はアークエンジェルのクルーでもなければ、オーブの軍人でもない一般人なんだ！アラスカでは人手不足等で手伝ったのかもしれないが、これ以上お前を巻き込むわけ

にはいかない！」

「スバル……」

カラーコンタクトを外した彼はニコルの肩を掴み、目を見据えて告げる。初めて見た彼の本当の瞳と、真剣な眼差しにニコルは言葉を失う。

「既に知っているだろうが、ディアツカのヤツも解放された。ニコル、会いたければ会え。プラントに行きたいなら行け。プラントへのパスポートは用意してお前のカバンに入れておいた。……ピアノを引いているそうだな。……まあ、アスランに教えてもらったんだが、それを聞いて確信した。優しいお前には、軍で拳銃やモビルスーツのスロットを掴むより、ピアノの方が似合う。それにお前には家族だっているだろうか？」

「スバル……。僕が女の子なら、君に惚れてたかもしれないですね。今の、どう聞いても口説いているようにしか聞こえませんでしたよ？」

「あ……。すまん、俺はそんなつもりは……。！」

「良いんです。君の気持ちは分かっていますから」

「確信した。お前、やっぱり天然のタラシだ。お前の周囲に女の影が見えないのが不思議なくらいだ」

スバルとニコルの会話を聞いて用事があつたらしく駆け寄ってきたカガリが呆れ混じりに呟く。その言い分に、ニコルは思わず苦笑いを浮かべる。

「……分かりました。僕は、オーブ政府の指示に従い、避難します。スバル、無事、生き延びてください。そして終戦を迎えたらまた、連絡をくださいね」

スバルの手を掴み、ニコルは寂しさを隠すように告げる。彼が領いた事を見ると、ニコルは食堂を後にする。

「そういえばスバル。お前がエリカに依頼していた機体、完成したそうだぞ？なんか没案になった方も完成させたみたいだけど。1号機はハンガーに搬入したそうだが、2号機はまだ調整が終わってないからバスターと同じ場所に置いてあるってさ」

「最悪、バスター共々破壊……か。何番ハンガーですか？破壊するならせめて私の手で破壊したいので」

「Dの13番ハンガーだ。カグヤの近くだな」

食堂を去る間際、ニコルの耳にはそんな言葉が届くのであつた。



## P H A S E — 1 6

+++++

C. E. 71 6月15日 05:00

オーブ国防総省

「ウズミ様、地球軍との交渉は……」

「完全に無視されている。が、ギリギリまで交渉は続けるつもりだ。また、そなたからカガリを通じて進言があったオノゴロの住民の避難は、既に八割を完了しておる」

地球軍からの刻限まで残り僅かとなったオーブ。その国防総省に呼び出されたスバルは、ウズミから現状を説明される。

「この緊急時に際し、オーブ政府は戦時特例としてスバル・クロガネ三佐を一佐へ昇進させ、本防衛戦の総指揮を任せたいと思っている」

「……やはり”戦神の眼”が原因、ですか」

「うむ。申し訳ないが、あのシステムを100%理解しているのが現状、考案者である君しか居ないという結論が出てしまつてな。無論、防衛総省のオペレーターを総動員してサポートを行うつもりだ」

ウズミから告げられた内容に、やや驚きながらもその理由を予測していたスバルが肩を落とす。ウズミも申し訳ないと感じているのか、スバルの両肩に手を乗せる。

「まあ、システムの調整や補助AIの構成、オペレーターの訓練が間に合わなかった時点で覚悟は決めていましたから、気になさらないでください。……とはいえ、私が総指揮、ですか……」

「幸い、作戦説明まで僅かながら時間があるだろう。少し外の空気を吸ってきたまえ」

スバルもある程度は予想していたとはいえ、この大一番でのプレッシャーに、少し手が震えている。それを見てウズミは、彼に外の空気を吸うようすすめる。頷き、外に出て行くスバルを見送ったウズミは、国防総省に居る軍人達をブリーフィングルームに集めるよう、指示を出すのだった。

+++++

国防総省から出たスバルは、壁に背を預けると空を見上げ、気持ちを落ち着かせようと試みていた。

「あ、スバル三佐」

「……珍しいな、いつもの二人は一緒じゃないのか」

空を見上げていたスバルに声をかけたのは、MIAストレイのテストパイロットの一人“マユラ・ラバッツ”だった。

「ちよつと、緊張しちゃつて……。気分転換に散歩してたんです。アサギもジュリも、それぞれ気分転換中です。私たちはあくまでもテストパイロットでしたし……」  
「中立を掲げる今のオーブで、本当の意味で実戦経験があるのは、俺やカガリ様、後はアークエンジェルだけか……」

マユラの表情を見たスバルは、国防総省そばに設置されているベンチに彼女を誘い、話しを聞いていた。普段は明るい彼女だったが、極度の緊張からか明るさは身を潜めており、不安そうな表情を見せている。スバルはマユラの言葉からオーブの状況を理解し、考え込む

「(期限まであと、約三時間……。作戦は大丈夫の筈だが、問題は人の方か)」

「三佐、本当に大丈夫なんですか？ 私達、死なないですよね？」

「少なくともこの作戦で俺は、戦死者の少なくなるような作戦を考えたりもりだ。後は、作戦に参加するパイロットがちゃんと作戦を理解し、仲間と連携して行動できるか、これにかかっていると考えている」

マユラの不安そうな瞳をスバルは正面から見つめ返す。彼の瞳を見たマユラは、彼も不安なのだど理解する。故に彼は自身の決意などを語る。マユラはそんなスバルの瞳を驚いたように見つめる。

”だから信じてくれ”とだけマユラに伝えたスバルは、彼女の頭を優しく撫でると、意味ありげに近くの柱に目を一瞬向けると防衛本部に入つてゆく。

「後は仲間と、か……」

「マユラ、頑張ろ？」

「アサギ、ジュリ……」

スバルが防衛本部に入つてゆくの見送つたマユラ。そんな彼女の方に、近くの柱に隠れていた友人”アサギ・コードウエル”と”ジュリ・ウー・ニエン”が歩み寄る。まさか二人が居るとは思わなかつたマユラだったが、友人達と目を合わせると誰からでもなく笑みがこぼれる。

「絶対、生き抜こうね」

「うん」

「勿論よ」

上を見上げ、決意を固める三人。そしてしばらく空を見上げていた三人は、防衛本部で行われる作戦説明を聞くため、中に入つてゆくのだつた。



同日 06:30

オーブ防衛本部のブリーフィングルームに集まったオーブ士官らに、ウズミは自ら、スバルを紹介した。

当初は困惑していたオーブ士官達だったが、彼がこの数週間訓練を重ねてきたシュミレーター内容を考案し、今回の防衛戦に投入される”M1アストレイ”の武装構成やOSの設定に携わっていた人物だと分かると、誰もが彼を認めるような眼差しになる。そしてそれを見たウズミは、スバルに作戦概要の説明を任せるため、場所を譲るのだった。

「……先ほどウズミ様からあったように、本作戦、”オーブ防衛戦”をもってオーブ軍一佐に任命される事になった、スバル・クロガネだ。正直、まだこの通り若い身の上、亡命者である自分には重すぎる役割だと思っっている。だが、ウズミ様から期待された以上、責任をもってこの任を拝命した」

オーブ士官達の前で穏やかな、それでいて緊張感のある表情で語るスバル。オーブ士官達も、スバルの言葉に少々のざわめきはあれど、彼の決意を固めた眼差しを見て、彼を信用してみようと考える。

「状況の再確認を行う。現場、オーブオノゴロに向けて大西洋連邦の大部隊が侵攻中、これは周知の事実だろう。実を言えば、様々な事を想定し、私はカガリ様を通じてウズミ様に様々な事を進言してきた。M1の性能強化やシュミレーターの構成などはその一環だ」

スバルの言葉に、何名かの将兵が若い彼が見せた先見の明に驚きの表情になる。

「本防衛戦は非常に困難なモノになるだろう。とはいえ、物量差は策を張り巡らせればある程度はカバーできる。が、あくまで持論ではあるが、最終的にモノを言うのは現場の私を含める兵士の技量や連携等、一人一人の”力”も重要だと考えている。何故、Z A F T軍が量で勝る地球軍と渡り合えるのか？それはZ A F T軍のパイロットの技量や”力”が量の不利を補っていたからだ」

スバルの話しを聞き、将兵の眼に活力が満ちてゆく。それを見たスバルは小さく笑みを浮かべる。

「地球軍はようやくM Sを開発、配備し始めたところだ。Z A F T軍程洗練されたエースが数多く居るはずはないはず。ならば、我々にもまだ、チャンスはあると考えている。幸い、M Iが私の提案した仕様となつて配備されている事に地球軍は気づいている様子はない。故に本防衛戦はそれを活かす為に5つのフェーズで構成する」

スバルは自身の分析や持論で将兵達の意識が防衛戦を成功させられると希望を抱いたと考え、ようやく作戦の説明を始める。

「既に作戦の第1、第2フェーズは開始、完了しているが、全て説明する。第1フェーズ。これは国民の避難等になる。戦火が遠のき次第、戻ってくる予定だ。次に第2フェーズ。これは潜水艦隊による機雷敷設になる。国民を真っ先に避難させたのは防衛戦に

よる流れ弾で非戦闘員の死傷者を出さないためだ」

「機雷敷設の理由は？」

「地球軍も、ZAF T軍で運用されている大気圏内の単独飛行が可能な量産型MSの開発に着手したらしいが、大量に配備したとは聞いていない。ならば島国のオーブに攻め込むためにとれる手段は二つ。空挺か、揚陸艇による強襲だ。空挺も行われるだろうが、確実性を見るなら揚陸艇に比重を置くだろうと見ている。本来なら機雷敷設はしたくないが、本防衛戦はオーブの理念を守るための作戦でもある。故にこの手段をとらざるを得なかった」

スバルの説明に、将兵の一人から質問が出る。ある程度予測していた質問だったため、淀みなく答える。その内容に、納得ができたのか質問した将兵は小さく頷き、席に座る。

「そしてここからが本番になる。フェーズ3ではM1の武装パターン”遠雷（えんらい）”と”水守（みななみ）”、そして早期警戒と先制攻撃の両用機として試作され支援戦闘機”隼（はやぶさ）”が鍵を握る。まず、水守と隼、アークエンジェル、ストライクは別働隊として、既に行動を開始している」

スバルの言葉にざわめくオーブ将兵。スバルがモニターを操作すると、画面が切り替わる。

「アークエンジェルを中心とした別働隊の狙いは敵の空挺を担う輸送機と後詰めである予備兵力、補給物資への奇襲だ。隼は輸送機を、水守は敵の輸送艦に一撃を加えて離脱。これにプレッシャーを与える」

モニターには敵の予測進路が表示されており、これを見て将兵は納得ができたのか頷く。

「続いて遠雷。これの役割もまた、敵輸送艦の撃破になる。本作戦は、敵を水上で撃破する事を目標にしているが、戦場では何が起きるかはわからない。故に各部隊は連絡を密に取り合い、何時でも行動が出来るよう、留意して欲しい。別働隊の奇襲と防衛戦をフェーズ3とする。何か質問は？」

「戦線の維持ができなくなった場合は？」

「敵の目的はマストドライバー施設、カグヤ」とモルゲンレーテ社の工廠であると言うのは自明の理。上陸され、なおかつ戦線が維持できないと防衛本部が判断した場合、「カグヤ」に集結、マストドライバーで宇宙へ離脱した後「カグヤ」とモルゲンレーテの工廠を爆破する。これはオーブ政府の決定、で良いのですよね？ウズミ様。「カグヤ」撤退、離脱をフェーズ4、地球軍が目標としている「カグヤ」並びにモルゲンレーテ工廠爆破をフェーズ5とする」

「うむ。オーブも、世界も奴らの好きにするわけにはいかぬ。特に連中が我らがオーブ



に攻めいる理由はプラントとの決戦のために地球から宇宙へ物資を送るため。そのためにマストドライバーを欲しているのだ」

スバルが作戦概要を聞き、表情が引き締まるオーブ将兵達。ウズミの言葉が、この防衛戦の重要性を現している。

「ではウズミ様、そろそろ配置につきます。完了次第、地球軍……と、言うよりは大西洋連邦に、ですか？最後の会谈要請をお願いします」

「ああ。戦わずに越したことはない。だが、戦つてでも守らねばならぬモノもある。戦いになった場合、諸君の健闘に期待する」

時計を見たスバルの言葉に、ウズミが真剣な顔で頷く。オーブ将兵達も、ウズミの言葉に敬礼をすると、ブリーフィングルームを出て行くのだった。

## PHASE 17

+++++

C. E. 71 6月15日 09:30 オープ近海

オーブからの再三に渡る会談要請を無視した地球軍は、ブルーコスモス盟主“ムルタ・アズラエル”の一声と共にオーブのマストライバー施設“カグヤ”とモルゲンレーテ社の工廠を確保するために侵攻を開始する。

しかし、侵攻開始から30分も経過しない内に飛び込んできた報告に、旗艦に詰めていたアズラエルと指揮官は揃って顔を青くする。

「なん…….…….だと…….?」

「誤報…….…….ではないのか…….?」

「誤報ではありません!空挺部隊及び補給部隊、壊滅との報告です!」

信じられない、という表情の指揮官とアズラエルに、若干顔の青い士官が繰り返し報告を行う。さらに追い討ちを掛けるように前線から報告が届く。

「こちら第2揚陸船団!オーブに近寄れません!う…….…….うわああ!総員退艦!。退避!!退避いい!!」

「こちら第3打撃艦隊！敵の砲撃激しく被害甚大！後退の許可を！」

「な・・・何が起きてるんですか・・・!!誰か説明してくださいよ！」

「情報が錯綜しています。一時撤退し、正確な情報を集めるべきかと」

もたらされた情報にヒステリック気味にアズラエルが頭を抱える。指揮官もまずは情報が必要だと判断しアズラエルに進言、彼が頷くのを確認すると即座に撤退の指示を出すのだった。

+++++

スモークを散布しつつ後退してゆく地球軍。その報告を受け、オーブ防衛本部にてウズミは小さく息を吐き出していた。地球軍の戦術は数の利を活かした波状攻撃。僅か30分足らずの攻防だったとはいえ、その圧力は聞いていた以上の恐ろしさだと、防衛本部にいたウズミは感じていた。

「敵の第一波は退けた。大至急補給と整備を行わせよ。またパイロット達には交代で休息をとるように徹底させるのだ。地球軍の動きには細心の注意をするように」

「はっ。アークエンジェル率いる別動隊も補給の為に帰還した模様です」

「そちらの補給等も手早く済ませよ。地球軍の連中がこの程度で諦めるとは到底思えぬ」

ウズミの指示に、防衛本部の士官達は頷き、指示を出して行く。

「お父様、地球軍からの回答は……」

「相も変わらず、未だに独立の道を行くオーブこそ、我々地球連合とプラントとの戦火を長引かせる元、だそうさ。奴ら、相当焦っているみたいだな」

不安そうなカガリからの問いに、ウズミはやや呆れ気味に答える。さらに数人のオペレーターがウズミに報告に現れる。

「お父様、スバルから、ですか？」

「うむ。ストライク含むGAT計画を発展させた機体が投入される可能性をあげてきた。アラスカでアークエンジェルからストライクの稼働データは渡った筈だから、投入される可能性はあるだろう、とな」

「あいつ、ドコまで予測してるんだろうな」

ウズミの言葉に、上を見上げるカガリ。ウズミは現在、スバル・クロガネという一人に頼りすぎている現状を何とかしないとイケない、と決意を固める。

+++++

同日 14:30

一時撤退し、情報を集めた地球軍（というよりは大西洋連邦）の旗艦ではブルーコスモス盟主“ムルタ・アズラエル”がイライラしたようにオーブ近辺の地図を睨み付けていた。

Z A F Tの量産MSに対抗できるMSを開発し、大量配備も完了した。MSを用いた得意の物量作戦ならばオーブも容易く落とせるとたかを括っていたのだが、ふたを開けてみれば上陸前に壊滅的被害を受け、補給線にも攻撃を受けてしまった。

「部隊の再編成は完了しました。しかしあの防衛ラインをどうにかしなくては、先の二の舞ですぞ?」

「分かっていますよそんな事! 大体、貴方達がもつとあの国の情報を集めていればこんな屈辱、味わうことなんかなかったんですよ!」

報告に現れた士官に、苛立たしげに反論するアズラエル。頭を抱えながら考え込んでいた彼だったが、突如顔を上げる。

「補給や整備が完了次第、つぎの戦闘には“アレ”を投入しましょう」

「確か時間制限があるのでは?」

「構いませんよ。あの防衛ラインに風穴を開けさえすれば後は、数で押し潰せる。そうでしょう? それとも、他に策がありますか?」

どこか狂気染みた笑みと共にアズラエルが提案する。その提案に、指揮官は懸念を述べるが、アズラエルの反論に半ば諦めがちに頷く。

「さあ、フォビドゥン、カラミティ、レイダー発進スタンバイです。補給が完了次第、今回で決めてしまいませんか? ボクもいい加減、地面のある場所で食事がとりたいです

しねえ」

「補給が完了次第、第一戦闘配備。カラミティ、フオビドゥン、レイダー発進後、鶴翼の陣で艦隊を展開。穴が空けばそこに楔を打つ！」

アズラエルと指揮官が指示を発令する。ここに第二次オーブ攻防戦の火蓋が切られるのだった。

+++++

後に”オーブ攻防戦”と呼ばれる事になったこの戦闘は、防衛戦の教本になるとまで言われるほどオーブ側の防衛方法は強固なものだった。逆に攻撃を仕掛けた側が引くタイミングを読み違えた事や従来通りの攻めかたしかなかった事などから、大西洋連邦最大の失策とまで呼ばれる戦闘となるのだった。

+++++

オーブ国防本部

「大西洋連邦側の動きはどうか」

「大攻勢を行うためか、予備戦力の合流を待つようです。アークエンジェル隊の行った嫌がらせ”の為、時間は稼げているようですが」

国防本部の一室に主だった人員が集まり、現状の再確認を行う。机の上に広げられた地図の上には無数のメモ書きが貼り付けられ、今もなお連絡要員が報告と共に張り付け

ていく。

「やはり国力の差で押し負けてしまうか」

「はっ。保つてあと一回かと。隊員達の体力、気力も最早限界です」

顎に手を当て、ウズミが唸る。リニアガンタンク隊を指揮していた士官が感情を押し殺しながら報告する。

「やむを得まい。これよりフェーズ4に移行する！避難がまだ完了していない国民達もカグヤに集めよ。我らはこれよりオーブより脱出する！」

「………はっ。」

握りしめた拳から血を流しつつウズミが指示を出す。各部隊の指揮官達も、唇を噛み締めつつ応じ、作業に取りかかる。こうして、大西洋連邦側の思惑に反し、オーブは素早く行動を開始するのだった。

+++++

大西洋連邦の攻勢は、アークエンジェル率いる別動隊が行った妨害行為により、本来の予定より大幅に遅れて実行に移された（当初の予定では、同日中に行う予定だったが、妨害行為により合流が遅れに遅れた）。この時オーブ側は既に戦力の八割をマスドライパー施設「カグヤ」に結集させ、脱出準備の八割を完了させており、地球に残留する潜水艦部隊や海上打撃部隊は既に中立国である、スカンジナビア王国に身を寄せるために

オーブを離脱していたのだった。

作戦を立案したスバルは、アサギ・コードウエル、マユラ・ラバツツ、ジュリ・ウー・ニエン、キラ・ヤマト、ムウ・ラ・フラガ達と共に殿（しんがり）として待ち受ける構えを取る。こうしてオーブ攻防戦は、最終段階を迎えることになるのだった。



## PHASE-18

+++++

C.E. 71 6月16日 13:30 オープ最終防衛ライン

オープ政府からの会談申請を無視した大西洋連邦は、秘密裏に開発していた、ストライクを始めとしたGATシリーズの後継機を先行して投入、最重要目標のモルゲンレーテとマストライバー施設「カグヤ」の制圧を目論む。

オープ側も、時間を稼ぐ必要があるため、少数精鋭部隊を迎撃のために展開、迎え撃つ。スバル・クロガネが搭乗する試製一号機、キラ・ヤマトが託されたフリーダム、ムウ・ラ・フラガが受け継いだストライクを前衛に配置し、後衛として離れた位置にアサギ・コードウエル、ジュリ・ウー・ニエン、マユラ・ラバツツの三人がM1アストレイで狙撃支援を行う体勢を整えていた。

「やはり、先行してきたか……」

「読みが大当りだな。やっぱり連中にとって、ここで戦力を消費するのは本意じゃねえって事か」

「初戦で大打撃を被ったみたいですからね」

先行する新型をレーダーで捉えたスバルが小さく眩く。ムウもやや呆れながらも同意し、キラもまた、建物の陰に機体を隠しておく。

「接近中の機影を確認。敵は三機、砲撃機らしき機体は飛行型が運搬してますね。それをカバーするように盾持ちらしき機体が飛行してます」

「なら狙いは砲撃機だ。アサギ、ジユリ、マユラはタイミングを合わせて砲撃機を狙撃。チャンスを見逃すなよ？キラ、ムウさんは俺と共に残り二機を抑えつつ砲撃機の注意を引き付ける」

「了解です」

「あいよ」

「うん」

ジユリからの報告を受け、手早く作戦を伝えるスバル。各々の返事を聞きつつ、スバルの試製一号機の左手が保持する350mmレールバズーカ“ゲイボルグ”から弾頭が電磁加速により撃ち出される。

「ちいー！」

「何、敵？」

「敵なら滅殺！」

突然の攻撃に、新型に“搭載”されている生体CPUたるオルガ・サブナックは自機

のカラミティの右肩にゲイボルグを受けバランスを崩し、フォビドゥンを駆るシャニ・アンドラスは獲物を見据えたのか小さく笑みを浮かべ、レイダーを駆るクロト・ブエルは上に乗っているカラミティを埠頭に落としつつ頭部100mmエネルギー砲”ツォーン”を試製一号機にぶっぱなす。

「食いついた！キラは二枚盾を頼む！ムウさんはキラと俺のカバーを頼む！」

「あいよ！」

「任せて！」

ツォーンを回避しつつ右手の高エネルギービームライフルでレイダーに牽制を行い、砲撃を行うおうとしていたカラミティにも牽制としてゲイボルグを再度放つ。キラもフリーダムを操り、フォビドゥンにルプスビームライフルを放ちつつ空中戦に移行する。僚機のカバーに入るべく移動を開始したムウのストライクは、従来のストライカーパックではなくM1アストレイの便宜上は隊長機仕様とされている砲撃戦パック”遠雷”を装備していた。これはランチャーストライカーの対応性にムウが不安を抱いたため、ある程度の近接能力も確保してある”遠雷”を暫定的に装備していたのである。

+++++

「無視しやがって、滅殺！」

「仲間が居てもお構いなしか。キラ、ムウさん、注意を」

「お前！お前！お前えええ！」

「滅茶苦茶だなこりゃ」

クロトのレイダーがMA形態から変形し、右手の破碎球<sup>①</sup>「ミヨルニル」を投げつける。スバルの試製一号機がミヨルニルの破碎球の部分にゲイボルグを叩き込んで、勢いを殺しつつ、右肩に装備しているシールドを斜めに構えて弾いた結果、偶然とはいえないキラのフリーダムが連射するルプスピームライフルとムウのストライクが放つビームライフルを悠々と特殊兵装<sup>②</sup>「ゲシマイデイツヒ・パンツァー」で逸らしていたシャニのフォビドゥンに不意打ち気味に直撃する。すると頭に血が上ったシャニがキラのフリーダム、ムウのストライクと共にクロトのレイダー、オルガのカラミティを捲き込みかねない軌道で誘導プラズマ砲<sup>③</sup>「フレスベルグ」を連発する。これには流石のムウも呆れてしまう。

「シャニてめえ！」

「マユラー！ジュリ！」

オルガも味方からの砲撃には流石に頭に血が上ったのか、執拗に狙っていたはずの試製一号機から目を離し、フォビドゥンに背面の125mm二連装高エネルギー長射程ビーム砲<sup>④</sup>「シユラーク」と胸部の580mm複列位相エネルギー砲<sup>⑤</sup>「スキュラ」、115mm二連装衝角砲<sup>⑥</sup>「ケーファー・ツヴァイ」を一斉射する。その隙をスバルから前

もって指示を受け、ひたすら待ち続けていたアサギが見逃す筈もなく、マユラ、ジユリのM1と合わせて71式甲式型ビームスナイパーライフルを発射、シャニのフォビドゥンに気をとられていたオルガは避ける間もなく、コクピットを撃ち抜かれるのであった。

+++++

大西洋連邦オーブ攻略部隊旗艦にて戦線の行方を見守っていたアズラエル達であったが、CICからの報告に、啞然とする。

「もう一度、報告を」

「はっ。GAT-X131”カラミティ”のシグナルがロスト。GAT-X252”フォビドゥン”ならびにGAT-X370”レイダー”もエネルギーが限界です」

旗艦の艦長も、頭を押さえながら黙りこんでしまう。アズラエルも、予想の範疇外なこの結果に、両手で頭を抱え込む。

「また、モルゲンレーテに密かに潜入させた特殊部隊からも連絡が途絶えています。ついで先程、モルゲンレーテ本社で小規模の爆発があったことも、確認されております。」

「ああいつらあ……!」

「こちらの目論見を悉く潰すつもりでしような」

「失礼します! 上空に所属不明の機体が! 更にオーブ側に不明機1! 他にもGAT-X

「103”バスター”を確認！」

「あ”あ”あ”あ！”

「アズラエル理事?! いかん。鎮静剤持つてこい! フォビドウン、レイダーに撤退信号! 全艦に通達! オーブ近海から離脱する！」

次々押し寄せる報告に、ついにアズラエルの中から”ナニカ”が切れる。慌てた旗艦の艦長が、発狂したアズラエルの両腕を押しさえ込みながら矢継ぎ早に指示を出す。

啞然としていた将兵達だったが、旗艦の脇に砲撃が着弾した為、大慌てで行動を開始する。旗艦から撤退信号が打ち上げられ、全艦が慌てて回頭を行い、スモークを打ち上げる。

「”フォビドウン”ならびに”レイダー” 帰還確認！」

「全艦最大船速！」

右腕を失っているフォビドウンと、左脚部を失っているレイダーが帰投したのを確認。こうして大西洋連邦の部隊はあっという間にオーブから離れて行くのだった。

## P H A S E — 1 9

+++++

大西洋連邦の艦隊がスモークを展開しつつ急速に後退してゆく。元からデータ等の鹵穫とサルベージを防ぐため、重要データの回収とダミーへの切り替え、さらにはモルゲンレーテ本社内にはマスドライバ―施設 カグヤ” から起爆操作が可能な爆薬の設置をオーブ政府は完了させていた事に、大西洋連邦の指揮官たちは気づくことはなかった。

更にオーブ国防本部は大西洋連邦が撤退した報を受け、とある決断を下す。オーブ攻防戦は大西洋連邦の迷惑を裏切るように最終段階に移行することになる。

+++++

C. E. 71 6月17日 オーブマスドライバ―施設” カグヤ”

「爆薬の設置、ならびにタイマーの設定は完了しました。また、モルゲンレーテ本社の基盤にも仕掛けてきたので、データのサルベージも防げると思われます」

「クサナギの発進シークエンスは最終段階。アークエンジェルも準備完了です」

カグヤの管制室にて軍服に着替えたスバルと、カガリの護衛役のキサカがウズミにそ

れぞれ報告する。ウズミも暫く目を閉じていたが、意を決したのか、決意を固めた声で指示を発する。

「現時刻をもつて我らはオーブを離脱する！この連綿と続く戦いの連鎖を断ち切るため、我等は行動に移す！」

「はっ！」

ウズミの号令に将兵が応え、行動を開始する。

+++++

オーブの主力艦「イズモ級」の追加ブースターを取り付けたアークエンジェルがマストライバー施設「カグヤ」によって加速され、宇宙に飛び出して行く。再びオーブを攻めようと陣形を整えていた大西洋連邦の考えを裏切るように、イズモ級の艦橋部分と船首カタパルトパーツなどが打ち上げられてゆく。

唾然とする大西洋連邦の指揮官達だったが、オーブのモルゲンレーテ本社から爆発を観測したとの報告が入ったことで、我に帰る。しかし、そんな彼らを嘲笑うかのようにマストライバー施設「カグヤ」が崩壊してゆく。こうして大西洋連邦の狙いは何一つ叶うことなく、ただいたずらに戦力を消費するだけで終わるのだった。

+++++

地球軌道上に三隻の特徴的な戦艦が寄り添うように停止している。



一隻は白亜の戦艦。Z A F T側からはその見た目から“足つき”とあだ名された元地球連合・大西洋連邦所属の特装艦“アークエンジェル”。Z A F Tが行った作戦“オペレーション・スピットブレイク”の際に味方であるはずの連合軍に捨て駒にされたことから軍に疑問を抱き離反した艦である。

残りの二艦は同系統の戦艦である。オーブ軍の宇宙戦艦であるイズモ級二番艦“クサナギ”と三番艦“アマテラス”であり、アマテラスには大西洋連邦との戦闘から逃れ、脱出した多数の人々も乗り込んでいる。

そんな三隻の内、アークエンジェルの一室にて会議が行われていた。クサナギに搭乗している前代表のウズミも、通信により参加している。

「さて、なんとか脱出しましたが、これからどうするか、ですね」

「ひとまずオーブの宇宙ステーション“アメノミハシラ”に向かいたい。サハク家には色々と言われるであろうが、民の事を優先したい」

アークエンジェル艦長のマリユー・ラミアスが疲れがにじんだ声音で話を切り出す。そんなマリユーに返したのは前代表のウズミだった。

「しかしお父様、サハク家を信用しても良いのでしょうか。彼らは大西洋連邦と関係が強いと見られています。向かったが最後、オーブのためと銘打って売り渡されるのでは？」

「その危険はあるだろう。だが、大西洋連邦と関わっていると考えられるからこそ、彼らは頼りになる可能性がある」

訳あつてアークエンジェルに乗り込んでいるカガリが懸念を述べる。だが、ウズミはだからこそ頼りになる可能性があると告げる。

「大西洋連邦に近いのはオーブを守るためだった、と考えれば、サハク家は大西洋連邦に裏切られたようなもの。交渉の余地はあると思います」

「確かに。ならば、ひとまずアメノミハシラに向かいますよう。」

スバルが考えを述べる。マリューも納得できたのか、ウズミが頷いているのを確認すると、行動を開始するのだった

+++++

C. E. 71 6 / 27

地球の衛星軌道からやや外れた位置に存在するオーブの軍事用宇宙ステーション”アメノミハシラ”にアークエンジェル、クサナギ、アマテラスの三隻が入港する。

「意外にすんなりと入港許可が出ましたね」

「確かに。もつと混乱するかと思っていたぜ」

アークエンジェルのブリッジで、艦長のマリューが拍子抜け、と言う感じに息を吐き出す。ムウも肩の力を抜くと辺りを見回す。

「オーブ本土の方は真つ先に脱出していた下位院から選出された人達が降伏したらしいし、どうなるんでしょうね」

「分かりません。ですが、サハク家は軍事の家系であり、当主の方は優れた政治家だつて噂を聞いたことがあります」

指定されたドックにアークエンジェルが固定されたことで、肩の力を抜けたノイマンが疲れたようにぼやく。とある人物の監視を任されたキラが通信越しに自分の知るところを話す。そこにクサナギのウズミから、一度アミノミハシラの会議室に集まつてほしい。と連絡が入る。マリューらは顔を見合わせるとカガリに先導され、会議室に向かうのだった。

+++++

アミノミハシラ会議室

「久しいな、ウズミ」

「お互い様、だろう、ミナ・サハク」

会議室でウズミやマリュー達を出迎えたのは、感情が稀薄な護衛を背後に立たせたアミノミハシラ指導者“ ロンド・ミナ・サハク ”であった。しかしマリュー達はミナ・サハクが妙に憔悴しているように見え、思わず顔を見合わせる。

「しかしミナ・サハクよ、やけに憔悴しているように見えるがどうした？ 私としては嫌味

のひとつでも言われると思っていたのだが」

「なに、我々姉弟がやってきた事は全て無駄だった、と気づかされてな。まさか大西洋の無能共に利用されていた事に気づけなかった、それにシヨックを受けていたのだ」

やや疑問を浮かべるウズミを見ながら軽く笑みを浮かべるミナ。そこでウズミは彼女の弟「ロンド・ギナ・サハク」の姿が見えないことに気付く。

「ところで、弟はどうした？」

「オーブ本土に大西洋連邦が攻めてきた、との報を受けた5日前にアメノミハシラを出ていった。少し、これからの事で意見を違えてな」

ウズミの問いに、少し寂しそうな表情を見せるミナ。そこに格納庫でアークエンジェルやクサナギから回収したデータを纏めていたスバルがやってくる。

「失礼します。頼まれていたデータの方が纏まりましたので、報告を。また、その他作業も一先ずは完了しました」

「うむ。……しかし随分時間がかかったようだが？」

「シモンズ主任から頼まれていたデータも纏めていましたので」

テーブルの上に数枚のディスクを取り出すスバル。ウズミも彼に頼りすぎている現状に頭を抱えつつも、ミナにスバルを紹介することにする。

「ミナ・サハク、改めて紹介しておく。彼がオーブ防衛を指揮したスバル・クロガネ一佐

だ。モルゲンレーテに籍をおく技術者でもある」

「そうか、彼が……」

「スバル・クロガネ一佐であります。まだ若輩の身ではありませんが、一佐を拜命しております」

ウズミから紹介されたスバルが言葉を紡ぐ。ミナもスバルを見て何かを考え込む。

「ウズミ。彼がアストレイの改修案を出した技術者だな？」

「そうだが、何かあるのか？」

「何、アメノミハシラに委託して来たパーツなどの確認を頼みたい。それとも一つ、我が弟の行方を捜して欲しいのだ。」

ミナからの申し出にウズミは少し考え込む。そんなウズミを見たミナは単刀直入に理由を話すことにする。

「我が弟は世界を統べるのはサハク家である、という初期の思想に意固地なまでに取り憑かれているのだ。……私もそうだったのだがな、あの大西洋連邦の侵攻時に貴様ら政府が真つ先に国民を中立国や対立していたはずの私達の元に脱出させたのを見て考えを改めたのだよ」

ミナの言葉に目を見開くウズミ。ミナもやや苦笑しつつもウズミに目を見やる。

「それならば私には反対する理由はない。だが、彼を指名する理由はなんだ？」

「彼が使用する試製一号機。アレの素体がプロトアストレイであるならば、必ずギナは破壊する為に動く。大事な局面で横槍を入れさせたくないならば早い段階でギナを排除するしかないのだ。……もう、ギナの精神は狂ってしまったているからな」

ウズミの問いに、どこか悲しげにミナは答える。

「試製一号機の宇宙での調整、ならびにアメノミハシラに委託していたシステムのチェックなどもしなくてはなりません。その際に探索などもできれば良いのではないのでしょうか。また、暫定的にニコルが起動してしまった試製二号機の件もあります」

「オーブに暫定的な亡命を希望していたニコル・アマルフィの件は私がプラント側に確認を済ませてある。プラント側では既に戦死扱いとなっているようだ」

スバルが手元の端末に、必要とするチェック項目を出力する。それを確認しながら、ミナ・サハクは現状知りうる情報を話すために手元に端末を引き寄せる。

「とりあえず、我が知りうる限りの情報をまずは開示しよう。その間に試製一号機の試験準備を済ませておくとしよう。プラント側の者共も連れてくるが良い。其奴らにとつても捨て置けぬ情報もいくつかあるのだな」

ミナ・サハクの言葉を受け、スバルが部屋を出て行くのだった

## PHASE—20

C. E 71 6/27 アメノミハシラ会議室

アサギ・コードウエル、マユラ・ラバツツ、ジュリ・ウー・ニエンの三人の手を借りたスバル・クロガネに促されるように、両手を拘束されたアスラン・ザラとディアッカ・エルスマン、ニコル・アマルフイらが会議室に入室する。

先の第二次オーブ防衛戦の折にディアツカはモルゲンレーテに回収されていたバスターを、ニコルは壊れたハンガー内にあつた試製二号機を駆り、オーブ側の支援を行っており、オーブ脱出時にはスバルの指示に従つて機体を素直にアークエンジェルに運び、機体から降りた際には機密保持の為に拘束こそされたが、捕虜と言うよりは手を貸した一般市民のような扱いで事情聴取を受けていた。

その際、ニコルはオーブへの亡命と移民を希望、ディアツカも、今次大戦が終わるまではオーブへの亡命を希望しており、それらの処理を待つ身であつた。

一方で、第二次オーブ防衛戦の折にフリーダム破壊という使命があると宣言し、戦場に乱入。何故かその割にはキラの操るフリーダムを援護をするという奇行をしたアスランは、オーブを脱出する際にスバルからの秘匿通信を受けたキラに誘導され、アーク

エンジェル格納庫内で待ち構えていたアサギらのM1アストレイに機体を取り押さえられた挙句、スバルにコクピットから引きずり降ろされて今の今までキラ監視の元、部屋に拘束と軟禁をされていたのだった。

「さて、まずはニコル・アマルフィの亡命と移民に関してだが、我がオーブ連合首長国はこれを快諾することにした。ある程度の調整は必要ではあるが、これよりオーブ国民として扱う事とする。次に一時的な亡命を希望するディアツカ・エルスマンの方も、我がオーブは問題が無いことをここに告げておく。それを前提に貴君らのこれからの希望を聞いておこうか」

ミナ・サハクに書類を手渡したウズミが小さく頷く。ニコルとディアツカは一度視線を合わせると、お互いに頷く。

「ボクは、スバルの手助けがしたい、その一心であの時動いていました。ディアツカに聞いた限り、プラントでボクは戦死扱いとされている可能性が高いので、スバル同様名前を変えてオーブ軍に入隊できれば、と思います」

「私はその時はただただ避難民を助けたい、という一心でバスターに乗りました。それに、プラント側のタカ派であるザラ派寄りの父を持つので、多少なりはこの戦争に責任があると思っています。ですので、この戦争を終わらせる手伝いをさせてください」

ニコルとディアツカが自分の希望を述べる。それを聞いていたアスランは、自分のあ



まりの不甲斐なさに俯くしかできずにいる。そんな三人を見て、ミナ・サハクは自分が集めた情報を開示して行くことを決めるのだった。

「貴公らの希望は理解した。我らオーブもこの戦いの終結に向けて動くつもりであるため、その力を貸して欲しい。さて、現段階で我らが集めた情報だが、プラント議会はタカ派たるパトリック・ザラが舵を切っているわけだが、その裏では穩健派の人物らを次々と幽閉に追い込んでおる。穩健派の中心たるシーゲル・クラインとその娘のラク・ス・クラインに関しては射殺命令まで出ているらしい。穩健派の人物らはあちらこちらに潜伏しているらしいな」

ミナ・サハクの言葉に目を見開くアスラン。キラもまた、自分が世話になった人物らの事ということもあり、緊張した表情となる。

「とはいえ、タカ派たるザラ派内部でも色々と問題が発生しているらしい。集めた情報が正しいのならば、パトリック・ザラは本気でナチュラルの殲滅を目論んでいるらしく、ザラ派寄りであったタッド・エルスマンや同じタカ派であるエザリア・ジュール、ニュートロンジャーマーキャンセラーの開発に寄与したユーリ・アマルフィ等同じザラ派であるはずの人物らとの対立が深刻化し、結果としてその三人をも幽閉したようだ。今や彼はプラントの独裁者と化しているらしく、改めて情報統制を敷かれたせいで現在は詳しい情報は不明となっておる」

ミナの情報にディアツカやニコルの表情が強張る。アスランは父の暴走とも呼べる暴挙に、目を伏せるしかない。

「一方の連合側だが、やはり大西洋連邦が中心となつて決戦の準備をしているらしい。『ピースメーカー』なる暗号が出ている以外は不明なのだが、つい先日にはアルテミスの傘で戦闘があつたとの情報があつた位か。恐らくはお得意の物量戦で挑むつもりなのだろうな」

「サハク様。プラント側で奇妙な動きの報が入りました。ヴェサリウスに不自然な補給がなされているとの事です。また、クライン派が何やら動きを見せるらしく、情報統制に揺らぎが出ています」

連合側の情報を述べるミナ。そこにアメノミハシラに所属するソキウスの一人「シックス・ソキウス」が端末を片手に報告に訪れる。

「気になるようだからその小僧に機体を搭載可能なシャトルをくれてやれ。ついでの戦神の眼の試験も兼ねてイズモも出す。クルーゼ隊のヴェサリウスがこの時期に、というのは不自然である。少しばかり探りを入れるべきだな」

「スバル一佐はイズモと共に試製一号機の試験、ならびにクルーゼ隊の動向の調査を行つてくれ。また、略式ではあるが、ニコル・アマルフィのオーブ軍入隊を許可し、階級は三佐とする。さらにニコル三佐を試製二号機のテストパイロットに任命する。新

たな名前に関してはしばらく待つて欲しい」

「了解です。アサギ、マユラ、ジュリも来てくれ」

「了解しました。．．．．．ありがとうございます、ウズミ様」

「クルーゼが動くなら俺も行こう。ラミアス艦長、済まないが．．．」

「皆まで言わなくても大丈夫ですわ。ウズミ様、アークエンジェルも同行します」

「イザークもいるだろうし、俺も行くぜ。アイツ、母親がどうなってるか知ってるのかねえ」

ミナの言葉に、目を白黒しているアスランを引きずるようにスバルがアサギ達と共に退出する。ニコルもまた、ウズミからの命を受け、少しばかり戸惑いつつも敬礼をしてからスバルの後を追う。

マリユもまた、キラの肩を掴んで先に退出したムウに苦笑しつつもウズミに笑みを浮かべて敬礼をすると、溜息をつくディアツカを促してから退出するのだった。

「我らオーブも、少しずつあり方を変える必要がありそうだな、ウズミ?」

「分かっている。中立の立場から世界に寄与できるような舵取りを目指したいものだ．．．」

スバルらが退出した会議室でミナ・サハクのどこか楽しそうな声音に、ウズミも小さくうなづくのであった。

## PHASE—21

++++

C・E・71 6/30 ヤキン・ドゥーエ宙域近郊

ヤキン・ドゥーエ宙域近郊のデブリ帯に二隻の戦艦が身を隠すように停泊している。一隻はその特徴的な外観から、Z A F T軍からは“足つき”と渾名された戦艦であり、オペレーションスピットブレイクの折には味方から捨て駒にされた為に連合軍に不審を抱き離反、オーブに身を寄せた白亜の戦艦“アークエンジェル”。もう一隻はオーブが運用する戦艦であり、そのネームシップたるイズモ級の一番艦“イズモ”。

その片割れたるイズモから、一隻の大型シャトルがプラントに向けて出発する。シャトルに乗り、操縦桿を握るのはZ A F T軍の服に身を包んだオーブ軍に在籍する青年“スバル・クロガネ”。その反対側に緊張した顔で座るのは父親に真意を問いただしたいと希望した青年“アスラン・ザラ”であった。

「すみません……こんな事に付き合わせてしまつて……」

「任務の事もあるし気にするな。だが、恐らくだがお前の言葉は聞き入れられはしないだろう。それでも行くのか？」

「はい。．．．俺は、あの人の息子ですから」

申し訳なきようなアスランにやや皮肉気味に笑みを浮かべるスバル。シャトルにはアスランのジャステイスが載せられており、対外的にはフリーダム追撃に関しての詳しい報告と破損したジャステイスの修理のため、という名目でプラントに向かつていた。その際、既に死人扱いのスバルは、メイクや詰め物で女性に変装しており、その変装を披露した際、ディアッカやニコルが思わず二度見するレベルの完璧さであった。

「あと、俺は任務の為に調査をするから別行動になる。最悪の場合は君を見捨てる事になるからな」

「分かりました。あと、向こうからの指示で、ジャステイスは新造艦の方に搭載することになりました。先んじて送った報告のおかげ、でしょうかね」

プラントからの指示に従いシャトルを移動させるスバル。その所作は内情を知るアスランからしても、女性にしか見えなかったが、変装した理由を問いたです前にシャトルは係留場所に到着する。

「ではザラ隊長。お疲れ様です。私は指示どおり、ジャステイスを新造艦の方に運びますので」

「あ、ああ。分かった」

ややハスキーな声でスバルに促されたアスランは、意識を切り替えて迎えに来たエレ

カに向かうのであった。

↑↑↑↑↑

アスランと別れたスバルはシャトルを指示通りにZ A F Tが新造した高速艦に移動させていた。新造艦の名は“エターナル”と命名されており、艦長は奇跡の生還を果たしアンドリユー・バルトフェルドが任命されている。

「こちらティアナ・ルージュ。ザラ隊長の機体を搬入します。エターナル、格納庫を開いてください」

「こちらエターナル艦長のバルトフェルドだ。了解した。指示ではシャトルをそのままエターナルに積みめば良いのだったかな？」

「はい。ザラ議長からはそう、指示されています。ジャステイスの修理もエターナル側で行うように、と」

エターナルに通信を入れ、バレないように慎重にバルトフェルドと通信を行うスバル。このスバルの変装時の“ティアナ・ルージュ”とは実際にZ A F Tに籍を置くオーブ側の作員の一人で、スバルと背丈や声質等がよく似ているため、作戦前に上手く入れ替わったのだった。変装時にティアナ本人からもお墨付きを貰ったため、バレていないと確信する。

「では、後はお願ひします、バルトフェルド艦長」

「了解だよ。部下を付けるから外まで案内してもらってくれ」

「はっ。感謝します」

エターナルの格納庫にシャトルを収め、通路に向かうスバル。そこで待っていたかつての副官「マーチン・ダコスタ」に案内されてエターナルの外に向かう。

「では任務ご苦労様でした。私はザラ隊長を迎えに行く必要がありますので、これで」「はっ」

用意されていた二台のエレカに分かれて乗り込むスバルとダコスタ。やがて完全にダコスタのエレカと離れたスバルはそこでようやく張っていた緊張を一度解き、深く息を吐き出すのだった。

＋＋＋

エレカとシャトルを乗り継ぎながらスバルが向かったのは、Z A F Tの兵器工廠があるマイウス市だった。作業員のティアナが持ち込んだ情報ではこのマイウス市にパトリック・ザラと意見を違えたザラ派の人物が軟禁されており、他にも穏健派が軟禁されているザラ派と接触を試みているとの情報もあつたため、オーブとしても和平へのきつかけを作るためにスバルが派遣される流れとなつたのだった。

「さて、情報だどこの辺りだったはずだが……」

エレカをゆつくりと操りながら、不自然にならない様に周囲を見回すスバル。作業員

のティアナが元々マイウス市の出身だということもあり、違和感なく移動ができていた。しかしこの時、オーブ側ですら知り得なかった速度度とある組織が既にマイウス市に軟禁されていた元ザラ派のユーリ・アマルフィとロミナ・アマルフィの両者を救出していた事をスバルが知る由もなかった。

「貴方もしかしてスバルさん……?」

「っ……!?!」

そんなスバルに一人の人物が控えめに声を掛ける。だが、スバルからしてみたら周囲からお墨付きをもらった変装を見破った挙句、プラント側からしたら既に死人になっている筈の自分を知る人に出会った、ということに他ならない。いざとなれば銃を突きつけるつもりでエレカを停止させたスバルが振り向けば、そこには一人の赤服を身に纏った少女が、やや信じられない、という表情で立っていた。

「えと、何か事情がありそうだし、私のオフィスに来ない?それまでは貴方をティアナとして扱うから……貴方もその方がいいでしょ?」

「……分かりました、シホさん」

引きつりそうな顔をなんとか抑え込むスバルのエレカに乗り込む赤服の少女、”シホ・ハーネンフース”。スバルはシホの案内のもと、彼女のオフィスに向かうのだった



## PHASE—22

†††††

マイウス市のとある兵器工廠の傍に、大型の建物が複数ある。そこはその工廠に籍を置く技術者や、研究者の住まいであった。その建物の中の一部屋に、二人の人物が向かい合っていた。

一人は赤服を身に纏う少女”シホ・ハーネンフース”。Z A F Tに所属する研究技術者である。もう一人はオーブに亡命し、現在は和平への道を探る為の任務でプラントに変装して来訪した男性”スバル・クロガネ”。現在は変装を解き、私服に着替えている。「それにしても久しぶりね、スバルさん。貴方を世界樹攻防が始まってすぐ、ハイライン局がわざわざナスカ級を使つてまで戦場から引き抜いて以来、かしら」

「そうだな。．．．ところで俺の変装を見破れた理由を教えてくださいませんか？一応、俺にも今の立場があるのは理解してくれていると思うんだが」

「え？そんなのただの勘よ？いわゆる”女の勘”つてやつ」

笑みを浮かべるシホに柔らかない笑みを浮かべていたスバルだったが、それでもまずは変装を見破られた理由を説明しておかないとならない、と思い、理由を聞いてみる。そ

れに対してシホはなんて事はない、と言わんばかりに答える。

「……嘘だろ」

「本だよ。MS操縦の師でもある貴方を、貴方の弟子たる私が見間違はずないじゃない。多分、バルトフェルド隊にいた頃、貴方の元で戦っていた“彼ら”でも、貴方に会えば気づいたんじゃないかしら。多分だけれど、バルトフェルド艦長らが気づかなかつたのは一種の先入観が原因だと思うわ。今の貴方は以前よりいい表情をするようになってるし」

嗚然とするスバルに、シホは少しばかり得意げに答える。頭を抱えるスバルだったが、腕時計が小さく振動を伝えてきた事を感じると、意識を切り替える。

「悪いが時間になってしまったらしい。できれば敵同士にはなりたくない、と言うのは俺が弱くなったのか……」

「いいえ?かつての貴方より、今の貴方の方が人間味があると私は思うわ。……後はそのうね、これも良いきつかけかな……?」

苦笑しながら立ち上がるスバルを見て、小さく笑みを浮かべて立ち上がると歩み寄るシホ。スバルが怪訝そうな表情を浮かべると、そこでシホはスバルの腕を掴み、問答無用で別の部屋に彼を引っ張り込む。

「って何してるんだ?お前はZ A F Tの軍人だろう!」

「今のプラントはザラ議長の独裁状態よ。そして彼は完全に私怨で軍を指揮している。少なくとも私は、彼の私兵に成り下がるつもりはないわ。だから、オーブに亡命したいの」

連れ込まれたのはシホの私室だったらしく、狼狽えるスバルに、ベッド下に隠してあったパネルに素早く番号を打ち込みながらはつきりと答えるシホ。再び啞然とするスバルの目の前で床がスライドし、明らかに不法に作ったとしか思えない通路が姿を現わす。

「機体は二機用意してあるの。一機は私の予備だけどね」

「……一度決めたら曲げないのは相変わらずか……。まあ、亡命は俺も話してみよう」

「ありがとう。……着いたわ」

通路を移動しながら隣に居るシホを見て、少しだけ笑みを浮かべるスバル。そんな二人の前に重厚な扉が姿を現わす。シホがそこにパスワードを打ち込み、網膜認識を行うと、扉が開いてゆく。

「ZAFTの新型か……。しかしコイツは確か、ゾノやラゴウと一緒にプロパガンダも込みで発表されていなかったか？ 配備がなかったから廃棄されたものだと思っただけだ」

「ええ、そうね。でもクルーゼ隊が連合のGを鹵獲した事を受け、この機体はマイウス・ミリタリー・インダストリーが中心となって再開発されたの。私を中心となって研究していたビーム兵器搭載型の機体稼働データと、鹵獲したGATシリーズのデータを統合して、ね。形式番号ZGMF-600、機体ネームはゲイツ。連合の機体が全機PS（フェイズシフト）装甲を搭載していると仮定して、ビーム兵器を標準装備に設定された、近接型の機体よ。私の機体は中距離仕様にカスタマイズしてあるけどね」

扉の向こうにあったのは、ZAFの量産機特有のモノアイとセンサーを備えた機体であった。シホはスバルに説明をしながら側にあつた部屋に入つて行く。

「ところで迎えなどは大丈夫なの？」

「近くのデブリ帯にイズモとアークエンジェルが隠密状態で伏せている。警戒している。ナスカ級の脚に多少の損害を与えちまえば逃げるのは容易いさ」

部屋の側に背を預けるスバルに扉越しにシホが問いかける。スバルの答えに納得したのか、ノーマルスーツに着替えたシホが、部屋から少々の私物を入れたカバンを肩にかけて出てくる。

「ノーマルスーツはどうするの？」

「時間が惜しいから構わない。行くぞ。……アスランは自力でなんとかしてもらおう。元々、付いてくると言い張つたのはアイツだし、いざとなれば置いていくとも伝え

てあるしな」

私服のままシホの予備機であるゲイツに乗り込むスバル。シホも気持ちを切り替えたのか、自身のゲイツに乗り込む。

「スバルさん、レーダーに感ありよ。この反応は……エターナル？」

「混乱しているなら好都合だ。これに乗じて離脱するぞ」

機体を立ち上げたシホがレーダーに映った情報に眉を寄せる。スバルも少し考え込むが、気持ちを切り替えて前を見据える。

「極力追撃部隊は撃破しないほうが足止めになる。ヤキン宙域まで行けば、ニコルが気づいてくれるだろうしな。……行くぞ」

「ええ。……また貴方と肩を並べられる事に感謝するわ」

シホが機体側から操作してハッチを開く。ハッチが開ききった瞬間、スバルが操るゲイツが先行し、シホも迷いなく続くのであった。

## P H A S E — 2 3

++++

プラントの最終防衛ラインであるヤキン・ドゥーエ宙域の最外縁部付近には、無数の人工デブリによってデブリ帯が形成されている。そのため、Z A F T 軍はそのデブリ帯を特に警戒しており、その為だけに偵察用のジンまで開発されているくらいである。

そんなデブリ帯の一角に、偽装を施された二隻の戦艦が静かに待機していた。その片割れ、元地球連合軍所属、現在は暫定的にだがオーブ軍に籍を置く強襲機動特装艦“アークエンジェル”のリーダーに反応が返ってくる。

「これは……艦長！ プラントで戦闘らしき反応を探知！」

「やや予定時刻より早いけれど、スバルさんかしら……？ 総員、第一戦闘配備！ とはいえ、まだプラント側に私達の情報を渡すわけにはいかないわ。展開中のモビルスーツ隊で対応を！」

C I C のミリアリアからの報告を受け、艦長のマリユーが矢継ぎ早に指示を出す。すると待機していたもう片方の艦“イズモ”から通信が入る。

「ラミアス艦長。今入った情報で、戦闘はZ A F T の新造艦“エターナル”が何者かに

よって奪取されたモノである、との事だ。確定ではないが、穩健派によるものではないか、と思われる」

「穩健派、となれば最有力候補はシーゲル・クライン氏かしら・・・」

「それと同時に、ZAFの新型二機がプラントのマイウス市から離脱したらしい。こちらはどちらかがスバル一佐だと思われる。アークエンジェルは敵のナスカ級に、バリアントとミサイルの照準を合わせておいてくれ。砲撃後は錯乱も兼ねて、ドレイク級型の時限式ダミーを展開して現宙域を離脱。調査と追撃部隊の錯乱も兼ねて、一度メンデルに向かいたい」

イズモの艦長代理を務めるレドニル・キサカからの要請に、マリューは了承の意を示す。

＋＋＋

同時刻、デブリ帯のあちこちに展開していたオーブ軍のモビルスーツ隊にも緊張が走る。指揮を執るのはオーブに亡命し、余計な詮索を避けるために三佐の階級を（半ば無理矢理）押し付けられたニコル・アマルフィ。プラントではすでに死人扱いであるため、ニコル・サルヴァーレの名前を現在では名乗っている。

「各機狙撃戦になります。また、未確認情報であったZAFの新型機のどちらかにスバルさんが乗っている可能性が極めて高いので、IFFに注意を。ディアツカは追撃の

準備をしているローラシア級のスラストアーを狙撃してください」

「了解だ。機動戦じやなけりや確実に当ててやるさ」

「ニコル三佐、離脱した二機がエターナルに合流。こちらに向かっているそうです」

「これは間違いなくスバルさんが誘導していますね。各機、タイミングを合わせてください。一斉射後にダガータイプのダミーと71式機雷を撒いて反転し、イズモに合流。現宙域から離脱します」

ニコルの指示に、やや緊張気味にディアツカが言葉を返す。ニコルの試製二号機の近くにいたアサギがイズモからもたらされた情報を伝える。ニコルはそれを聞いてからプランを決めると、各員に伝えるのだった。

＋＋＋＋

プラントの最終防衛ラインであるヤキン・ドゥーエ防衛本部は、蜂の巣を突いたかのように喧騒に満ちていた。エターナルが何者かに強奪されたとの報を受け、追撃部隊の編成を行っていた時に告げられたアスラン・ザラの離反。更には、パトリック・ザラから告げられたエターナルの轟沈許可とアスラン・ザラの殺害許可。唾然としていた防衛本部の兵士達だったが、そこに追い打ちをかけるかのように、シホ・ハーネンフースが新型機“ゲイツ”と共に離反の報。挙げ句の果てには、ネットワークに匿名で投稿された、シーゲル・クライン前議長とラクス・クライン殺害許可をパトリック・ザラ議長が



出していたという情報に、プラント市民が抗議デモを敢行。

結果的にZAF T軍は穩健派や潜入していたスバルの情報工作、更にはデブリ帯からの攻撃によりナスカ級やローラシア級のスラストターが中破したため、即座に動ける戦力の追撃が困難となる。またプラント側も抗議デモへの対応など、眼前の問題の対処に追われる事になるのであつた。

††††

C・E・71 7月5日

L4コロニー”メンデル”

そこはかつて”禁断の聖域”あるいは”遺伝子研究のメッカ”と呼ばれたコロニーであつた。しかしC・E・68に大規模なバイオハザードが発生。X線による消毒によりメンデルは無害となつたが、それ以前にもテロが発生していたなどの背景から、事実上の廃棄コロニーとなつている。

しかしながら内部はまだ無傷な部分も多く、水などの補給も可能であるため、ZAF Tを離反したエターナルを加えた3隻は、情報の交換やアミノミハシラを出発する直前に得た情報の調査も兼ねて、メンデルに身を隠していた。

††††

「こうして顔を合わせる機会があるとは思議なものだね。改めて名乗っておこう。ア

ンドリユー・バルトフェルドだ。」

「マリユー・ラミアスです。……こうして直接顔を合わせる機会があるとは、私も思っていますでしたわ」

メンデルの中でまだ機能が生きていた一室に集まった面々。最初に口火を切ったのは、エターナルの艦長となっていたバルトフェルドだった。隻眼となり、片腕を失つてなお、数々の幸運により生き延びていた知将は穏やかな笑みを浮かべてマリユーらに名乗る。

マリユーもまた、予想外の人物に驚きはしたものの、バルトフェルドと共にいた人物に目をやりつつ笑みを浮かべる。バルトフェルドの傍には、かつてアークエンジェルに保護をしたことがあるプラントの歌姫“ラクス・クライン”のみならず、右腕を吊った状態の元最高議長“シーゲル・クライン”も居たのだから。

「しかし意外といえれば意外ですね、クライン議員や元ザラ派の方までいるというのは。あなた方は、和平を目指している人々である、という認識でよろしいのでしょうか？」

「そう、捉えてもらって構わない。……私も、娘も、自分の立場や影響力を軽視していた事実を“彼ら”に突きつけられた。だからこそ、私はこの戦争を止めるつもりだ。……パトリックを止められる位置にいながら、理由はどうあれ感情に任せて戦争を始めた一人として、私は責任を負うつもりでいる」

マリユールの問いかけに、シーゲルは複雑そうな表情で告げる。

「ところで”彼ら”とは？あなた方クライン派の方、ではないような言い方だったが”彼ら”は後々紹介する。今は再会を喜ばせてやりたいからね。だからまずは情報の共有からいこう。この戦争を主導している人々、プラントはザラ議長の独裁状態というのは知っているだろうが、連合側の主導者は誰か、という所からかな」

クライン派との接触に備えてアメノミハシラから同行していたウズミからの問いに、バルトフェルドが数枚のデータディスクを取り出しながら真剣な表情で語り出す。

「我々クライン派や独自に動いていた”彼ら”の調査結果、連合側の主導者はブルースモスの盟主”ムルタ・アズラエル”という男とだと判明した。また、プラント側にアズラエルと内通しているヤツがいる、という所までは判明している」

「オペレーション・スピットブレイクの際、JOSH—Aへの攻撃目標の急な変更。これに参加予定のZAFB兵が全く知らなかった程の機密作戦だったのにも関わらず、サイクロプスがJOSH—Aに前もって仕掛けられていたことから、内通者はザラ派の中枢に近い人物であると思われる」

バルトフェルドが真剣な表情で情報を開示する。シーゲルも政治の中枢にいたからこそ判明している情報を明かす。

「また、核搭載機はフリーダム、ジャステイス以外に三機が開発されていると聞く。詳しく

内容は不明だが、一機は連合のガンバレルに酷似した武装を搭載する事が決まっているそうだ。核搭載機の雛形として開発された、ドレッドノートから発展した機体であると聞いている」

「また、未確認情報だが、大型の大量破壊兵器が開発されており、最終防衛ラインであるヤキン・ドゥーエ宙域に運び込まれているらしいが、それ以上は不明だ」

シーゲルも現状で判明している内容を話し、バルトフェルドもギリギリまで調査して判明した内容を話す。

「ガンバレルの系統となると使い手は限られると思うぜ？グリマルディ戦線のエンデュミオンクレーター攻防戦で投入された3個小隊15機。これが連合で運用されていたメビウスゼロの全機だったし、それも俺を除いて全滅してるしな。いくらコーディネーターといえど、ガンバレル系列に必要な高度な空間認識力はそう持つてるわけじゃねえ。てか、持っている奴が多いなら、俺のメビウスゼロに対応できる奴はもつと多かつたはずだしな」

「例のバックパックのテストの為に行われたシュミレーターでも、ガンバレルを使ったのはキラ君とスバルさんの二人だけ。同じくテストに参加したアスラン君やディアツカ君、ニコル君が使えなかったことから見ても、かなり稀少な才能によるものと言えるわね」

「機体操縦しながらXYZの三次元における座標軸の計算するわけだからねえ。コーデイネーターでもそれだけの演算能力を持つのは、ドレッドノートのテストパイロットだったコートニー位、そのコートニーはエターナルに乗り込んでるから除外。と、いうかコートニー以上の空間認識能力を持つ奴がいれば、ソイツにテストパイロットやらせらるだろうしなあ」

投入されるであろう機体の武装に思わずムウがボヤク。マリユもムウが乗る事になつているストライク用バックパックとしてスバルが提案した兵装のテストの際、そのテストに参加した面々の阿鼻叫喚の惨事を思い出して苦笑いする。バルトフェルドもZAFJ軍の内情を思い出して思わず眩く。

「とりあえずはメンデルの調査をしましょう。」グレムリン」と「ミーミル」の方は準備できたのかしら」

「あれは調整がとても難しいから、もう暫くかかるそうだ。最悪現地で調整しながら運用することになるかもしれない、とシモンズ主任から連絡が入った」

雑談に流れそうな空気をマリユが切り替える。しかしながら、メンデルの調査に必要な装置の調整が思いのほか進んでいないことを、連絡を受けたウズミが伝える。

「なら今のうちに」彼ら」について話してくれませんか？バルトフェルド艦長」

「まあ構わないよ。」彼ら」とは端的に言えばスバル君に関わりを持ち、なおかつ彼の

扱いに納得がいかなかった面々の集まりなんだ」

「まだ時間がかかると分かり、ならば、とばかりに謎になっていた面々の事を聞くマリュウ。バルトフェルドも時間を潰せる話題だから、とばかりに話すことにする。

「彼等は知ることになる。今はスバル・クログネと名乗る青年の抱える闇を。そしてそんな彼を慕い、助けようとしていた人物達の存在を。」

## PHASE—24

††††

C. E. 71 7月5日 コロニー メンデル

「まず、”彼ら”について話す前に理解してほしい事がある。大前提としてだが、我々コーディネーターの技術は完璧じゃない。そもそも、コーディネーターの技術の根幹は、生まれつきの潜在能力の底上げだとされている」

「以前、シモンズ主任もおっしゃっていましたが、生まれつきの潜在能力の底上げ、ですか?」

「そう。だからその潜在能力を伸ばす学習や環境がなければ、宝の持ち腐れになってしまう、というわけだね。見た目のコーディネートはあくまでも副産物なんだ」

かつては砂漠の虎と呼ばれた知将”アンドリュー・バルトフェルド”は重く語り始める。現在のコーディネーターの大半が間違つて認識している、コーディネート技術の大前提を。その内容に、以前聞いた内容を思い出しながら、元は連合軍に所属していた女性”マリユー・ラミアス”が聞き返す。以前エリカ・シモンズが言っていた内容通りならば、やはりナチュラルの持つコーディネーター像が間違っている事になる。

「第1世代コーディネーターと呼ばれる彼らが各分野で素晴らしい成績を上げたのも、その分野を伸ばすために適切な環境を整え、なおかつその分野の正しい教育を受けたからだ。我々コーディネーターの高い演算能力なども、その副産物だと言われている」

「ファーストコーディネーターであるジョージ・グレンも同じことが言える。彼はその輝かしい成績の裏では、血反吐を吐くような努力を続けて来たという資料がちゃんと残っていたよ。ナチュラル側に残っていないのは、恐らくは認めたくなかったからではないかな？ コーディネーターが努力する事でその才能を伸ばしていたなど、自分達と同じ”人間”だと認めるようなモノだからね」

驚くマリユードにプラントから持ち出した資料を手渡しながら元プラント最高評議会議長”シーゲル・クライン”がコーディネーターの真実を語り始める。バルトフェルドもまた、密かに調べていた内容が記されている資料を渡しながら話す。

「実際、今のプラントでこの内容を知るのは非常に少ない。これらの資料だって、遺伝子研究者、しかもDNA解析の第一人者とまで呼ばれるデュランダル博士が、こちらに合流する際に持ち出したものさ。元々博士はザラ議長の元で遺伝子研究をしていたんだけど、今のプラントの婚姻統制が原因で恋人と別れる事になってね……。その悔しさから遺伝子研究の更なる向上をザラ議長に求めたら、拒絶されたらしく、その足でウチに合流してくれたんだよ」



「彼はコーディネーターの真実を話して、ナチュラル、コーディネーターを問わずに優秀な人を集めて研究を進め、第三世代コーディネーターの出生率向上の為の研究や、コーディネート技術が発展する事を望んでいた。私も密かにソレを後押ししていたんだが、ナチュラルを憎んでるパトリックはそれを唾棄すべき内容だとしたらしい」

バルトフェルドやシーゲルの語る内容に、マリューらは自分達の持つコーディネーター技術へのイメージが大きく異なることを否が応でも理解していた。そして、自分達が一介の学生でしかないキラに、どれだけの負荷を負わせてしまっていたかを理解する。

「このメンデルは、デュランダル博士がかつて勤めていた場所でもある。彼と共に出来る限りの資料を回収して、次に繋げたい。協力してほしい」

「博士の話では、このメンデルには秘密の区画があるとのことだ。できればオーブで用意した“ミーミル”と“グレムリン”とやらはそちらに回したい。博士もその秘密区画の調査に同行してくれるそうだからね」

「クライン議員もバルトフェルド艦長も頭をあげてほしい。我々はそれに協力しようと思う。終戦後も考えれば、その要請はむしろ我々から頼みたい事だ。周辺も“グレゴリ”と“シエムハザ”で最大限の警戒にした方がよさそうだな。イズモとアストレイ隊、バスターはそちらに回しておく」

シーゲルが頭を下げて頼み込み、バルトフェルドもまた頭を下げる。ウズミは頭を下げているシーゲルに頭を上げさせると、笑みを浮かべて頷く。

「では、彼ら」はどういう集まりだ？ ザラ派やクライン派、穩健派とも違うように私は感じたのだが」

「彼ら」を詳しく語るとなると、本当に長くなってしまふから、詳細はメンデルの調査後にしてほしい。故に「彼ら」を一言で話すならば、「スバル・クロムハーツの元部下」という事集約する。我々プラント政府が、彼の出生が不明だからと、不当とまでいえる扱いをした事。そしてMIAではないかという内容がザラ分隊から報告されれば、碌に調べもせずに彼を死亡認定にした事を知り、不満が暴発した結果、プラントを見限った一派。いわゆる亡命組というべき面々だ」

「その大多数は元バルトフェルド隊に配属されていたメンバーであり、僕がスバル君の補佐にと彼を隊長にして組ませた、バクウの操縦と相性が悪かったメンバーだ。彼らと組んだスバル君の戦果を、僕がプラントに報告した結果、プラントは様々な理由をもつて彼から引き離して、」彼ら「はプラントで飼い殺しにされそうになったのさ。さらに、身もふたもない言い方をすれば、今のコーディネーター優越思想や婚姻統制に対しても、殺意とも呼べる感情すら抱いているよ」

ウズミから投げかけられた疑問に複雑そうな表情で答えるシーゲル。バルトフェル

ドも苦笑しながらその疑問に答えて行く。

「彼らはナチユラルやハーフコーディネーターに偏見などを持たないんだ。ナチユラルでもコーディネーターより優れた人もいると、戦場で理解してるからね。デュランダル博士にオーブへの亡命、ナチユラルとコーディネーターの差別が比較的少ないオーブで、コーディネーターの出生率問題の解決を図る事を勧めたのも彼らさ。多分、彼らこそ一番未来を見据えた考え方ができてるんじゃないかな？」

「その根底にあるのが、恩人であるスバル君だけが評価されないのが悔しい、てのが彼ららしい、といえばらしいんじゃないですか？隊長。調査の準備ができたみたいですよ」

バルトフェルドの語りには啞然とする面々。まさかただの兵士がそこまでの考えを持つて動いていたとは、誰も思いもしなかったのである。そんな中、バルトフェルドの副官「マーチン・ダコスタ」が苦笑しながらも報告に現れる。

「まだまだ語り足りないが、まずは眼前の問題から片付けていこうか。プラントからは快速のナスカ級が追撃として出て出ているはずだ。そして、その部隊は恐らくクルーゼ隊だろう。ヤツはザラ議長から重用されているしな」

「クルーゼ隊が来る可能性がわずかでもあるならば、作業を急がせましょう。連合側の動きにも注意した方が良いかしらね？」

バルトフェルドは苦笑しながら立ち上がる。マリューも、予想以上にスバルの経歴が

”濃い”事に苦笑しながらも立ち上がる。

彼らは知る事になる。彼”等”の生まれの真実、コーディネーターの抱える闇を。そしてとある男の持つ因縁と、その狂った願望を。そ

## PHASE—25

††††

C. E. 71 7月12日 コロニー”メンデル”

”禁断の聖地”あるいは”遺伝子研究のメツカ”とまで呼ばれ、ある時に発生したバ  
イオハザードが原因で廃棄されたコロニー”メンデル”

そこには終戦に向けて行動するオーブ軍と、クライン派が奪取した最新鋭艦”エター  
ナル”と共にプラントから離反した穏健派や亡命組が、顔合わせと終戦後に役立つ情報  
を求めて集まっていた。

終戦への為に同盟を結んだ彼らは、かつてメンデルに勤めており、プラントにおいて  
DNA解析の第一人者とまで呼ばれていた研究者であり、とある人物達に諭された結果  
オーブに亡命の決意を固めた”ギルバート・デュランダル”博士の力を借り、コーディ  
ネーター側の問題解決になりそうな情報を求めてメンデルの調査を進めていたのだっ  
た。

††††

メンデル内部 G. A. R. M. R & D社

「デュランダル博士、進歩はどうですか？」

「ああ、クロガネ一佐。私がかつて行なっていた研究も含め、八割のデータを回収できたよ。今残りの二割、ユーレン・ヒビキ博士が中心になって研究していた区画への、正規のアクセスコードを見つけた所だ」

コーディネーター産出を一大産業にしていた企業”G. A. R. M. R & D社。その朽ち始めた建物の傍に設置された仮設施設の内部で、作業をしていた宇宙服を着ている男性”ギルバート・デュランダル”に、オーブ軍のパイロットスーツを着ている青年”スバル・クロガネ”一佐が話しかける。

元々G. A. R. M. R & D社に勤めていただけあり、広大な施設から多数の情報を取捨選択して集めた彼は現在、それを系統別に精査しつつ残りの情報を得るためのコードを調査していたのだった。

「しかしモルゲンレーテが考案した”グレムリン”は素晴らしいな。これとサーバーである”ミーミル”がなければ、ここまで情報を素早く取捨選択しながら回収する事は不可能だっただろう」

「元々オーブはメンデルの調査を行う予定だったと聞いていたので、その為に必要な機能をアメノミハシラに送っておいただけです。そもそも”グレムリン”自体が、”戦神の眼”に必要なOSを組んでいた際に作り上げたシステムの、失敗作を転用した急造

品ですし」

「そうだったのか……。道理で軍で使われるコードが随所に見受けられる訳だ。……しかしオーブの方々は懐が深いな。ラウ……いや」彼らに諭されて袂を分かった身だから言い直そう。クルーゼと関わりがあつた私をも受け入れてくれたのだからね」

スバルの言葉に苦笑しながらデータを纏めるデュランダル。そんなデュランダルだったが、実はいざ調査を始めようとした時に、とある告白をしていたのであつた。

「フラガ三佐は驚いてましたけどね。……それでも貴方は過去ではなく、しっかりと未来を見据えることができています。だから”博士”はココにいる。違いますか？」

「……」。私はプラントにいた時、恋人と別れる原因である遺伝子に絶望していた。ザラ議長に提案が拒絶されたのもある。だが何よりも私が絶望していたのは、この遺伝子の問題の解決策が浮かばないのに、周囲から遺伝子研究の第一人者と呼ばれる私自身に、だった。一人絶望していた私はプラントでの立場に不満がありながらも、遺伝子研究の第一人者と呼ばれる立場にしがみつくように、矛盾を抱えながら生きていた。そんな時だよ、彼らに出会つたのは。ちょうど荒れていた時期だというものもあつて、不貞腐れたように話したら、聞いていた彼らの中の一人から殴られてね。”世の中に不満があるのなら、自分や視点、立場を変えればいい。それが嫌なら、耳と目を固く閉じて孤独

に暮らせばいい” 博士は自分の立場を失いたくないから、そうやって目を逸らして自分に言い訳をして不貞腐れているだけだ”と言われた。驚いたし、気付かされたよ、私が研究の本質から逃げてる事にね”

「コズミックイラ以前の世紀にあつた創作文学の言葉、ですね。言つたのは創作文学の研究をしていたミーシャ辺りかな”

苦笑しながらも、デュランダルは見つけたアクセスコードをノートパソコンに移していく。そんなデュランダルがポツリと呟く。それこそがクルーゼと友の関係があつたからこそ” 人の可能性” に諦めを抱いていたデュランダルの眼を覚ます言葉であつた。スバルはその言葉を聞くと、それを真つ先に言いそうな人物に心当たりがあつたのか、小さく笑みを浮かべる。

「彼から話を聞いて、私は遺伝子研究の新規性を示す立場であるはずの自分が、真つ先に諦めていた事に気付かされたよ。だからこそ、私はココに居る。・・・スバル一佐、最後の区画の調査だ。そこに、あの時は確信がなくて語れなかつた真実が眠っているはずだ”

「・・・俺やキラ、カガリの真実、か”

デュランダルは真剣な表情で、宇宙服のヘルメットを片手に振り返る。スバルもまた、覚悟を決めて頷くと、仮施設からパイロットヘルメットを被つて出るのだった。



十十十

休憩をしていたフリーダム専属パイロットの青年“キラ・ヤマト”と、オーブ連合首長国前代表の義娘だと判明した少女“カガリ・ユラ・アスハ”が連絡を受けて、パイロットスーツを着て合流する。

また、オーブが開発した試作型対電子用ハッキングシステム“グレムリン”の端子を、かねてよりオーブの作業員としてZ A F Tに潜入していたが、このたびオーブに帰還する事になった（プラント側から見たら離反した）少女“ティアナ・ルージュ”二尉が、パワードスーツの一種である“グテイ”に身を包んで運んでいる。

「この区画は、G・A・R・M・R & D社の責任者であるユーレン・ヒビキ博士が、最も資金をつぎ込んでいた区画だ。そして同時に同社の、同僚のごく一部しか関われなかった区画でもある。ヒビキ博士を含めて全員が死んでいる以上、何が眠っているかはわからないが、クルーゼから聞いた話が正しいならば、碌でもない研究である可能性が非常に高いね。だが、これまでの調査の中で、キラ君とカガリさんの名前が出てきたのは偶然じゃないはずだ。ウズミ前代表の持っていたあの写真からしても、ね」

「アル・ダ・フラガからの依頼でクローン研究を受けてまで得た資金をつぎ込んでいた区画か……ま、碌でもないのは間違いないだろうな」

「お父様の持っていた写真に写っていた私とキラ。そして私達が”きょうだい”である

事。・・・そしてキラの兄だと判明しているスバルの真実か」

「それが分からなくても、何かこれから繋がる情報があればいいんだけど・・・」

固く閉ざされた扉に備え付けられた装置にアクセスコードを打ちこむと、判明している事実を語るデュランダル。念のためにティアナがグティに持たせていた対重火器用のライオットシールドを構えて前に出ると、スバルが扉に張り付いて銃を構えてからボヤク。カガリもキラと共に、ティアナの構えたライオットシールドの陰から慎重に中を覗き込む。

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・」

「まだ生きている機器があるね。ヒビキ博士は当時の遺伝子工学の権威だった人物だから、必ず情報があるはずだ。ティアナ二尉、グレムリンの端末を持ってきてほしい。キラ君、手伝ってくれないか？」

開かれた扉の先にあつたのは無数の謎の機械だった。それを見て目を見開くキラとカガリだったが、手早くデュランダルは生きていた機器を見つけると、ティアナにグレムリンの端末を持つてくるよう指示を出す。キラもまた、デュランダルの手伝いをするために、ライオットシールドでカバーするティアナと共に彼に続く。

「このタマゴみたいな機械は一体なんだ・・・・・・・・。どれも壊れてるみたいだけど・・・・・・・・」  
 「なにかの生産プラント、に見えるが・・・・・・・・。少なくとも農業用ではないな」

カガリはスバルと共に、入り口の扉の左右から念の為に警戒しつつ中を覗くと素直な感想を述べる。スバルは人手がいると判断し、アークエンジェルに連絡を入れ、中を見て所感を述べる。

「ふむ……。ヒビキ博士はコーディネート技術の研究をさらに推し進めていたみたいだね。ただ、これは……！」

「そんな……！」

グレムリンを利用しながら吸い上げていた情報を見ていたデュランダルが、苦虫を噛み潰したような表情で呻く。キラもその情報を見てしまい、顔がみるみる青ざめてゆく。

「一佐、イズモより緊急です！現在ナスカ級2隻がこちらに接近中！さらに反対側より、連合のアガメムノン級とアークエンジェル級らしき反応も接近中。何もなければ会敵まで一時間半との事です」

「ちっ……。デュランダル博士、データの吸い出しの方は!?!」

「全て吸い出すとするならば一時間はかかる。ここの情報はこれからに必要なものばかりだ」

「なら、離脱する為の時間を稼ぎます。ティアナ二尉はこのまま博士の手伝いを。データの回収後は、即座にM1でデュランダル博士と共に戻ってきてくれ」

データを險しい表情で回収していたデュランダルだったが、ティアナのグティに警戒中のイズモから緊急の連絡が入る。その内容に舌打ちするスバルだったが、データの回収の手を緩めないデュランダルの表情から時間稼ぎをするべきだと判断すると、キラを促し、カガリの手を引いてドックに引き返すのだった。

## PHASE—26

† † † †

C. E. 71 7月12日 コロニー”メンデル”

”禁断の聖地”とも呼ばれていたコロニー”メンデル”にて、終戦後を見据えて情報収集を行っていたオーブやプラントからの離反亡命組、クライン派だったが、そのメンデルに連合軍が迫りつつある事にいち早く気付いていた。また、コロニー反対側からはプラントの快速艦であるナスカ級が迫っていた。

「現状は？」

「連合軍の方はアークエンジェルタイプが1、アガムムノン級が2。アガムムノン級の内一隻はユーラシアの所属です」

「ナスカ級に關しても解析が終わりました。予想通りクルーゼ隊の母艦”ヴェサリウス”を確認。また、残りの2隻も解析が完了。艦名はホイジンガー、ヘルダーリン。どちらもクルーゼ隊に新しく配備されたナスカ級です」

「クルーゼ隊はエターナルの追跡で来たのは分かるけれど、何故連合の部隊はこのメンデル来たのかしら。それに大西洋とユーラシアの關係は悪化していたはずよね？」

「恐らく、力関係では上である大西洋が圧力を掛けたんだろうさ。この宙域に来たのは何か理由があるはずだろうけどな、俺にはさっぱりだ」

オーブ軍のイズモ級一番艦“イズモ”のブリッジに、代表首長の義娘である少女“カガリ・ユラ・アスハ”と共にオーブ軍一佐“スバル・クロガネ”が入るなり問いかける。CICオペレーターが正面に宙域図を表示しながら答えるが、その内容を通信越しに聞いていたイズモの隣で出航準備をしていたアークエンジェル艦長の“マリユール・ラミアス”が疑問に思う。その疑問に対する考えを、アークエンジェルの待機所で準備をしていた“ムウ・ラ・フラガ”が肩をすくめながら吐き捨てるも、連合の部隊については予想もつかないとばかりにため息を吐く。

「まっすぐ来るなら到着はヴェサリウスの方が僅かに早い、か・・・」  
「とはいえ二面作戦は避けたいわね」

「ならば連合の部隊が来る方面に少数の71式機雷を散布、ダミーを複数展開。デブリを盾にした射撃戦で時間を稼ぐ方針を取ろう。幸いにしてあの宙域はデブリが多い。損害を抑えたい連合は二の足を踏むだろうし、試製二号機とフリーダム、直掩機にジャスティスを配置すればM1の狙撃能力をさらに活かせる。後は遠雷を装備したストライクも居れば足止めはできるだろうさ。敵艦も狙えば良いだろうし」

宙域図を見てカガリがボヤク。快速艦であるナスカ級を率いるクルーゼ隊がいる事

を鑑みてマリユも苦い顔をするが、スバルが何という事もないと言わんばかりに作戦を提案する。先のオーブ防衛戦の際も、連合軍は素人目に見ても損害を嫌っているとか思えない作戦をとっていた。これは連合（というかは最大勢力である大西洋連邦）の最終目標がプラントの破壊、ひいてはコーディネーターの殲滅である以上、それ以外の戦いで戦力を失う事をひどく嫌っている為である、と判断できる為であった。

「ヴェサリウスの方は俺とシホ、ムーンウルブス、ディアツカで充分行ける。少数で多数の敵とやるのは慣れているからな。ああ、ディアツカにはナスカ級の脚を狙ってもらいたい。エターナルがティアナ二尉とデュランダル博士を回収したら、連合の部隊を突破して現宙域を離脱する。最悪連合にクルーゼ隊の相手押し付ければいい」

「容赦ねー……」

ヴェサリウスを自ら担当する事を告げ、ブリッジから出て行くスバル。その冷酷なまでの声を聞いて、通信越しにムウが思わず口にする。ムーンウルブスと呼ばれるスバルのかつての部下達の戦術を聞いていただけに、カガリは思わずZ A F Tの兵士達に同情するのだった。

↑↑↑↑↑

イズモとアークエンジェルがメンデルのドックから発進し、隊列を組むと連合を迎撃する態勢を整える。エターナルはメンデルで情報のサルベージを行なっているデュラ

ンダル博士を待つ為、ドックで待機する。

「スバル君とこうしてまた一緒に戦えるのは、素直に嬉しいものだね。ミハイル機出るぞ」

「確かに。元所属していた陣営が相手とはいえ、容赦は無しだ。分かっているな？ 姫ちゃん」

「分かっているわよ！ 後、姫ちゃん言うな！ アカネ機出るわ！」

「このやり取りも随分と久しぶりだねえ。ヘルベルト、マーズ行くよ！」

「あいよ」

「積もる話は生き抜いてから、つてな！」

そんな待機中のエターナルから、次々と独自のカスタマイズがなされたゲイツが発進する。その機体が前もってイズモから発進していたスバルの試製一号機（高機動戦装備）、ディアツカのバスター、シホの専用ゲイツに合流する。

「今回はフネの脚を潰すことに集中する。別に撃破する必要はない。対艦戦が可能なディアツカ、ミーシャ、姫がキーマンだ」

「ではヴェサリウスは私と姫で脚を潰します。ディアツカ君は離れた位置にいるヘルダーリン、ホイジンガーをお願いします。ヒルダ達が君の直掩を担当しますので、安心してください。バスターの火力なら、二隻の脚を手早く潰すのは容易でしょう」



「了解。……感謝する」

スバルが手早く方針を告げる。それを受けてミハイルが担当を割り振って行くと、その気配りにディアツカが小さく感謝する。

「ヴェサリウスは妙に迂回する軌道をとっているな……。下手したら連合との戦域に入っちまいそうだ」

「あるいはそれが狙いかもな。クルーゼの狙いがわからん以上、あらゆる可能性を考えておく必要があるぜ」

二手に分かれたナスカ級の予測針路を見て、ヘルベルトが顔をしかめる。マーズが眉をひそめながらも注意を促すと、見えない“何か”を見据えようとナスカ級がいる方面を睨みつける。

「後は臨機応変に、ってヤツだ。ディアツカはナスカ級の脚を潰したらエターナルと合流、そのまま直掩に付いてくれ。エターナルがティアナとデュランダル博士を回収したら現宙域を突破する。ヒルダ、言うまでもないだろうが、機を逃すなよ？」

「了解だ」

「任せておきな」

「この軌道……。やはりヴェサリウスは連合軍側に接近してるわね」

スバルが気持ちを切り替えるように指示を出す。それにディアツカが答え、ヒルダが

了承すると、明らかに陽動するように停止しているナスカ級二隻を狙撃可能な位置に、ディアツカのパスターを先導するようにデブリ帯の中を移動して行く。それを見送っているながらもシホが嫌な雰囲気を感じ取らなくてもせよ、ボヤク。

「あるいは何か別の狙いがあるのかもな……。ミーシャ、姫、少しばかり予定変更だ。最初にヴェサリウスのスラストターではなく主砲とVLS、レールガンを狙撃して欲しい。シホはミーシャと姫の直掩に」

「クルーゼの狙いを見極めるため、ですね？了解です」

「了解」

「JOSSH-Aでも何かしていたらしいし、見極めは必要だな」

シホのボヤキを聞いて作戦に修正を加えるスバル。ミハイルも気味の悪さを感じるのか素直に頷くと、アカネとシホのゲイツと共に狙撃ポイントにデブリ帯の中を縫うように移動を開始する。ヴェサリウスの頭上から強襲できるように移動を開始したスバルに続きながら、リコも不気味さを感じ取っていた。

＋＋＋

”彼女”の声が戦場に響いたのは、スバルとリコがヴェサリウスに強襲をかける準備が整い、スバルとリコの機体が強襲の為に加速を開始した瞬間だった。ヴェサリウスから射出された脱出用のランチに戦域に居る全員が眉をひそめる中、”彼女”は必至に言

葉を紡ぐ。

「私、戦争を終わらせる”鍵”を持っているわ!だから、助けて!」

「この声はアルスター二等兵か・・・!?キラ!こちらの方が近い!彼女の救助には俺が向かう!クルーゼが出てきたら、奴を抑えてくれ!リコ、バックアップ!」

「分かっている!」

「っ・・・!分かった・・・!」

「エターナルも脱出準備が完了、これより連合の艦隊を突破し、アメノミハシラに帰還する!M1隊に連絡!こちらでダミーを爆破します。ですがその前に敵MSの一時的な排除を!みんな、ここが勝負所よ!」

戦場に響いた全域通信の声の正体にいち早く気がついたスバルが、真つ先に行動を起こす。キラへ指示を出しながらもフレイ・アルスターが乗るランチを回収するべく、近場のデブリを蹴り飛ばして機体の軌道を急激に変更しつつ、最大出力で宇宙を駆ける。連合の部隊に砲撃をしていたキラも、苦虫を噛み潰したような声音ながら了承すると、デブリ帯を縫うようにヴェサリウスに向けて移動を開始する。

一方でアークエンジェル側もエターナルからの連絡を受け、行動を開始する。イズモからの指揮で前衛を担当していたアストレイ隊が陣形を手早く変更し、マリユートの指示でダミーバルーンの起爆準備が整えられ、M1隊の動きに対応できずに動きが鈍ったス

トライクダガーを、遠雷を装備したアストレイが敢えて脚部やスラスタを狙撃する事で、足手纏いとなる機体を作り出して行く。

こうしてL4宙域にあるメンデルでの突発的な戦闘は大きな動きを見せるのであった

## P H A S E — 2 7

† † † † †

大西洋連邦を中心にした部隊とオーブを中心にした部隊の戦闘を混乱させるかのようにならぬようにZ A F T軍のクルーゼ隊の旗艦ヴェサリウスから唐突にランチが射出される。そしてそのランチに乗っていたのはJ O S H — Aで転属命令を受けたはずの少女“フレイ・アルスター”であった。

クルーゼの狙いを知るため、そして何よりフレイを保護する為にオーブ軍のパイロット“スバル・クロガネ”は彼女が乗る救命ランチを回収するために行動を開始する。

† † † † †

「回収のチャンスは一回こっきり。二度目はない……！」

「嫌な予感がする。連合側に回収させちゃならないね」

フレイが乗るランチを回収すべく機体を駆るスバル。それに続くリコも嫌な予感がする、と険しい表情で愛機を操る。連合側もフレイの言葉に興味を持ったのか、回収すべく機体の一部をランチ側に回していた。

「新型らしき機体1、未確認のダガータイプ1、ストライクダガー25……いや、こ

れでストライクダガーは20か。どれもユーラシアの認識コード……。リコ、ランチは任せる」

「了解。ヴェサリウスへの攻撃は完了したみたいだが……。ちつ。ヴェサリウスから出たゲイツとデュエルを追うように姫達が追走中か」

ランチに向かう部隊を見てスバルが試製ビームシヨットガンを先頭を行く新型機に牽制も兼ねて放ち、更に加速しつつ近場のデブリを蹴り飛ばして右に移動しながら試製ビームシヨットガンを二連射。牽制のビームを回避した新型機と異なり、スバルの機体の急激な機動に追従できなかった複数のストライクダガーがビームの散弾で一気に爆散する。

リコはランチに向かっていた敵部隊がスバルに背を向ければ即座に彼に撃たれると理解してスバル機の対応に集中した、と判断するとそのままランチを回収すべく機体を加速させる。しかしながらリーダーにこちらに接近してくる二つの反応を捉え、思わず舌打ちする。

「シホはデュエルを抑えろ！ ミーシャと姫はフリーダムが支援に入るからそのゲイツを頼む。適当に相手すればいいからな！ 特に姫！」

「分かっているってーの！ ミーシャ合わせるわよ！」

「任せてください。リコ、貴女にランチは任せますよ」

「了解。あの人の弟子だもの……役目はきっちり果たしてみせる……!」

接近してくるデュエルと明らかに専用機であると分かるグレーのゲイツの足を止めさせるように自身専用にかスタマイズしたゲイツの右手に装備しているキャットウスを振り向きざまに二連射、その反動を利用して再反転してリコはランチの回収に向かうのであった。

+++++

リコにランチの回収を任せたスバルはいきなり味方機が撃破された動揺からか動きが鈍くなっているストライクダガーを乱戦下に引き込むべく移動先にあったデブリを蹴り飛ばし、絶妙なバランスの加減速をもって突撃を敢行する。

「お得意の物量戦も、こうまで肉薄されたら意味がないと貴様達は学習するべきだな。……いや、MSの技量も戦術も未熟なだけか」

「貴様……!」

ストライクダガーも、スバルの機体を寄せ付けまいと必死にビームライフルを連射するが、連携もない射撃ではスバルの緩急をつけた加減速による突撃には意味をなしておらず、新型機はストライクダガー隊の出鱈目な乱射によるフレンドリーファイアを避けることに手一杯であった。

「残り5」

「貴様らは後退して艦フネを守れ！アルテミスの秘蔵っ子！手を貸せ！」

「五月蠅い！俺に命令をするな！」

未確認のダガータイプが何とか統制を取り戻した時、25機居たストライクダガーは僅か5機まで撃破されていた。未確認のダガーのパイロットである”モーガン・シユバリエ”がストライクダガーの生き残りを後退させるために牽制にビームライフルを放ちながら新型機ハイペリオンに連携を要請する。

新型機ハイペリオンを操る同じユーラシア連邦所属のコーデイネーター”カナード・パルス”はそんなモーガンの要請に反発。ストライクダガー隊が引いたことをいいことにスバルの機体ビームサブマシンガンにザスタバ・ステイグマトを乱射しながら接近して行く。

「悪いが、逐一相手をする義理はないんでな……」

「バカな……！この俺が、このハイペリオンが手も足も出ない、だど!？」

新型機の放つビーム弾の雨を緩急をつけた加速で回避したスバルの操る試製一号機は、その加速を維持したまま新型機ハイペリオンの右脚部とザスタバビームサブマシンガン・ステイグマトを保持していた右腕、更にはバックパックの一部を機体を捻るように動かし、すれ違い様に両手に持ち替えた対MS戦用グラディウスで挟みこむように叩き斬っていた。

「秘蔵っ子！今すぐ後退しろ！」



「くっ……」

「アレは……」

対MS戦用グラディウスを持つ際に手放していた対MS用試作型ショットガンと試製ビームショットガンをバックパックから伸びる戦闘用サブアームが保持した事を見たモーガンが57mmビームライフルを連射しながら新型機ハイペリオンの退避を支援する。放たれるビームを回避しながら未確認のダガータイプハイペリオンと新型機へとサブアームが持つ試製ビームショットガンがビームの散弾を放つが、それはは新型機ハイペリオンの左側に展開されたモノフエーズ光波防御シールドアルミユレリユミールによって防がれる。

「アルテミスの傘……。これは少し厄介だな」

「やはりあのマーク……」

新型機ハイペリオンの防御性能に、突破の厄介さを感じ取り眉間にシワがよるスバル。そんな彼の機体の右肩を見たモーガン・シュバリエは、怒りに身を任せそうになる自分を必死に律していた。エル・アラメインでの攻防戦以来、モーガンの部隊が乾坤一擲の作戦を行おうとするたびにそれを絶妙なタイミングで邪魔する部隊と、その隊長機と思わしき機体に描かれていたパーソナルマーク。モーガンにとって、そのマークはまさに死神にも等しい存在であったのだ。

スバル達ムーンウルプスの面々が戦闘を開始した頃、地球連合の部隊を足止めすべく交戦中のアークエンジェルに、連合の新型艦から通信が入る。不審に思いつつも、時間稼ぎが目的であった為マリューは通信を繋ぐ。通信相手はJOSH—Aで別れたかつての副官“ナタル・バジルール”であった。

「……お久しぶりです。ラミアス艦長」

「久しぶりね、ナタル。貴女が新型艦の艦長なのね」

「ええ。アークエンジェル級の二番艦“ドミニオン”の艦長に任命、少佐になりました」  
「おめでとう、バジルール少佐。再会がこのような形になったのは非常に残念ね」

表情の堅いナタルに対し、穏やかな笑みを浮かべるマリュー。そのマリューからの言葉に、思わずナタルは声を荒げる。

「何故ですか!?!何故、貴女達は生き延びたのに軍に戻らなかったのです!?!」

「それは貴女が一番理解していると思うわ、ナタル。私達は“地球連合”ではなく、あの作戦で指揮をとっていた“大西洋連邦”に強い不信感を抱いているの。連合と一口に言っても、最も政治的な力を持つのは大西洋連邦。その大西洋連邦に不信感を持つてしまった以上、私達は大西洋連邦が舵をとる“地球連合”という組織に戻ってJOSH—Aの時のように捨て駒にされるのは真つ平ごめんなのよ」

声を荒げるナタルに対し、マリューは決然とした表情で答える。そんな中、とある男

が笑いながら通信に割り込む。

「あつはつはつは。艦長さん、ならばアレは敵です。敵ならば撃たなくてはならない。そうでしょう?」

「アズラエル理事! そうなつたのはあなた方大西洋連邦が原因のはずだ!」

「ですが、今、貴女は我々大西洋連邦の艦の艦長だ。ならば我々の命令に従つて貰いましょうか?」

「あの男、確かブルーコスモスの盟主だつたはずですよ。あんな軍人でもないヤツがバジルール少佐の上役だなんて……」

アークエンジェルと通信が繋がっているにも関わらず、言い争いを始めるナタルとアズラエル。それを見て小声でノイマンが嫌悪を示す。

「艦長、エターナルから連絡きました。いつでも行けます」

「ならチャプスモークを装填。掠めるように離脱します。エターナル、イズモ、ムーンウルプスの面々にも通達を」

未だに繋がつたままの通信先で言い争いをしているナタル達を傍目に、チャンドラが小声で告げる。マリユも心得たとばかりに小声で告げると、困つた表情で通信先の画面でアズラエルに噛み付くように糾弾を続けるナタルに声をかける。

「ナタル、悪いけど、我々はこの戦争を一刻も早く終わらせるため、そして何よりも自分

自身に恥ずかしくないように行動します。だから、貴女も自分に恥ずかしくない判断を  
して」

「ラミアス艦長……！」

マリユートの声に、思わずナタルは思わず口を噤む。そんな彼女が何かを言う前に、  
アークエンジェルの後方から放たれた高出力のビーム砲がドミニオンの右舷ゴッドフ  
リートを吹き飛ばす。

「ラミアス艦長、待たせてすまないねえ。信号弾放て！現宙域を離脱する！」

「イズモよりM1隊！敵を牽制しつつアークエンジェル、イズモ甲板に着艦、敵を寄せ  
付けるな！」

ドミニオンの右舷ゴッドフリートを吹き飛ばしたのはメンデルから発進したエター  
ナルの甲板に着艦したバスターの超高インパルス超射程狙撃ライフルであった。

そんなバスターを甲板に乗せたまま突き進むエターナル。艦長のバルトフェルドが  
矢継ぎ早に指示を出すのと同時に、イズモからもキサカが指示を飛ばす。こうしてメン  
デルでの戦闘は次の段階に移行するのであった

## PHASE—28

† † † †

終戦への道を模索する為に集ったアークエンジェル、イズモ、エターナルの各艦から一斉に照明弾が打ち上げられる。それを確認したムーソウルブスの面々はかつて地上で味方からすら畏怖の念を抱かっていた一体感で動き始めるのだった。

「撤退信号……！ 姫、ミーシャ、エターナルに追従する形の機動戦で足止めを行う！ リコ、時間切れだ！ シホはソレデユエルASの対処任せる！ キラ！ 今は引くぞ！ 期を待つ！ お前は先にアークエンジェルへ戻れ！」

「了解ですよ」

「全く無茶振りしてくれるわね！」

「ちつ……！ この※放送禁止用語狂乱者共さえ居なけりや……！！」

「……っ。はい！」

「フレイ……！ 絶対に迎えに行くから……！」

信号弾を見た瞬間、ユーラシア所属の部隊を牽制していたスバルが手早く指示を出す。その指示を受けて真ミーシャ先にミハイシヤルとアカネ姫の二人が動きを見せる。ゲイツに砲

撃重視のカスタマイズを施された2機はその重武装化による重量を感じさせない滑らかな動きで一度エターナルに向かう。その際にヴェサリウスのメインスラスターをミハイル専用ゲイツが両腰部のエクステンショナル・アレスタ―EEQ7Rの代わりに搭載された120mmレールガン「インドラ」でヴェサリウスの右舷スラスタ―を撃ち抜いたため、追撃をしようとしていたクルーゼはヴェサリウス艦長のアデスからの要請で止むえず追撃を中止して母艦を守らざるを得なくなる。

一方シャトルを回収しようとしていたリコはドミニオンから発進した新型GATシリーズの足止めを受けていた。味方であるはずのストライクダガーをリコが盾にすればそれを躊躇いなく撃ち、残弾やエネルギー効率を全く考えないその攻撃に、下手に動けばシャトルに被弾しかねないと判断したりコは、大胆かつ慎重に挑発しながらエネルギー切れを待っていたのだが、それより先に撤退のタイミングが来てしまったのだ。苛立ちながらもスバルから回されたメッセ―ジをシャトルに送ると、近場に漂っていたストライクダガーの残骸を蹴り飛ばして簡易の盾にしてその場を離脱、スバル機の方に向かう。

また、クルーゼのゲイツをミーシャ達と共に抑えていたキラも、スバルの声音から本当に彼が断腸の思いで告げたことを理解し、悔しげな表情ではあったが、ランチに通信を送り反転するのであった。

↑↑↑↑↑

シホは歓喜の声音を隠す事なくしつこく追跡してきた敵であるデュエル A S に  
アサルトシユラウド  
 相対すると、左手のビームM A I M 2 I Gライフルを放ち、距離を取ろうとする。デュエルのパイロツ  
 ト「イザーク・ジュール」は混乱しつつも必死に機体を操り、その射線から逃れるが、  
 決して追跡を諦めようとはしなかった。

「何故……何故だシホ！何故貴様が……！」

「もう、私はあの男の私兵に成り下がるつもりはない！何も知ろうともしない  
 貴様に話すつもりはない！」

啞然とするイザークに向け、決別の言葉と共に左右の手からそれぞれ三連射された  
 ビームM A I M 2 I Gライフルが僅かに反応の遅れたデュエルの右腕と頭部、左脚部を連続して破壊す  
 る。大破したデュエル A S を見送り、シホは機体を操りスバルと合流をするべく移動す  
かつては敬愛していた男  
 開始する。

一方で撤退信号を見たスバルの動きも早かった。矢継ぎ早に指示を出しながらもサ  
 ブアームに保持した試作ビームシヨットガンと対 M S 用試作型シヨットガンで簡易的  
 な弾幕を形成し、新型機がモノフェーズ光波防御シールドで未確認タガタイプを守る  
ハイベリオン  
 隙に新型機の破壊した右腕と武器、バックパックの一部を鹵獲し、その場から離れるの  
 であった。

†††††

遠方からの狙撃で混乱するドミニオンのブリッジ。しかし新型機フリーダムの機體が目的に興味があるアズラエルは損害を外度視しても追撃を指示、艦長として反対するナタルを強権を盾に自らの意見を押し通す。スモークをばら撒き、デブリ帯を盾にするように離脱しつつあるアークエンジェル、イズモ、エターナルを追おうとしたストライクダガー隊がデブリ帯に差し掛かった瞬間、エターナルにて最低限の補給を最優先で受け、再発進した重砲撃戦力スタムのゲイツを操るミハエルミハエルとアカネアカネのインドラによる狙撃を受け爆散する。

さらに追跡の為にドミニオンと併走していたアガムノン級の一隻“アケチ・ミツヒデ”のゴッドフリートが戦域を回り込んできたマーズ機のマルミアドワーズで破壊され、スラスターをヒルダ機が装備するティグリスに、ミサイル発射管をヘルベルト機が装備するキャットウスで破壊され、艦の軌道が逸れてドミニオンと接触する。なおも追撃しようとする指示をアズラエルが出そうとした瞬間、後方から接近してきたシホ、リコの二人がドミニオンのメインスラスターを行き掛けの駄賃と言わんばかりにキャットウスで艦が爆散しない程度に破壊してゆく。

†††††

立て続けに被害を受けたドミニオンは、これ以上の被害を防ぐため、追撃を取りやめ、ストライクダガーを纏めて防御の陣形を敷くために指示を飛ばす。しかしながらア



クエンジンエルやイズモが撤退間際にばら撒いていったチャフスモークの影響もあり、指示の変更が行き届いた部隊は全体の3割程度でしかなく、残りの7割の部隊は最初にアズラエルの出した追撃命令に従ったままデブリ帯に突入、先行していたミハエルとアカネ<sup>姫</sup>のkastamゲイツの狙撃で足止めされた所を追いかける形で来たスバル、リコ、シホ、ヒルダ、ヘルベルト、マーズの連携で部隊間の連携をスタスタにされて各個撃破を受ける。スモークの煙が晴れた時、ドミノオンの艦長”ナタル・バジロール”の元に届けられた報告は、追撃を行おうとデブリ帯に突入したストライクダガー隊の8割が撃破されたという、事実上の全滅報告と、保護したシャトルの少女が、JOSH—Aで行方不明になっていたフレイ・アルスターであるという二つであった。

## PHASE—29

+++++

メンデルを離脱したアークエンジェル、イズモ、エターナルの三隻は展開していたMSを回収後、一路アメノミハシラを目指していた。しかしその最中、ある情報が入り通信を介しての緊急の会議が行われていた。

「アメノミハシラのミナ・サハクからレーザー通信を用いた緊急連絡があつた。彼女の弟で行方不明だつたギナ・サハクの元から離反した人物からの情報で、ギナ・サハク本人が私やカガリを艦諸共に消すため、この先で待ち構えているようだ」

「プロトアストレイ一号機、通称ゴールドフレームに回収したブリッツのパーツを組み込んだ改造機を操るとの事。当然ながらミラーージュコロイドも使用可能だそうよ」

通信を受けたクサナギの艦長“レドニル・キサカ”が情報を提示すれば、クサナギの格納庫でM1の調整をしていたエリカ・シモンズが補足を入れる。

「とはいえアメノミハシラでスバルさんやニコル君の機体の最終調整をしないとならぬ以上、この航路を避けるのは時間のロスが大きすぎる。先の戦いでドミニオンにそれなりの損傷を与えたとはいえ、時間的余裕があるとは言えないわね・・・」

「とはいえ情報通りならギナ・サハクの腕や機体特性から鑑みても生半可な腕じゃ返り討ち。数もミラー・ジュコロイド相手じゃ逆に不利になっちまうな……」

アークエンジェルのブリッジで艦長のマリューとムウが困ったように意見を述べる。アークエンジェルのブリッジクルー達も何か策がないかと頭を働かせる。

「ミナ・サハクから、機体の撃破許可も出ている」

「ならば少数精鋭による逆奇襲による速攻戦しかないだろうな。俺が前衛、ニコルが後衛だ」

補足としてウズミが情報を出すと、既にパイロットスーツに身を包んだスバルがアークエンジェルの待機室から通信を入れる。その内容にマリューらは啞然とする。

「スバルさん、貴方は……」

「エリカから聞いた話ではヤツは他のプロトアストレイを攻撃したことがあるらしい。俺やニコルの機体も一応はプロトアストレイの流れを汲んでいる。必ず食いつくさ。ここであまり時間をロスしたくない」

マリューの言葉を遮るようにスバルが意見を述べる。その表情を見たマリューは諦めたようにため息を吐くと、通信越しではあるがウズミに目を向ける。

「スバル一佐、済まないが頼めるか？元を正せば我々オーブの政治的な対立が原因ではある。が、彼の思考は現在のミナ・サハクとすら袂を分かつたもの。野放しにはできない

「い

「了解です」

「スバルさんとニコル君の機体を出すわよ。その後艦の速度はこのまま、第二戦闘配置を維持します」

ウズミも通信越しではあるが頭を下げる。スバルが了承して通信を切ると、マリユーは手早く指示を出すのであった。

＋＋＋

アークエンジェルから発進したスバルの試製一号機が先行し、ニコルの二号機が後に続く。二機とも近距離戦になる事を意識した試作パッケージを装備しているが、今回はあえてプロトアストレイのIFFを使用している。

「こんな子供騙しに引っかかるんですかね？」

「聞き及んだギナ・サハクの性格なら間違いなく食いつく。……ゴールドフレームは極力損傷させずに確保したいものだが……」

毘だど丸わかりなIFFの変更には思わずニコルがボヤク。だが、聞いていたギナ・サハクの性格上、感情的に動くであろうと予想したスバルは苦笑しながらも油断せずに機体のモニターを見ている。

「通信だと・・・?」

「反応はザフト軍のナスカ級ですね。広域の緊急救難信号みたいですが・・・。見えな  
い敵からの攻撃つてまさかゴールドフレームのミラージュコロイド・・・!?!」

「先行する!ニコル、バックアップ頼む!」

唐突に二機の通信機にノイズ混じりではあるが慌てたような声が届く。冷静に通信  
を分析したニコルだったが、通信内容から判断した襲撃者の正体に思い至り啞然とす  
る。

ニコルと同時にその正体に行き着いたスバルは機体を加速させる。ニコルもスバル  
の機体をサポートできる距離で続くのであった。

＋＋＋

ナスカ級からの救難信号が発された宙域に二機が到着した時、そこに居たのは禍々し  
い気配と称するに相応しいシルエットを持つゴールドフレーム魔改造機と航行機能を奪われ、今まさに撃  
破されても不思議ではないナスカ級と、武装だけが破壊されたのかナスカ級を機体を盾  
にしても守ろうと展開する複数のゲイツだった。

「させるか・・・!」

「そこまでですよ・・・!」

「何!?!」

スバルの操る試製一号機が重ショットガンと収束モードに切り替えたビームショットガンを放ち、さらにニコルの試製二号機が回避方向を遮るように試作型テレスコピックバレル延伸式対艦ビームスナイパーキャノン”カグラ”を放つ。甚振るようにナスカ級をレーザーライフルで撃っていたゴールドフレーム<sup>アマツ</sup>天のパイロット”ロンド・ギナ・サハク”はレーザー上のIFF情報に気を取られた為、バックパックの武装”マガノイクタチ”が両方とも被弾する事になる。

「私の知らない”アストレイ”だと!?’

「言葉は最早不要。ミナ・サハクの命により、討たせてもらおう・・・」

焦りと憤りが合わさった声音と共にレーザーライフルを乱射するギナ・サハク。スバルは敢えてそれに答えるようにオーブ軍の通信帯で宣言すると、バレルロールでレーザーを回避しつつ広域モードでビームショットガンを放つ。

「ミナの命、だと・・・!?’

「道は違えられた、という事だ。覚悟は出来ていたのだろうか?」

放たれたビームの散弾を動揺しつつも回避するギナ・サハク。それを追い込むように重ショットガンから対MS用に開発された散弾を放ち、バックパックに搭載されている戦闘用サブアームが保持する、連合側の追加装甲”フォルテストラ”すら蜂の巣にできると保証されている対MS用最終試験型65mmアサルトガンポッド”イナツマ”が

回避を許さないと言わんばかりにばら撒かれる。

「っ……おのれえ!!」

重シヨットガンの弾頭を機体の頭部に被弾し、不完全な視界モニターに悪態を吐きながらもトリケロス改で放たれた“イナヅマ”の致命的な弾丸の嵐を防ぐギナ。ミラージュココロイドの起動を許さない弾丸の雨は徐々にギナの正気を削りとってゆく。

「私は世界を……!」

「油断大敵でしたね……!」

ギナ・サハクがスバルの試製一号機に注視しすぎていた事を見切ったニコルの操る試製二号機が、戦場を回り込みながらスラストターを全力稼働させたことによつて可能となつた神速の踏み込みと共にゴルドフレームアマツ天の胴体右側に十二分に加速の乗つた蹴ヤクザキックりを叩き込む。

「さよならだ……!」

その衝撃で一瞬とはいえ意識がとんだギナが血走つた瞳で最後に見たのは機体の視界モニター一杯に映る試製一号機の真紅に染まつた死神モアイとその右手に逆手で握られた対装甲コンバットナイフ“アーマーシユナイダー”であつた。